

俗事を持ち込まれて、心持まで無シヤ苦シヤして居る時——起つて、強い中心鍛冶の操練を行ふこと、一回、二回、三回——するさ、メン——メン——メンさ、放つた糸を、手繰るが如くに、我が心は我が裏に、収まつて来る。そして、體力と心力が、ピシツと、我が正中心で、一緒になつた、其の瞬間、或る種の活きた力は、我が中心から、電光の如くに、迸り出て、ガツチリと、現實の一切に合致する。太陽、空、雲、山、海、森の一切さ、さうして其の中に澎湃たる、宇宙生命の裏に、連なつて行く。

驕つて更に此の中心點を、打ち壞して、叩き捨て、仕舞へば、其處にはもう、タイムなく、スペースなく、歴史なく、哲學なく、天もなく、我もない。善悪なく、羈鎖なく、差別なく、得失もない。廓然として無始無終、無涯無窮である。

莊嚴、崇高、清浄、神秘の極致である。見渡す限り爛漫として、咲き亂れたる、花のトンネル花吹雪である。右も左も上も下も、金銀珠玉で纏められて居る。何處までが現實か。何處までが夢か。餘りにも美しく、餘りにも偉大である。

これこそは、最も充實した空虚の道だ。鮮やかに醒めた、陶酔の世界だ。興奮と沈黙との、絶頂である。時空を絶した永遠の神仙境である。眼前にある山も、森も、草も石も、水も、土も、忽ちして悉く、五色の彩光を帯びて来る。人家も、船も、鳥も、蝶も、喜びと生命とを織り込んだ、光の雲に包まれて居る。而も一層ハッキリと、活々して居る。ハッキリと鮮やかに、映つて居りながら、一切は空だ。一切は空だが、光と喜びと生命とは、漲り溢れて居る。さうして此の身は、まるで、靈光燦然たるダイヤモンドの神殿である。自分こそは正しく、地球上最大の幸福者だ。

無上の祝福者ださ痛感せざるを得なくなる。

茲に於てか、天上天下、唯我獨尊の感が起る。而も本我の中心に、活ければ、万人悉く唯我獨尊だ。万人悉く、最大無上の幸福者となる。「万人悉くさ、最大無上さは一致しない」と、論難の聲を發するか。形骸の末端に、拘々たること勿れ。大道の絶対境には、比較もなければ、矛盾もない。大自由である。大自在である。大我は即ち、無我である。

▽始めてある終りである

私は中心を鍛へる時に於ては、先づ私の一切をこれに捧げる。身も心も、——生命も、魂……も。しかく全心全力を集注して、強大な大中心力を振ふ時、私は三十有餘年前、身體改造途上に出發した時さ、少しも變らぬ熱心サと、力の入れ方さをして居る。

然り。青年の熱心だ。青年の努力だ。青年の精進だ。青年の希望だ。青年の眞實だ。青年の純眞だ。サウだ。それ程、若い力が全身に漲つて来る。

姿勢を正して、我が中心の覺醒した時、其處には、何時も新しい、何時も若々しい、何時も麗しい、何時も滑らかな何時も充實した力が、湧き溢れて来る。

其の瞬間、眼前の大自然は、忽ちして、我が中心に、確りさ、据はつて来る。不思議な別箇の世界は、眼前に現出する。まさに是れ、天地の精に、我が生命が、直に流通する神境である。我が心は油然として、春霞に包まれたるが如く、その感激の涙に、双眸の潤ひ来るのを覺えないことさへも屢である。

思へば永の年月なるかな。殊に最近の二十年間、草澤の間に埋まりて、沈黙の生を送り、教へず、説かずとも、獨り潜かに、衷なる中心を叩き鍛へることは、一日と雖も怠らず、其處に幽玄無窮の新境を開拓し、洪大無邊なる天父の聖恩に、感泣して居る。

オ、さうだ。自分は死に至るまで、中心の一點を叩き／＼と直進すれば、それで良いのだ。何の目的？其處に一派を樹て、塵世に呼號せんが爲めか。虚名を得んが爲めか。奇利を博せんが爲めか。ノー。ノー。否。否。否。つまらん。そんな事を……。武器は、満を以て攫へり、權滿は空を以て全し。烈士は千乗を讓り、貧夫は錢厘を争ふ。人品星洲なればなり。而も名を好むは、利を好むに殊ならず。將相は家國を營み、乞人は糞を食ふ。位分書讀なればなり。而も、思ひを焦すは何ぞ聲を焦すに異らむ。故に至人は寧ろ無に入つて有に居らず。我が中心を修むるのは其れ自體が初めであり終りであるのだ。其れ自體が希望であり目的であるのだ。元來正中心其のものが虚無の眞境である。即ち私は只中心を修めるだけなんだ。修めてさうする。修めてさうなる。それは只自然をして自然に任せしめよ。内外の一切を擲つて己の眞を知り自他の凡てを捨て、己の尊きを悟る。

▽移りて止まぬ一切諸行

「大江日夜流る。決々たる河水音も立てず靜かに息まずに流れ流れ流れて限りなく流れる。逝く者は斯の如きかな。億万万年の昔より億万万年の後に至るまで無限のスペースを、流れ流れて限りなく、流れ行くタイムの流れも亦、晝夜を舍かず。あゝ白帆が見えて來た。前を過ぎ行く。過ぎ行く。もう見えない。ローマの大帝國も斯く過ぎて仕舞つたの

ではないか。あゝ笹の葉が流れて來る。チラリとする。もう見えない。アレキサンダー、ナポレオンも斯の通りであつた。彼等は何處に在るや。溶々として溶々として大江は日夜に流る」。

昭和十年四月二十九日筆を擲つて庭前の岸の上に立つた。天長節で日の丸の旗が家々の屋根の上に飄つて居る。溶々たる海の上を汽船やモーターボートが流れて行く。春霞が爛る縣道をバスやタクシーが滑べり走る。下田では黒船祭をやつて居るから祭日と日曜と重なつた今日は交通が一層頻繁な譯だ。

默然として佇んだまゝ、これを見下して居た私は曾て愛讀した蘆花の美文「大河」の一節を想ひ出したのである。茲に掲げたものは記憶によるのであるから字句は多少は違つた處があるかも知れない。が大體は同じつもりである。

私は今、無形のタイムを標徴する眼前の光景を眺めて、逝くものは、斯くの如きかなの、哀感に堪へなかつた。ア、逝く者は斯くの如きかな。晝夜を分かす。「諸行無常、如露如電、泡沫夢幻」。万物は絶へず流動し、絶へず變轉して居る。優人粉を傅け、碓を誦へ、妍醜を毫端に效すも、俄にして歌殘し、塙龍めは、妍醜何ぞ存せむ。亦は先を争ひ、後を競ひ、雌雄を著子に較ぶるも、俄にして局盡き、子收まれは、雌雄安くにかある。

「流れて止まぬ人の世を、水の姿にたさふれば詩人は岸に佇みて、花摘む人に似たる哉。摘みて浮ぶる花びらの、紅き行衛を問ふ勿れ。水面を飾る瞬間の、命に我れは生きてこそ」。ア、大江の水、日夜に流る。「茲に白日又來りけり此の日本還より來り夜と共にまた永遠に去る。人未だ曾て此の日を見ず。去つて再び之を見る者なし」。ヘトマス・カーライル

此の間に親に逝かれる者もあれば兄弟に死なれる者もあるたらう。子を失ふ者もあれば骨肉の病に憂愁の眉を顰める

者もあるたらう。職に離れて。悶々する者もあれば、事業に失敗して、妻子と共に、路頭に迷はむとする者もあるたらう。人情世態、倏忽万端、認め得て、太だ真なるべからず。昔日我と云ふ所、而今却つて是れ伊れ、知らず今日の我れ、又後來の誰にか屬せむ。

「讀むべきかな。主の名によりて来る者、いさ高き處にホザナ」云、路に衣を敷き、花を撒き、棕櫚の枝を打ち振つた群衆の歡聲も、三日の後には、「除け。除け。十字架につけよ」の、怒號と變はる。

キリストやソクラテスのやうな聖人、吉田松陰や平野國臣のやうな、國士をさへも、殺して仕舞つた。イヤ僞聖人や僞國士ならば、俗界からは、ヤンヤと嘲し立てられるけれども、眞人は皆容しめられるものた。殺さぬまでも、「道行はれず、後に乗じて、海に浮はむ」云、悲痛の嘆聲を發せしめる。

社會の狀態も、政界の歸趨も、紛然雜然、目まぐるしく流轉して、懐たゞしい世相の、現實を曝露して居る。

移りて息まぬ一呎諸行、當にもならん人情の變轉、變らぬもの、動かぬものさては、何ンにも——無い。何も、……何も、刻、刻、刻、皆んな移り、皆んな變つて行く。

髮落ち齒疎らにして、幻影の彫謝に任せ、鳥吟じ花笑ふて、自性の眞如を識る。タツタ一つ、安住不變の秘境がある推理にあらず。想像にあらず。幻影にあらず。迷信にあらず。確乎たる事實として、嚴存するのた。

何だ？。何だ？。何だ？。何だ？。

眞理に活くる、聖中心、これである。「宮よりも大なるもの、此處にあり」云、云ふのが其れた。眞の神は、此の至誠の聖殿に宿り給ふ。「宮よりも大なる者、此處にあり」。これはキリストが、エルサレムの神殿を指して、云はれた

ものであつて、眞に命懸けの言葉であつた。當時ユダヤ人は、神殿の廊下へ、足を踏み入れた丈けでも、死刑にされた程、神聖視せられて居つたのである。だからソナ事は、正に命懸けの覺悟が無くては、言はれないのた。けれども命懸けの言葉を云ふ、確信を得るには、命懸けの修養を以て、衷心の至誠を磨かれたのである。

此の至誠の中心を、抱いて拜するならば、太陽に拜しても、石を拜しても、木を拜しても、水を拜しても、迷信ではない。木を通して、石を徹して、天の至誠の中心に、相通するからである。

この至誠の中心なくして、瀆罪を信じ、復活を信じ、救靈を信じ、涅槃を信するも、畢竟これ自己の、催眠的迷妄に過ぎないのである。

此の至寶は、他より求むべきものにあらず、他より教えらるべきものにあらず。他より與へらるべきものにあらず。其れは凡て、各人の裏にあるのた。耳根は颯谷の響を投するに似たり。過ぎて留めざれば、則ち是非、俱に謝す。心境は月池の色を浸すが如く、空にして著せざれば、則ち物我兩つながら忘る。

自ら「神の國」となり、自ら「淨土」となり、自ら「父と我とは一」となり、自ら「己身の彌陀」なること、是れ即ち、宗教の本義である。此處に、自己修養の必要が生じて来るのであつて、宗教問題も、健康問題も、其の根本を把握するの道は、もこそ是れ、一であらねばならぬ。卑きに居りて後に、高きに登るの、危きを知る。晦きに處りて、後に明きに向ふの、太だ露るゝを知る。靜を守りて、後に動を好むの、勞に過ぐるを知る。黙を養ふて、後に多言の跡なるを知る。惑ふ母れ。天に歸れ。自然に歸れ。天に歸れ。「空しき一夜の夢の世には響も實も觸むべしや。暫らく輝く世の幸樂しと見る間に響きに變らむ。主の名を心に永く記し響みの喜び充たし給へ」。

兄弟よ。浮き雲の如き目前の形象に心を奪はるゝこと勿れ。驕つて不動不朽の聖中心を、汝の衷に鍛えよ。キリストも、釋迦も、孔子も、ソクラテスも、親鸞も、道元も、日蓮も、活ける神聖として、來つて、汝の衷に、君臨せらるゝことであらう。健康問題の如きは下の下の下たる事柄であつて、ソナナものは、求めなくとも、塵芥の如くに、ラザロが拾つたパンの屑見たやうに、汝に投げ與へらるゝであらう。特に騒ぎ求める程の價値は、更にないのた。天地中の万物、人倫中の万情、世界中の万事、俗眼を以て觀れば、紛々各異るも、道眼を以て觀れば、種々是れ常、何ぞ分別を煩はさむ。何ぞ取捨を用ゐむ。

かくして自心の淵底を掀翻し、生死の命根を踏踏して、虚空清淨し、鐵山排くる底の大歡喜を得、胸襟分外に清涼に分外に傲然にして、万里の層氷裏にあるが如く、縦ひ亂軍の場に入り、歌舞遊宴の歌吹海に入るも、人なき處に在るが如く、雲門大師の氣宇、王の如しと道ふ底の大機は、求めざるに煥發せむ。

▽細路を進んで狭門を入れ

正中心の宇宙を、獨り躍進する時、絶大の光明、我が魂を撲ち、無限の歡喜、我が全身を徹る。私の目標は天であり、眞理であり、自己正中心の世界である。

かくして自ら、靈肉合致の第三帝國に君臨するの、主權者となる。イエス答へ給ふ。「わが國は、この世のものにあらず」と。爰にピラト言ふ。「されば汝は、王なるか」。イエス答へ給ふ。「汝の言へるが如く、我は王なり。我れ之が爲めに生れ、之が爲めに、世に來れり。そは眞理につきて、證せんが爲めなり。凡て眞理に就く者は我が聲を聽

く」。ピラト言ふ。「眞理とは何ぞ」。

眞理とは何ぞ。ピラトは不思議に思つて、問を出したが、現實に活きる彼と、高遠な眞理とは、没交渉である。彼は答を求めず、そゝくささ立つて、狂呼せるユダヤ人の前へ、出て行つた。眞理？。眞理の窮極は、理窟では、解るものではない。眞理は、眞理の中に活きて、是れを直観すべきものた。

私は黙々として、隠れたる密室の修養鍛錬を以て、進んで行く。人知らずして、怒らず。また君子ならずや。人の知る否と、世の用ふる否とは、私の關知する處ではない。私は只獨り、私我なき精神を以て、飽くまでも、飽くまでも宇宙眞理の奥殿に、直進するのみである。欲路上の事は、其の便を樂みて、姑らくも指を染むるを爲すこと母れ。一たび指を染むれば、即ち深く万仞に入らむ。理路上の事は其の難を憚つて、稍や退歩を爲すこと母れ。一たび退歩せば、便ち遠く千里を隔てん。

「富める人の、天國に入るは、駱駝の針の穴を、通るよりも難し」。「狭き門より入れ。誠に到る門は、大きく、其の路は、廣く、之より入る者多し。生命に到る門は、狭く、其の路は、細く、之を見出す者は、少し」。誠にさうだ。

正中心の一點に、到達する道は、幅も無ければ、厚さもない、無形の一線である。

至れば即ち、洪大無邊であるけれども、其處に通ずるの路は、細くして險しく、其の門は、高くして狭い。細き路を進んで、狭い門を這入る。其れには遠く、裏に向つて、潛かに、自ら修めなければならぬ。かくして本當に、充分に、確り完全に、正中心を養ふことが、出来るのだ。

だから問もなく、統一して虚無に、歸するとは云へ、私は矢張り、窓外の絶景に對して、練習するよりも、窓を締め

障子を閉ざして、獨り三疊の密室で、寂然として、默然として、練修する方が、一番よく、力が這入る。「安禪必ずしも、山水を須ひず」。「座中は見ず、庵前の物」。

パイロンの「シロンの囚れ」を他はせるやうな、陰鬱な道場に立つて、私は何時も、而して九年の心境を、想はざるを得ない。

ア、ア、密室の新禱、密室の銀鍊、唐行密修、密室獨修の聖樂、黙々として、獨り潛かに自ら修む。「さみたれや、ある夜ひそかに松の月」。「木がらしや、ある夜ひそかに雪の花」。精練苦修——密に——潛かに、ひそかに只獨り……。

▽涙ぐまじき修道心

心は、明鏡止水の如し。事に處するの秘訣は、平心にあり。けれども如何にして、明鏡止水の如き、精神状態たることを得るか。如何にして、平心たることを得るか。

心を練るは、形を整ふるに、若かず。其れには先づ、體から修めて、行かねばならぬ。體を修むるの、根本義とは何ぞや。中心を正しく保つにあり。只この一語に盡きる。「汝等先づ神の國と、其の正しきさを、求めよ。さらば其の他のものは、凡て汝等に、與へらるべし」。私は云ふ。「汝等先づ中心と、其の正しき力を、求めよ。さらば其の他のものは、凡て汝等に、與へらるべし」。

修めて純真無雜、明鏡止水の如き中心を得れば、「心の欲する處に、從へども、規を越えず」。ここに至れば、即ち

超道德なり。無道德なり。而して自ら道に合す。「道は通す、天地有形の外」。自由なり。自在なり。然れども非道德ではない。

道の極致は、純眞の二字にある。所謂善行美德と雖も、細工より出たものであるならば、其れは變ろ、醜惡な嘔吐である。純眞は、至誠である。「至誠は神に通じ、熱愛は人を動かす」。純眞を盡ふの捷徑は、中心を正しくするにあり。敢て肉體鍛錬の、根本であるのみならず。精神修養の秘論も亦、其處に伏在することを、私は斷言する者である。ここに於てか、「正身端坐、是即ち道」の一語中に、無限の妙趣と、不動の眞理とが、含まれて居ることを窺知することが出来るのである。

正身正坐、正身正立すれば、自己も環境も、忽然として一變する。呪はしく醜き世相も、黄金の露で、美しく彩られて仕舞ふ。そして正中心の生命世界は、只躍きに躍く。

丈夫になる位のことはいさ易い。何をやつたつて、出来ることだ。だが中心神祕の鐵扉を開くには、不斷の努力が要る。然し進むならば、眞に自己を完全に活かすの境地まで、突破せねば、折角志しを立てた、甲斐が無いであらう。而も其れによつて、心身兩方面の健康が、期せずして、絶對に保證せらるゝに於てをや。さは云へ其れには、非常の覺悟と、努力を要するのだ。

「師、鶴林に住すること凡そ四十年、鉢を掛けしより以來、雲水參玄の布衲子、緋かに門闥に跨れば、師が毒蘂に甘なひ、痛棒を激しとして、辭し去る事を、忘るゝ者、或は十年、或は二十年、鶴林々下の塵と成る事も、亦總さに顧みざる底あり。盡く是れ叢林の頭角、四方の精英なり。各西東五六里が間に分れて、舊舎廢宅、老院、破廟、借り

て以て、菴居の所として清苦す。朝暾暮辛、晝夜夜凍、口に投ずる者は、菜葉糞、耳に刺るものは、熱喝垢、骨に徹するものは、唾拳痛棒、嗜る者類を損め、聞く者肌を汗す。鬼神も涙を浮べつべく、魔外も亦、掌を合せつべし其の初め來る時は宗玉河晏が美貌ありて、肌膚光澤、凝れる膏の如くなる者も、久しからずして杜甫賈島が形容枯槁、顔色憔悴するが如く、或は屈子に、澤畔に逢ふが如し。參玄驅命を斷みざる底の、勇猛の上士にあらざるよりは、何の樂みあつてか、片時も、滲泊することを得んや。是の故に往々、參窮度に過ぎ、清苦節を失する族は、脚金のみたかじけ、水分枯渇して痲痺塊痛、難治の重症を、發せんす。是を觸み、是を熱ひて、師不豫の色有る者連日、乍ち忍俊不禁にして、雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞つて、是れに授くるに、内觀の秘訣を以てす。

私は此の句を暗誦する毎に、其の精進苦闘の雄々しきに、そる熱淚の滲み來るのを、禁することが出来なかつた。オ、其れ程までの、修行をしなければ、本當の處へは、行かれないものかなア。さうだ。普通のことを、やつて居つたのでは、普通のことしか、出来ない譯だ。

茶ツ葉や、麥の屑を、喰べながら、朝夕困苦修行を重ね、晝は飢ゑ、夜は凍えながら、絶えず道に精進し、其れでも露水を、浴せかけるやうに、叱り飛ばされ、其の上禪棒でもつて、ピシヤリくこ、叩かれてはかり居るのにも拘らず其れを以て却つて、忝なし、有り難しとなし、お寺の裏の松林に、骨を曝しても、サラ／＼感ふ處ではない。耳を臂くやうな、惡罵怒號と、骨に徹る程、痛く鐵拳で打ちめされても、尙且つ平然として、結跏趺坐して、嚴師の元を去らふとはしない、健なけさ、いじらしさを眺めては、惡魔外道と雖も、覺えず首を下けて、合掌し度くなる程の熱誠眞劍さだ。

▽上士恨につく

私は此の句を、暗誦しながら、幾度、自ら鞭うち、自ら奮起したか分らない。初めは、罪人宗玉のやうな美丈夫であり、宛人、何晏のやうな好男子であつたものが、山林に糶栗を拾つて、憂國の詩を作つた杜甫のやうに、又陋室に籠居して、苦心慘憺、文を練つた賈島のやうに、體は瘦せ細り、顔色は憔悴衰へ、まるで汨羅に、身を投せんとする屈原のやうになつて仕舞つた。

だが——そんな事では、決して怯るまない。參玄驅命を斷みざる底の、勇猛の上士、……嗚呼何ぞ云ふ、壯絶の言葉だ。夫れ上士は恨に付き、中士は徳に付き、下士は利に付き。ナポレオンは云つた。人間は金を喰ふ豚の如しと、随分醜い云ひ方だが、一面の真相を、穿つて居らぬでもあるまい。利を與ふれば、大抵の者は、滔々乎として、これに靡いて來る。だから國政參與の代議士等の多くも、金で買ひ、金で買はれて、日比谷原頭に押し出されるものが少くないのだ。

次は徳に附く者だ。濃厚慈愛で頭を撫で、暖かに抱擁してやれば、有徳の君子人としてこれに懐き、始めて其の膝下に坐して、道を學び、教へを受けようとする。だが、こんな連中の到達し得る範圍は、決まつて居るのだ。せい／＼悪いことをしない。外見が君子らしくして、隨處がよい位の、程度のものなんだ。如何でか天地の權機に參畫して、永久の大道を直感し、無限の光明界に、躍出することが出来ようぞ。

上士は恨につく。最上、最高、最美、最善の絶對生命に、活くるの道に至つては、これを得ることも、與へることも

仲々容易のここではない。「太行の路よく車を擡ぐ。巫峽の水よく舟を覆へす。行路難、山より難く水よりも險し」。得んとする者も、驅命を捨て、刻苦努力し、興へんとする者も、叱咤鞭打して、前から引いたり、後から押ししたりしてやらねばならぬ。グズ／＼しては、居られんぞ。ソラ又横へ外れた。何だ。そんな處で、ヘタはつて駄目だぞ。立て。立て。立て。ヒシヤリ／＼、鞭を加へる。時には横敷に、ヒシヤツ、鐵拳の痛撃を與へる。こゝまで來ると、大抵の者が參つて仕舞つて、怨み憤り、失望落膽を以て、引き退く。耳中常に耳に逆らふの言を聞き、心中常に心に拂ふ事あらは、縁に是れ進徳修行的の砥石なり。若し言々耳を悦はしめ、事々心に快ければ、便ち此の生を把つて鳩毒の中に墜せしめむ。

此處で踏み留まつて、恨みに付いて、更に一段の勇猛心を奮ひ起し、精進向上し得る者にして、始めて固い沈黙を封じた、腰腹の鐵屏を打ち砕いて、眞個光明燦爛たる、自己中心の生命界を、開くことが出来るのだ。——何も要らんぞ、此處へ進むのには。……其の人自身に、此の至誠と、此の精進とが、無かつたならば、何が有つた處が、そんなものは塵芥同様、何の効果があるものか——。

私が一切を抛うつて、山林の人となつてから、曾ては私に就いて、共に俱に學び、共に俱に勵んだ人達も、時の經つのに従つて、一人去り、二人去り、——残つた者は……幾何ぞ。「或る若者、亞麻布を纏ひて、イエスに従ひたりしに人々これを捕へければ、亞麻布を捨て、逃げ去れり」。『我れは汝等の云ふ、其の人を知らず』。十二の使徒が、飛び去つたやうに……鐵の鞭は、さて措いて、少しく叱咤激勵の辭を發すると、皆散り／＼に逃げ隠れて仕舞ふ。かくして私は、獨り宇宙の道を勇進することになつた。たが其れによつて、私は益々明かに、天地の眞を、直観することが、

出来るやうになつたのだ。嗚呼我れ徳の薄きがためであるか。抑亦、教育指導の才なきの致す處であるか。——或は方今、恨みに附くの上士、無きが爲めであらう乎々。

▽徒に十字架を仰ぐこと勿れ

「參玄驅命を顧みざる底の、勇猛の上士にあらざるよりは、何の樂あつてか、片時も滲洩することを得んや」。この言葉によつて、私は幾度、嘔まされたことか。坐禪辨道のためには、身も命も投げ棄てる。何ぞ云ふ。潔き決心だ。私は限りなく感激すると同時に、其の雄々しき覺悟に對しては、何時もホロリさせざるを得なかつた。そして新なる勇氣と、力を奮ひ起して、私は更に突き進んだ。突進又突進、突進又突進——。さうだ。突いて、突いて、突き破れッ！。

私には私を、鞭つてくれる嚴師がない。私には私を、嘔ましてくれる眞友がない。其の代り私は、自ら鞭ち、自ら叩いた。叩き碎いて打ちのめして、自ら自分の横ッ腹を、蹴飛ばして絶へず自分で、自分の心を激勵したのだ。然しながら其處には又、無限の樂があつた。ほんさうの自主獨立、我れの目ざす處のものは、只天だ。只眞理だ。我れは直接、天から教へを受くるんだ。我れは直に、大自然から學ぶのだ。オ、さうだ。俺は天と、直接交渉した。然り、我が熱烈、鐵をも溶かす至誠と、直に天心に通ずる、正中心を以て、直接に天の指導を受け、天の鞭を受くるんだ。私は青年時代に、父に訓戒されたことを、忘れない。それは濫りに師を求めな。然し一旦師を得たならば、其の人のためには、身命を捧ぐるの覺悟がなければならぬと、云はれたことである。私の兄は押川方義先生を得た。そして四

十年の永きに亘つて、道交益々密なるものがあつた。

私は學校の教師以外には、特別の師は、一切是れを求めなかつた。學問に於いても、武術に於いても、宗教に於いても、——たゞ川合山月は、私の兄にして又師たり。俱に居るやうなことは、殆ど無かつたけれども、冥々の裡に、私が受けた感化は、莫大なものであつた。のみならず私は、私の兄の眞清さ、期待さに、反かぬやうに、幾度か、心を引き締めたのであつた。

然しながら苟も直接、身を以て天の指導、教養を受けんと、するに於ては、眞拳喝棒を、絶へず下す、嚴師に仕へるの覺悟が、無ければならない。

體を、纏つて呉れる體は無い。だから自ら纏うつた。天に代つて、自ら我が中心を、纏うつた。神光は道を求めて、自ら肘を斷つた。我れ榮進を希はずんば、何ぞ利祿の香餌を憂へむ。我れ安逸を競はずんば、何ぞ捨身の危機を畏れむ。俺は中心の力を振つて、自分の體を切り刻むのだ。自分で自分の屍を、溝の中へ抛り込むのだ。

凡ゆる死の状態を以て、身をズダ／＼に、割き千切られても、厭はぬのみか、進んで其の中に、突入する位の、意氣があれば、一抹の曇りもなく、一點の濁りもない。此の緊張したる明朗状態にあつて、始めて眞に正中心が鍛へられるのだ。

徒らに十字架を仰いで、罪の贖を求むること勿れ。苟もクリストが犠牲の聖愛に感激する至誠があるならば、須らく十字架を負ふて、其の後に従へ。敢てゴルゴタ丘上の、十字架のみではない。正義を執つて勇進し、奸邪の陰謀壓迫に屈しないのも、是れ十字架だ。名利の誘惑に打ち勝つて、敢然として道に就くのも、是れ十字架だ。

更に自己中心の雜念妄慮、卑屈卑怯の惰心を叩き壊して、自己正中心に神の生命を、蕩ち得るのも、是れ又聖なる十字架にあらずして何ぞ。クリスト云はずや。十字架を取りて、我に従へと、自己正中心の十字架を執つて、奮然として彼れの後へに従ふ者は誰ぞ。

▽かく我が夢は進みたり

「かく我が夢は、進みたり。さもあらはあれ、我は何なるか」。私は正中心に、目覺めて、始めて天を見た。天に大生命あり、天に大光明あることを見た。私は自己の、正中心に生きて、始めて眞の己に、活かることが出来たのだ。

「父我れと俱に居り、我れ又父と俱にあり。父と我とは、一なり」。私は私の正中心を以て、天に連なることが出来た。天と合一することが出来た。「自分はクリストと共に、眞理を宣傳するのみならず、自分それ自體が、眞理であることを、斷言する」と叫んだ、ヘーゲルと同じ確信自覺を、私自身も亦持つやうになつた。

而もこれ皆、不屈不撓、勇猛精進の齋す所、それには先人が、苦心努力に對する感激の鞭に、負ふ處大なることを、感謝せざるを得ないのである。

只注意すべきは、正しき目的を樹立し、これに向つて、奮然に、勇進奮突すべきことである。然らずんば、構むべし折角の努力も、屢々空に歸するのには、またしもの事、健康を求めて却つて、健康を破るの不幸を、招來せぬとも限らぬのだ。

正中心は、心身修養の根本秘鑰であり、又眞宗教に入るの、第一關門である。而して茲に透徹すれば、正中心即ち宗

教の奥意となる。

キリスト、釋迦、孔子、ソクラテス、マホメット其他の聖賢君子は、何れにか往けるアノ立派な精神、アノ美しい魂までも、消えて無くなつてさうするものか。

宗教の本體は、宗派、教義、禮拜、懺悔、祈禱、儀式等には、何の關りもあるべきものでない。——至誠の生命、其れが根本であり、本質であり、凡てなくてはならないのだ。忠勇、節儉、愛憐、犧牲、俠氣、明智、聖德……何でも至誠の精神は凡て、神の生命に通ずるものだ。其の人が自覺することこそ關らないのだ。

正中心は姿勢によつて、至誠の魂を定むるものである。正中心の眞諦は、此の如く、深遠にして、微妙なるものであるから、一旦其の境地を悟つても、悟後の修養の區域は、無限に存する譯なんだ。所謂明德を明かにすさ、云ふのは其れた。

されは大悟の上に、更に大悟を磨き、明德の上に、更に明德を、明かにするのだ。私は正中心の眞諦、焦點を悟得したけれども、其の微妙の進境に就ては、今尚ほ絶へず、新天地を開拓しつゝある。

其の新たなる道を發見——吾悟得した時の嬉しき、喜はしき、有りがたき、中心の光は其處に又、一段の輝きさ、強さを、添へるものである。かく我が歩は進みたり。昔日「茅塚」の慣れさを託ちたる時、誰れか今日の變化を、豫想し得たるものぞ。

▽了々々の時、玄々々の處

私に取るべきものは、何もない。——たゞ正中心力の外……。其の微妙な働きに至つては、何人も知ることは出来まい。——たゞ私の外……。私は此處に、秘やかなる安住の國を持つ。此處に私の、第三帝國はある。此處に私の象牙の塔がある。まさしく無限大の至寶である。健康問題の如きは、其の大恩寵の微々たる半の、一滴にも値しないのだ。そんなものは何も、取り立て、重大な目的にはしなくとも、中心の根本をさへ、正しく養つたならば、明せずして易々として、與へらるゝ副産物の、一端に過ぎないのだ。是れ私が三十有七年間、眞剣な努力を、不辭に續け來つた經驗によつて、明かに啓示せられた、確信である。

正中心の眞諦玄機妙用に至つては、理屈や想像では、到底解る筈はないのだ。冷さ暖さは、自ら觸れて始めて、知ることが出来るやうに、正中心の妙真も、鍛へて自ら、體得するの外はないのである。「理會の境界にあらず。分別の境界にあらず。適かに常清を出で、別に氣息の通ずる」ものであるから、「文に依つて、義を解せず。義に依つて、文を破らず。只性智を以て解す」べきである。性智を以て解し、氣息相通するに、至るのには、先づ正しく中心を、鍛へなければならぬ。

鍛へて其處に至るのは、さう云ふ譯であるか。自己の中心凝つて、誠一の至誠となり、天の中心の至誠と、相通するに至るからである。

「誠は天の道なり」。「天行健かなり」。かくして精神は、至誠となり、肉體は至健となる。「我を遣はし、者は、誠なり」。「我は道なり。眞なり」。至誠、至健、至善至美の境地、只この一點より、展開せらるゝに至るのである。

ポーロ曰く、「神の國は言にあらずして、能力なり」と、「天言はずして、四時行はれ百物質のる。天何をか言ふ

や」。神の能力は、黙々として、万物を統ぶるの、方眼となり、星辰運行の大より、電子活動の微に至るまで整然として、一絲も亂れぬ。

方眼は眞理である。眞理は、至誠である。至誠は生命である。誰か云ふ。「眞理は光なれども生命にあらず。生命なき光は冬の日の、死に枯れたる、氷の山を照すが如し。寂寞、悽蕭、絶へて生氣あるなし」と。

中心の至誠に、透徹すれば、天地万物の一切は、生命の輝きに、燦然たる實況を、直視することが出来るであらう。山中人の訪ふ者もなく、中心一貫の道を共に尋ねべき友とてもなし。問然として、黙々として、中心を修めて、獨り天と相對す。私こそは、眞個宇宙の旅を、獨り往く者だ。

復た我あるを知らざれば、安んぞ物の尊貴たるを知らむ。身は是れ我ならずと知らば、感憤更に何ぞ侵さむ。便ち多の苦思心を省く。一切を捨て、一切を離れ、社會にも、郷黨にも、友人にも、同志にも、骨肉にも、家庭にも、情縁を繋ぐ一切に、捨て去られて、孤影孑然、自主獨往、赤裸々の單身となり、而も靈肉共に叩き碎いて、只正中心の空に墮了し去つた時、始めて宇宙の大道が、我が裏に活くるのだ。アツチに執着し、コツチにふらつき、眼々として、彷徨ひ廻つて居つて、いかでか正中心の高峰を究めることが出来やうぞ。

天地万物正中心の一點に、合した境涯に至れば、正中心も亦無、有も亦無にして、無も亦無である。廓然無聖。ガラツとして聖も無く、凡も無い。了了の時、了すべきなく、玄玄の處、亦須く調すべし。了玄一如。小大即通。淺深非二。茲に至れば、タツタ獨りが、益々眼かで、益々輝かしいものである。

天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ふの意氣、常に昂然たるものがある。志を得れば、民之

に出り、志を得ざれば、獨り其の道を行ふ。獨り其の道を中心に修める。樂み其の中にあり。かくして怡然として、獨り草莽の間に逝かむのみ。

▽矢張り三十餘年の歲月は流れた

茲に於て、宮本武蔵の「獨行道」の精神がハッキリと判つた。彼は武蔵より、此の道に悟入せる者である。

十三歳にして有馬兵衛と試合してから、朝に練り夕に鍛へて、三十歳に至るまでに、六十餘度の勝負、未だ曾て、敗れを執つたことが無かつた。其れにも拘らず彼は、「今にして、靜かに、考へて見るのに、自分が勝つたのは、劍法に練達したからではない。自分はまた、劍法の奥義を、握つて居ない、大丈夫志を、兵法の道に立てた以上は、必ず至妙の極秘を、究めなければならぬ」と、炎々たる謙虛猛進の大精神を、振ひ起し、「其の後も猶ほ、深き道理を得んご、朝夕鍛錬して、怠らざりしに、自ら劍法の道に適ふこと、凡そ我が五十歳の頃なり」と、述べて居る。古今無双の劍聖武蔵は、かくの如く、更に二十ヶ年間の、苦心努力を積んだのだ。其の踏踏の跡は、「獨行道」中に躍動してゐる。雄大壯重、全篇十七ヶ條、悉く是れ四十年間、血汗の結晶である。文武兩道の眞髓、宗教の妙諦、處世の秘訣、心身健全の極致も、潜んで皆、その中にあるのだ。

「世々の道に、背くことなし。万一依怙の心無し。身に樂をたくまらず。一生の間、慙心無し。我が事に於て、後悔せず。善惡につき他を始まず。何れの道にも、別れを悲しまず。自他共に恨みかこつ心なし。懸壺の思ひなし。居室に望みなし、身一つに、美食を好まず。舊き道具を所持せず。我が身にこり、物を忌むことなし。兵具は格別、餘の道具を

たしなまず。道に當つて、死を厭はず。神佛を尊び、神佛を頼ります。心常に、兵法の道を離れず」。

堅固なる道心、厳正なる操行、高潔なる精神、千載の名人をして驚へす標を正さしめる。殊に「神佛を敬して、神佛を頼ります」の一句に至りては、万古に亘つて、舞鎗の響が鳴る。堂々たる宗教家にして、此の一語の前に慙愧せざるもの、果して幾人かある。

宇宙の大道は、獨り行かねばならぬ。真人は只獨り、進まねばならぬ。十二の使徒を連れて道を説いてもゴルゴダ丘上の十字架は、獨り負はねばならぬ。タツメ獨り、タツメ獨り。その獨りをも振り捨て、猛進しなくては、自己中心の秘境は、拓かれないのだ。

「朝夕鍛錬して怠らざりしに、自ら劍法の道に適ふこと、凡そ我が五十歳の頃なり」。武藏の天才を以てして、日夕不輟の鍛錬をなし、猶ほ且つ、劍道の極意を悟得するのに、殆ど四十年の、永の月日は流れて行つた。

嗚呼矢張り、私も五十の坂を越して仕舞つた。一意専心、たゞ中心の一點を、鍛え／＼して、時の経つのも、忘れて居つたのに、矢張り到頭、三十餘年か、つて仕舞つた。さうして漸く正中心の第一關門を開き得たのに、過ぎない。悟後の修行は、猶ほ無限である。

その昔、佛者が三十年もか、つて、何を悟るのか。悟りとは一體何だ。坐禪で精神を凝縛させるのか。頭腦を低劣にして、自然枯木寒巖の無感覺になるのか。それとも長時間の冥想に依つて、一種の自己催眠に陥り、僅かに安心の幻影を、捉へるのではないかと、私は疑つたことさへもあつたのだ。

何ぞ知らむ。正中心の悟得は、かくも明明で、かくも鮮活なる現象であらうとは。頭腦益々澄徹、精神益々調達、身體益々健全である。

體益々健全である。

▽行人此所に至つて盡く蹉跎

「衣を千俵の岡に振ひ足を万里の流に漕ふ。大丈夫この氣節なかるべからず。海濶ふして魚の躍るに従ひ天空しふして鳥の飛ぶに任す。大丈夫この度量なかるべからず。月梧桐の上に到り、風楊柳の邊に來る。大丈夫この襟懐なかるべからず。珠藏して澤、自ら媚び、玉韞して山、輝を含む。大丈夫この蘊積なかるべからず。嗚呼大丈夫の居る所、立つ所、行く所、皆主一に由る」。

正にこれ中心調達の妙を贏ち得たる境地である、此處に到達せんとするならば、先づ無明を斷すべし。「無明を斷せんぞ欲せば、須らく坐禪辨道に入るべし。溟々として兀坐すれば、妄息む。妄息めは、寂生ず。寂生すれば、智現じ、智現すれば、眞我出づ。眞我出づれば、一切迷執なく、一切の汚染なく、一切の恐怖なく、諸法を遍滿する。無始無終の心性を徹見し宇宙三界を、横行闊歩し得る處の大自由を取得せむ」。

多くの人達は是れを得ざるのみならず、健康獲得の、些末なる枝葉をさへも、容易には手にし得ないとは、何事だ。なぜか？。飽くまでも、突き抜けないからである。長い間やつて居つて行かないのは、さう云ふ譯か？。眞實でないからである。

眞實に、飽くまでも、遣つて居つて、到達しないのは、さうしたものか？。それは正しく、遣らないからである。正しく遣り得るまで、突き抜けないからである。同じ處で、同じ事をやつて居る。塵裡に衣を振ひ、泥中に足を濡すが如

し。如何に超脱せむ。

熱心に眞道に、遣る者が、或る程度までは、行くけれども、其處で大抵は、止まつて仕舞ふ。眞に正中心を得て居らんからた。明月堂前枯木の輩。枯木殿前に踐踏多し。行人此處に至つて、盡く踐踏す。此の邊まで来るさ、バタ／＼と倒れて仕舞ふ。伏屍累々の状態なんだ。

枯木寒巖だけでは、また駄目だ。鸞鷲雪に立つても、同色に非ず。明月窟花も又他に似ず。同じつもりで居つても、實はまるで違ふんだ。万年の松徑、雪深く覆ふ。一帯の峰巒、雲更に遮る。正中心の鐵門は、また／＼ズット、前にあるらた。雲間を透過して、俯仰なし。青天白日是れ家山、機輪通變、人の到るること難し。

縦に三世を貫き、横に十方に亘る、絶對境を啓くの秘論は、しかく容易に得らるべきものではない。險崖に手を撒して、絶後に垂へる底の、苦闘を経なければならぬ。是の大本を突破すれば、健康問題の如きは、末の末だ。塵の塵た骨を折る價値など、何處にあるものか。

ア、私は、言葉を変えて、同じことをのみ、繰返したが、言詮の背後にある、正中心の姿は、諸君の實際訓練によつて默會悟入を求むるの外に、道は無いのだ。

▽私交と大法とは別箇の道

中心の界域は、各人が持つて居る。これを啓き得るのは、努力によるか。將たまた天品の素質によるか。目標を外れ方法を誤つた、單なる努力では駄目である。素質があつても磨かなければ光は出ない。けれども、先づ何よりも、必要

なことは、貫徹の努力を勵む、精神を持続することが、出来るかどうかと、云ふの一點である。何は扱て措いても、先づ是れが無ければ、凡ては結局、水泡に歸するものである。泛駕の馬も、驅馳に就くべし。躍冶の金も、終に型範に歸す。只一に優游して振はざるものは、便ち終身、個の進歩なし。

燥急の者は火熾、物に遇へば、則ち焚く。寡恩の者は水清、物に遇へば、必ず殺す。凝滯固執の者は、死水腐木の如く、生機已に絶ゆ。俱に勇奮向上して、清明の世界を啓き難し。

學問のみの人、力のみの人、自我の強き人、即ち謙虛己を捨て、深く／＼衷に入ると共に、奮然として、無限の天に向つて、猛進するの意氣なき者、殊に智識才能のみの人、況んや奸邪貪慾の輩の如きは、凡て中心神秘の鐵扉を開く恩寵を興えられないものである。

その中、氣の毒なのは、極めて眞面目な、善良な人でありながら、己の衷に、深く進むの精神を持たぬ者か、若くは、その心は濁者の水を慕ふが如くでありながら、これを貫徹するの意志と、力とを持たれない人達である。

前者は更に角、後者は、見るに堪へぬ程の苦心を眞面目にやりながら、遂に到達するこの出来ぬものであつて、これは畢竟、器が狭少だからである。此の種の人に對しては、實に慘乎として、心傷まざるを得ないのである。

私の親友に某海軍大佐がある。海軍無電のオーソリティーとして、侍從長鈴木大將が、私に向つて、推稱された人である。直清徑行、それこそ竹を割つたやうだ。自分が正しいから、人の不正を許さない。殊に最も偽善を惡む。私は初対面の時から、既に十年舊知の感があつた。胸襟を開いて、共に相語つた。

此の人、中心の道を、私に問ふ。私は素ツ氣なく拒絶した。「駄目です。其の素質がない」こ。「酷いですな。素質

がないとは」。『アッハハ、アッハハ』。相顧みて俱に、呵々大笑した。其れから幾度會つても、此の問題には、更に觸れない。だが本當に打ち落けて、まるで親戚のやうな、交際を續けて居る。

私父と大法とは、別箇の道だ。故に友人は、扱て措き、父母兄弟妻子にも、其の器にあらざるものには、是の道の一端をも、傳へることは、出来ないのだ。

若し此の道を、俱に進む、同志の士があつたならば、其の點に於ては、肉親よりも親しく、有りがたく、私は感ぜざるを得ないのである。『我が母、我が兄弟とは、誰ぞ。視よ、こは我が母、我が兄弟なり。誰にても、神の御意を行ふものは、是れ我が兄弟、我が姉妹、我が母なり』。

頃日、九州から態々、伊豆の僻村に、私を訪ねられた、中年の人がある。家貧しきが故に、一切を村長さんに、打ち明け、旅費を借りて出て来たこのこと、真面目に熱心に、體得せんご慾求して居つた。

私は弟に對するが如き、真情を以て、凡ては己に、備へられてある。徒に惑ふて、そんなにまでして拵へたお金を、つまらなく失はぬやう、早速郷里へ歸りなさいと、諭してやつた。

暫らくして、歌や感想を記した、長文の書面が来た。そして毎日、氏神様に御祈りして、成功を祈りつゝ、努力して居るこのことであつた。

其の努力も熱心も、空しき結果を、齎すのに過ぎないことを、悲しみながら、私は返事を出した。『そんなことは一切、廢めて仕舞つて、只管家業に、専断しなさい。其處に健康の道はある』と。

何と云ふ無情な手紙だと、嗚かし怨み、且つ落膽されたことであらうと、私の胸は痛かつた。けれども、その器にあ

らざれば、正中心の奥殿に參入することは、出来ないのだ。單なる健康だけのものならば、鐵を握り、錘を振つて、生産的業務に觸みながら、易々として獲得されるやうに——天が万人に興へられてあるのだ。

中心眞丹の道を、得るのには、只その器あるのみでは、駄目だ。これに千鍛万鍊の努力を積み、血涙を絞り、辛汗を流し、時至りて漸くに、透徹することが、出来るのである。

一週間にして、金剛不壞の身となり、一聲の氣合で、強壯體と變化し、按手冥目、忽ち病魔を一掃する。もしくは偉効卓絶の機械で、骸骨の如き瘦せ男が、旬日にして、筋骨隆々の大丈夫となる。そんな横着な、一足飛びを、天理は許さない。許さぬ。斷じて許されない。

只その當座だけは、神經的に何たか、強くなり、偉くなつた様な、氣持になつて居るが、その中に又、何時しか、元の木阿彌に歸り去る。

その實質本體は、些ツとも、變つて居らないからである。變らない筈だ。實質的には何の鍛鍊修養をも、積んで居るのたものを……。だから本當に良くするには、さうしても、根本的にその實質を、磨き上げなければならぬのである。

然り。私父と大法とは違ふが、私情と大道とも亦、異なる。眼で見へる、私この體格と、この體力と、此の元氣との活きた事實を以て、而も、多年の實踐と研究とによる、眞健康道を説いても、近くの者は、誰一人として、用ひはしない。見慣れて、珍らしくなく、親しんで、有意味が無いからである。のみならず、姿勢の執り方や、簡素な養生法で、丈夫になるご云ふのであるから、平凡な上に、厄介で頼りが無い。モットこつ偉さうに、目では既つて、勿體らしい神

標でも使ふか、それでなければ、靈藥さか、妙器さか云ふ物でも使ふのでなければ、何さなく、張り合が無いものさ見
える。

そして、さうしたら、病氣にならぬのか。さうしたら、丈夫になれるのかさ、ヤレ何々法、ヤレ何々術さ、頼りに入
方を、漁り求めて居る者も、勘くはない。

中には、その主張者が、顔色蒼白、體格體力共に劣等なるが上に、その説く所の、方法共ものでさへも、科學的、實
験的兩方面から觀て、大なる誤謬があるさ、私にはハッキリ解つて居るものを、提け來つて、逆に喋々として、私に説
法する者すらもある。正に是れ、夜に就いて筏を捜し、蟻に乗つて、壺を覓むるに、恰も似たり。矢張り俺も、何々
健康法研究会本部會長の、殿しい看板でも出さねば、人は信じて呉れないのか。——それは戯言だが、……それとも又
豫言者郷里に、容れられざるの類であるのか?!!

▽ケチな考では高が知れて居る

神經的妄想で、自分は丈夫になつたさ、思つて居つても、その實質が本當に、良くなつて居るのでなければ、そんな
ことは永續すべきものではない。矢張り、相變らず、風邪を引いたり、腸をいためたり、頭痛がしたり、疲れたりす
るやうになることを、私は述べた。

だが、本當の方法をやつた處が、二年や三年で、心身の根本的中心を、完全に修め得ることが、出来るものではない
中心悟道の妙機を啓くには、矢張り二十年三十年は、かゝつて仕舞ふ。けれども、一方それだけの長年月を要するの

に、値する程、正中心の世界は、輝かしきものであることを、忘れてはならない。

稀代の傑僧、白隠禪師の體験を觀よ。「山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し、不退の道前を起激し、精鍊
刻苦する者既に兩三霜乍ち一夜、忽然として落節す。従前多少の疑惑、根に和して氷融し、曠劫生死の業根、底に徹し
て滅す。自ら謂へらく、道人を去ること、寔に遠からず。古人三十二年是れ何の捏造ぞと、怡悅踏舞を忘る者數
月」。俺は道を學ぶこと、僅に三年、一夜忽として大悟徹底した。然るに古人は三十二年もかゝつたさ!何たる白痴
けたことだッぞ、怡悅踏舞を忘れたれども、矢張り、駄目だつた。「向後日用を回顧するに、動靜の二境、全く調和
せず、去就の兩邊、總さに脱洒ならず。自ら謂へらく、猛く精彩をつけ、重ねて一回、捨命し去らんぞ」。もう一度、
命がけでやつて見よう。「こゝに於て、牙關を咬定し、雙眼睛を睜開し、親食をも廢せんぞ。既にして未だ期月に亘
らざるに、心火逆上し、脚金焦枯して雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして、
舉措恐怖多く、心神困倦し寒瘡種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に涙を帶ぶ。茲に於て遅く明師に投し、
廣く名醫を探ると雖も、百藥寸効なし」。悟道の天花、何れにか飛び去つて、密雲暗澹、狂風怒濤、「已ぬる哉、觀理
度に過ぎ、進修節を失して、終にこの重症を發す。寔に醫治し難きは、公の禪宗なり。若し鍼灸藥の三つの物を、恃
んで、而して之を救はんぞ欲せば、扁倉力を盡し、華陀難を扱むるも、奇効を見ること、能はず」。鍼灸藥共に無効
た。「公若し心炎意火を收めて、丹田及足心の間に置かば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪
情波なけん」。丹田及足心の間、これ即ち私の所謂、物理的重心を兩足の中間、支撐底面の中央に、垂直に落さすこと
に該當する。丹田は人が皆云ふ處であるけれども、「足心の間」の言に至つては、流石に多年苦鍊密修の體験から出た

ものご、驚嘆敬服せざるを得ない。鍼灸薬の療法、一切を捨て、自己本然の中心養成の道に進み、「禪病を治し勞疲を救ひ、禪門向上の事に到つて、年來の疑團を氷融せしめ、手を拍して、大笑する底の大歡喜」を、打開するのには、矢張り多年の精練を、要したのだ。大道は平々たり。坦々たり。されど「斯の道、一踏求むべからず。昉けず、長せず。自ら悠々」。

何だ。健康なんて、そんなものは山野の鳥獸でも持つて居るぞ。人苟くも健全を穿むならば、心身の根本中心を確り修めて、明朗澄徹の精神常に歡喜と光明とに包まれ、勁勢を樂しんで、絶對の強健自ら、これに附隨するの境地を、目指して、進まねばならぬ。——附隨——然り、附隨だ。健康はそれ自身を、目的としなくとも、そんなものは自ら附隨し來る處の根本義を蓋はなくてはならぬ。たゞに——病氣にならないやうに云ふ、そんなケチな考へでは、良くなつた處が高が知れて居る。己れの本源を捨て、煩瑣なる衛生法に離離する懶れさよ。盤龍山上よりア、エルサレムよくの悲叫をあげたキリストの如き、心の痛みを禁めることが出来ない。最上の防禦は、攻撃である。須らく積極的に、心身修養の根本義を把握し、健康問題の如き自ら解決せらるゝことを、期さねばならぬ。

▽大なる福音でなくして何ぞ

私の著書は、何時でも理論が多過ぎるので、此の書ではなるべく、自分の經驗と、實際と、實感とを、何等の制肘せらるゝ處もなく、何等の粉飾を、施すこともなく、自由に、大胆に、率直に、赤裸々に、述べることにした。だから取りやうによつては、厚顔醜態な自誇自説、見るに堪へぬさ、云ふ感じがされる方も、無かし、多いことであらうこ

思ふ。自分のことを、威張り、他人のことを罵倒する。兩方揃つたら、碌でも無いことは、此の上なした。

たが其れを、敢てする所以のものは、さうか、病弱の同胞諸君に、力強い參考と、慰籍とを與へてやりたいこの、一片の赤心に、外ならぬのだ。其の熱情の進る所、喋々として、自らの實驗と實績とを説き、時には、正義の鞭を擧げてこれ等氣の毒な人達の、溺者に變の心理状態に乘じ、惡刺巧妙の好手段を以て、其の膏血を絞らんとする不徳漢を、叩くの擧に出づるのである。

讀者諸君に於かれても、私の此の衷情を、能く了察せられて、私の自信自負の醜言を、寛恕せられ、時に鐵鞭を、振ふことあるも、其れは私の、正しきを愛し、弱きを憐れむ、俠烈の精神の致す處なるを、察知せられ、虚心冷靜に讀過せられ、其の中より真理の光明を、汲まるゝやう、私は伏して、切望するものである。

今日も——昭和十年四月二十四日——讀書して居つたら、母が來て、「四國から訪ねて來たが、面會謝絶の札を見て歸らうとして居る處だとして、一人の青年が坂道に居るから、聞いて來てあけると云つて、留めて置いた」と云はれる。

では一寸、會ひましましやうと云つて、應接間に招き入れた。可成りな、體格をした青年である。先づ戸籍抄本を、取り出して、身許を明かにし、多年の望みを果すべく、漸く出て來たのだと云ふ。

中心力の造り方に就いて、一通りの説明を加へ、「光明の力は、君自身の裏にある」と、説いてやつた處が、非常に喜んで居つた。私は別室に入つて、衣服を脱ぎ、運動ズボン一つになつて、戻つて行つた處が、青年は私の體格を見て先づ顔色を變へ、暫えず、驚きの聲を上げた。「ヤアさうも……」そして首を、下けて云つた。「恐れ入りまし

た」云ふ。

私は實際の練習を、やつて見せ、これに説明を加へて、「毎朝三四分でよいから、此の型を實修し、あとは楽しんで、自分の職務に顧みなさい。名譽も、富も、地位も、あこがれる必要は、更でない。其れ以上の幸福と、喜びとは、君自身の中から、磨き上げることが出来るのだ。要は正しく、やることにある。正しからざる努力は、無効になる。無効なのはまた良い方で、時には害になる、ことさへもある。サ、歸つて、確りおやりなさい」と、話してやつたら、感激に震へて、口吃りながら、謝辭を述べて、歸つて行つた。

彼は、四國の遠くから、遙々訪ねて来て、タツタ一時間足らずの、面會であつたけれども、喜んで、満足して、感激の涙を、眼に浮べながら歸つて行つた。

私を見る凡ての人達は、私の實際が、私の著書によつて得た、想像以上であるのに、必ず満足してくれる。満足して買へる程、私は不厭の鍛錬を、重ねつゝあるのだ。……何の爲めに……—真理のために—名譽未だ抜けざる者は、幾ひ千乗を軽んじ、一瓢に甘んずるも、總て塵情に墮つ。客氣未だ融けざる者は、四海を濶し、万世を利すも、終に剩技となる。

是の實績は、私に自信を興へる。確信を興へる。而も、事實に基く信念程、力強いものはないのだ。

私は學校を終つて、直ぐに軍隊に入つたが、大正元年八月以降、一切の武術は元より、他の特別の鍛錬運動は、何も、やつたことはなかつた。一切——一切——一切……やつて居ない。

大正六年伊豆八幡野に入つてからは、僅に簡易練習法しか、遣らない。なるだけ減少して、行くさ云ふの

が、最初からの、方針である。即ち方法回数を減じて、練習時間を少くする、而も、時間を減少しながら、益々其の効果を、増大するさ云ふのが、私の最初からの、大なる目的の一つであつた。

大正十二年六月、完全なる正中心力の、實際を悟得してから、私は運動方法僅に二種類、練習時間は、タツタ數十秒時に、短縮して仕舞つた。

而も見よ。私は其れによつて、益々強くなり、益々強くなり、其の體格は、益々美しくなりつゝあるのだ。

僅の方法で、僅の時間で、年を老るに従つて、益々丈夫に、益々強くなりつゝあるの事實、——これは強き人々、吾生を此の世に享くる、一切の人々にさつて、……大なる喜び、大なる福音でなくして、何であらうぞ。

▽高利貸の心肝を砕く

眼に西晋を見て、猶ほ白髪に矜る。身は北邙の孤鬼に屬して、尙ほ黄金を惜む。語に云ふ。猛獸は伏し易く、人心は降し難し。深壑は満たし易く、人心は充たし難し。信なる哉。

紅葉の金色夜叉で、荒尾讓介が、問貫一に向つて、慨然として、「世間に最も喜ぶべき者はフレンド、最も惡むべき者は、高利貸ぢや。如何に高利貸の、惡むべきかを知つて居るだけ、僕は益々、フレンドを懐ふのぢや。其の昔のフレンドが、今日の高利貸、——其の惡むべき高利貸！、吾又、何をか云はんやぢや」と、云つて居るが、惡むべくして、恐るべきは、高利貸である。

私の親戚の文學士が、事業に失敗して、三千七百圓か、つた新築家屋を抵當に、高利貸のMから二千圓借りた。處が

現金として受取つたのは、天引二割五分の千五百圓、日歩四錢、期限三ヶ月、其の上、更に二千圓の約束手形まで取られて居る。Mは限に二丁字なく、赤字空拳から、數十萬圓の富を作り、東京市の市會議員になつたこともある。彼の苛酷な處置に苦しめられて、自殺した者が、三人までもあるこのことである。

私は漸くにして、Mの家屋を處分し、一切の手續を、完了してから、Mに向つて、「神明は凡て、照拂せられざるはない。不義の富貴は浮雲の如し」と、厲言して、殘虐なる高利貸の、非人道的なることを、指摘した。最初は喋々として、自己の成功談に、鼻を盡かして居つた彼も、義憤に燃える私の、力強い語調に黙せられて、顔色蒼白になつた。私が説き進むに従つて、彼は次第に、感動して來た。そして、中學へ行つて居る長男が、間もなく歸つて來るから、暫らく待つて、是非會つてやつてほしいと。種々の御馳走を出して款待し、時々學生修道院へやるから、さうか教導して貰ひたいと、懇請されたが、伊豆へ歸らねばならぬので、謝絶した。意を曲けて、人を喜ばしむるは、躬らを直くして人をして忌ましむるに若かず。善くして、人の譽を致すは、惡くして、人の譽を致すに若かず。

▽一大家族的國家たらしめよ

好漢尾瀬介は、又、「今日の人才を減ぼす者は、曰く色、曰く高利貸ぢや。此の通り、零落れて居る僕が、氣の毒と思ふなら、君の爲めに、難まされて居る人才の多くを、一層不敏と思ふて遣れ」と云つたが、天下の秀才が、彼等の爲に、墜没し去らるゝのは、痛訴の至りであると同時に、世の多くの窮迫者達が、殘虐なる高利貸の爲に、如何に苦め苛まれて居るかの、一事に想到したならば、何さかして斯かるものを、絶滅するの妙法は、無いものかと、考へざるを得ない。

私を一捻りにすると、喚いた某の如きは、貸家の契約をするのに、裁判上の判決同様の効力がある、公正證書にして置いて、家賃が停滯すると、直ぐに、執達吏を連れて行つて、追ひ出して仕舞ふ。或時は、病人を床のまゝ、路傍へ搬び出して、家を明けさせたこともあると云ふ。

こないだ朝日新聞で見たが、悪辣極まる高利貸の仕打に對して、某國事は、強盜罪を以て、起訴したさうだが、正に我が意を得たりと、覺えず快談を叫はざるを得なかつた。

これは、法規に酬れたから、引つ懸つたものゝ、巧に法網を滑つて、氣の毒な良民の生血を吸つて居る金色夜叉が、此の世には、如何に多いことであらうぞ。

遠くはリンコロン、近くは米國々務長官ヒューズの如きは、只止しき對善の味方たらんとの、至純なる希望のもとに法律を學び、獨逸のフェルチナンド、ラツセルは、暴民酷虐を恣にした伯爵から、其の夫人を救ふべく、態々法律を學んで辯護士となり、八ヶ年間、三十六ヶ所の法廷で争つて、遂に勝訴となつた美談もあるが、多くの辯護士が、金にさへなれば、依頼者が如何なる人物であらうとも、そんなことには、更に顧着なく、唯々として彼等の頭使に甘んじ、病者の咽喉を絞るが如き行爲を、敢てして恬然たるのは、何と云ふ淺ましいことだ。

或る所で組合の金を、二千數百圓使ひ込んだのを、示談の結果、借用證書を入れたのが、十年間請求が無かつたから無効であると主張し、地方裁判所で敗けて、控訴し、控訴院で敗けて上告し、大審院まで行つて敗けたけれども勝訴者は執行し得ないで、彼は意氣揚々として公職に就いて居る。私は、此の事實の反面にも、田舎人の質朴無邪氣な美風を

認め、寧ろ愛すべきを、感ずるものである。

だが、堂々たる帝大出身の辯護士が、ヤレ時効にかゝつて居るから、返済の義務なしとか、ヤレ債權の委任であるから、無効だとか、徒らに法を弄んで、辯護の任に當る無恥を、憚まざるを得ない。

陸軍省新聞班發行の、「國防の本義と其の強化の提唱」中、國防と經濟の條項に於て、經濟機構の變改、是正の方案を論じたが爲に、議會に於て、多少の論議を醸したやうであるが、現社會に於て、改善すべき幾多の欠陥あることは、否み得ないことであらう。

世界人類の絶對的福祉を希ふことは、私共の最後の望みではあるけれども、其れには尙、戦争と平和との纏結した永き歴史を要するのである。

先づ私共をして、同じ大和民族の血汐が流れ通ふ、日本國民として、上、皇座を戴き奉りたる、一大家族たらしめよ。天真の生活に徹すれば、衣食住とも、ソツンに費用はかゝらない。米野菜食位は、國民全部をして、洩らす處なく、何時でも供與するの道は、無いものか。

刑務所に在る犯罪者でさへも、食もある。仕事もある。寝る所もある。然るに、善良なる國民にして、高利貸には、攻め苛まれ、明日の食にも、心を憚ます者も、少くはないのは、さうしたところか。

希くは、陛下の赤子をして、一人も饑ゆる者、無からしめんことを、而して我が大日本帝國をして、震然たる、一大家族的國家たらしめんことを、祈りて止まざる次第である。

たが其れには、單なる形式的政治工作だけでは駄目だ。さうしても、宇宙の原理と生命とに徹したる、眞宗教に更

生しなければならんのだ。眞宗教とは何だ。珍奇なものではない。基督、釋迦が説かれた所のものが其れた。諸君、宇宙の方則は不變だ。眞理は不朽だぞ。其の根本に徹しなすれば、宗教に新しいものなんかは、何も要らぬ筈だ。然らは何だ。眞宗教の根本とは？、他ならず。活ける至誠の道、即ち是れである。

こないだ檢舉された、皇道日月團と云ふやうな似非宗教ならば、人の子を毒すること、阿片よりも甚だしきものであつて、アンナ種類の俗悪醜穢な不良迷信なんかは、ソビエツトロシアが造つたやうに、叩き潰した方が、餘程ましであることを、私は重ねて茲に、強調して置かざるを得ない。

あれに類するタワケた偽宗教が、され程蔓延つて居るか分らない。無智な人格下劣な匹夫共が、白装束で勿體らしくお前は大神格にして遣るなと、タワことを云ふと、相當の教育を受けたものまでも、財産はもとより、身も魂も投げ出すと云ふ始末だから、科學的精神的の眞宗教による理想社會の實現などは、まるで痴人の夢ではあるまいかごさへ、危まれざるを得ないのである。

私は、バーナーとシヨウの言を以て、此の項を結はうと思ふ。「私は、マルクス説を排撃し、階級闘争を否定する者である。私は社會政策的、相互扶助を希望するものである。あの立派な橋を、各人が自由に、通行が出来るやうに、万人常食のパンが、一般人に與へられたらこそ、考へざるを得ない」。

▽即座に打ち殺してやる

前項の高利貸から、借りた千五百圓が、Nの手に遣入るや否や、工事請負の方から、廻された體の頭丈な一人の破落

者A、——彼れは喧嘩をして人を傷け、近く出獄したばかりの男ださうだ——がやつて来て、懐の中で、短刀をガチャつかせ、Nから、其の金を根こそぎ、持ち去つて仕舞つた。其の男が或る日、一人の三百代官邸——彼れは中學は四年の終りで止めたさうだが、頭腦明晰、舌辭爽快、聞いて居つても痛快な位だ。——と共に、小石川の學生修道院に私を訪ねて来た。朝早くで私が洗面所で、體を拭いて居る時、案内されて這入つて来た。一人は洋服、一人は印袴を着て居る。

私は先頭のEだけに、ヤミ、軽く會話して、靜かに自分の室に這入つた。Eは最初強烈にN一家を、虐め抜いて居たが、初対面で、私の一喝で、私に附くやうになつたので、其の時も私は、事件に關して、Eのみ、極、穩かに話をして居つたが、突如、私は態度を決めて、Aの方に向き直り、「時に君、君はよく、短刀などを振り廻して、人を脅かすさうだが、俺なんかそんなことをするさ、一突きに、打ち殺してやる」と、キツと睨めつけてやつた。出し抜き、全くの不意討であつたから、彼の顔色は、サツと變つた。後、彼は人に向つて、今まで一度も、恐ろしいと思つたことは、なかつたけれども、肥田先生に云はれた時には、ギョツとして、すくんで仕舞つた時、迷憚したさうだが、此の時から彼も亦、最も忠實に、私の爲めに、手足をなつて、働いてくれるやうになつた。云ひ附けたことは、豫期以上に、立派にやつてのけた。

▽お前こそ監獄へブチ込むぞ

Sと云ふ、小石川切つての強か者がある。此れにはEとA二人でさへ、手も足も出せなかつた。Sは多數の職人を使

つて居るが、二人が交渉に行くさ、此細なことを、かこつけに、職人共の横つ面を、ピン／＼と張り飛ばし、叱咤怒罵するので、思はず睨息いて仕舞ふさ、彼等は云つて居つた。而も眼は鋭く光り、口は斜に、釣り上つて、見た丈でも大抵の者は萎縮するやうな形相をして居る。

彼は、大坪はかりの舊い物置の上に、堂々七階の大校舎を、新築することを、承諾すること、ベテンの承諾書と與へ、Nがウツカリ安心して、それを打ち壊して、建築にさかりかゝるさ、九分通り出来上るまでは、黙つて居つて、急に「なぜ、他人の家を、無断で取り壊したのだ。其の家は、抵當に這入つて居るんだぞ。よく承諾書を見る。其の家は其のまゝ、置いて、其の上に、新しく建てるさ、書いてあるぢやないか。損害賠償ならば、地上權の買収として、一万六千圓出せ。それでないさ、家屋破壊罪として、監獄へぶち込むぞ」と、暴はれ込んで来た。「一切は、肥田に任せてあるから、學生修道院へ行け」と云つて、放つて置け」と、私はNに云つて置いた。

するさSは、巢鴨警察署に訴へた。警察からは、Nに向つて、召喚状が来た。私は代つて署へ行き、堂々大廳に、辯じ立つた。「Nなんて云ふ馬鹿者は、さうなつたつてソナ事は關はないけれども、只ア、云ふ惡漢が、巧に法網を潜つて、弱い者虐めをして居るさ云ふことは、社會民衆のために、容赦すべきでない。であるから、關係者一同ならば、先方の辯護士全部を、此處に召喚して貰つて、私と對質させ、以て事件の真相を、明かにして頂きたい。私はつまらんN一個のためでなく、社會の害虫を除く意味に於て、これを御願ひする」と云つたら、血の氣の多い警官達は壯快な顔色で、一同耳を聳てた。

「ぢや、さう云ふ人間を、召喚しようか」と云ふから、私はコレ／＼と、十名許り指摘して署を出た。召喚された者

が、アベコベに、召喚するに云ふのである。

歸途、事件の張本人B學校長Tを訪ねると、丁度、彼等の仲間の者が十四名、集まつて協議の最中であつた。中にSも這入つて居つて、これは後で聞いたのであるが、誰れが來ても、私がみんな、遣り込めて仕舞ふので、彼れはブリ／＼と怒り出し、「何だ。ドイツもコイツも、意氣地の無い奴等はつかた。肥田の小僧め、俺が今度、一捻りにしてやる」と、私に逢ふのを、待ち構へて居つたさうだ。ソコへ、私は偶然に、這入り込んで、行つたのである。

其處は細長い、狭い室で、十四五人も這入れは、ギツチリなんだ。入口のドアを締められ、は、出ることは出来ないT校長は、「さうぞコチラへ」と、一番奥の椅子へ、私を招待した。私は、「では、失禮」と、軽く會釈して、這入つて行つた。私の右がT校長、左がSである。一同、暫らく無言……。

するところは、綱を放たれた驕馬の如く、其の恐ろしげなる顔を、私に向けて、「何時までもコンナことをして居つてさうして呉れるんだ」と、ブリ絡んで來た。私はソナ無禮な言葉には答へない。黙つて腕を拱いて居ると、彼は、突如、私の顔の前に拳固を突き出し、「これッ、さうしたんだ。×××を監獄へぶち込むぞ。監獄へ」と、拳固を振つて怒鳴つた。

私は言葉靜かに云つた。「家屋破壊罪なんて、成り立つものぢやない。成り立たんものを、告訴なんかすると、誹告罪で、」……。腰腹の中心を決め、威猛高になつて、私は動聲叱咤した。「お前こそ、叩き込んでやるぞッ」。

青天の霹靂だ。彼は無論、私が、彼の亂暴な威嚇の下に、縮み上つて仕舞ふものと、豫期して居つたのであらう。其處へ、夢想たにしなかつた霹靂落下に會つて、彼は一度に、疎んで仕舞つた。椅子の上で、腰を折り、背中を圓くして

鋭かつた眼光も、猫のやうになつて居る。私は斜に、見下した。丁度十五六の惡戯小僧が、親父に叱られて、手持無沙汰で居ると云ふ様子である。一同は悽愴な氣に、匿せられて居る。

しばらくして彼は、言葉も態度も、極めて穩かに、「如何でしやう。何時までもコンナことをして居つても、致方がありませんから、三千五百圓で、一切の解決することに致しましょう」と折れて出た。額付まで、丸で別人間のやうた彼は實に、七ヶ月の永きに亘り、誰が何と云つても、一万六千圓よりは、たゞの一錢一厘も、頑として譲歩しなかつたのである。

私は其の思も切つた態度を、稱揚したけれども、其の新提案は、尙ほ極めて、過大なりとして、承諾せず、決裂のまゝ、別れを告げた。

最初私が、其の室へ這入つて行く時、そんなことがあつても、大丈夫、私には何人も、一指をも觸れ得ないさ云ふ、確乎たる信念があつて、不安の念などは、私は微塵も持たなかつた。

曾て某大學のボートレースがあつた時、私も校友として、見に行つたことがあるが、法科商科對抗レースの決勝の審判に就いて、ゴタ／＼が起り、果は兩部の學生數十名が、入り亂れて、打つ蹴るの大亂闘をやり出した。私の面前で、標悍な一人の法科生は、ハイカラな一人の商科生の額を、持つて居つた太い杖で、力任せにボカリと叩くと、鮮血がサツト進つたのを、隙かさず脚を擧げて隅田川へ蹴込んで仕舞つた。

私は兩手を、懐の中へ突込んだまゝ、亂闘の真只中へ、這入つて行つた。右でも左でも、腰掛を振り廻して、叩き合つて居るのを、まるで芝居でも見るやうに、冷やかに眺めたのであるが、遂に一人も、私に打つて懸る者は無かつた

一靜百動を制するの妙諦は、私は幾度か経験した。機動的には、弓影も疑ふて蛇蝎をなし、寝石も視て伏虎をなし、此の中渾べて是れ殺氣、念息む的は、石虎も海鷗も作すべく、蛙聲も鼓吹に當つべし。爾る、處置機を見る。

▽ア、我れ君子にあらざる哉

負債山積、經營至難、將に倒壊せむとする禮禮學校を、巧妙に説きつけられて、好人物のNは、其の三文の價値なき無形の權利を、六千圓で買ひ取り、二千圓支拂ひ、後四千圓は、借用證書にして渡した。事志と違ひ、金圓の調達と思ふやうに行かぬことが分かる。相手方は、突如、千五百圓の供託金を積んで、沼津區裁判所の手で、Nの不動産全部に對して、假差押へを、執行して仕舞つた。

私は、此れが、教育事業を俱にしようとする者が、やるべき處置であるか、道徳的に彼等を責め、よし此れが、法律的には、如何なる引懸りがあるにせよ。假りに、教育者たるもの、執るべきやり方であるか。我が輩は私財を擲つても、飽くまで争つてやる。地方裁判所で敗ければ控訴する。控訴院で敗ければ、上告する。大審院で、最後に敗れるまでは、飽くまでも、抗争する。我が輩の方は、金圓上の争ひが目的ではなく、君達の非教育者的行動に對して、戦つて行くんだ」と、對抗數ヶ月、先方は二名の辯護士を頼んで、四千圓を、千五百圓までに讓歩して來たけれども、斷乎として容れず。終に一錢一厘も支拂はず。無條件解除にして仕舞つた。實はNはもっスツカリ買ひ繋して、八方に借財を、拵えて居る状態であつて、支拂能力はマイナスである。無い程強いものはなしか。

かくして私は、四千圓支拂に對しては、斷乎として全面的に拒否して仕舞つたが、私自身としては、大審院まで行つたならば、勝ち得るものたこの自信を持つて居つたのである。

Nは更に、學校の權利は三人共有、經費はN一名にて負擔する云ふ、契約書が容れてあり、且つ自分が、會計主任の名義をこつて居るので、八方から、支拂つてくれとの、請求がやつて來る。一切は私が、委任されて居ると云ふのでそんな者まで、皆私が居つた學生修道院へ、押しかけて來る。

私は先づ此の騙料を、斷ち切らねばならぬと考へて、校主と辯護士とに、契約書を持つて來て買ひ、彼等が事實を曲して、Nをして、如何にも有利なるが如くに、思惟せしめ、終にかくの如き、馬鹿けた契約書まで、容れしむるに至つた、悪辣を摘抉し、忽ちピリ／＼……「こんなものは、要らん筈だ」と、裂き絶つて仕舞つた。

「アッ」。驚いたけれども、もう机上に千切り捨て、仕舞つてある。彼等が嗚然として半視したのは、只私の強力なることを、恐れたからに過ぎない。ア、我れ、有徳の君子にあらざるかな。其の處置、まさに破落者に類す、非難されても、豈辯すべき、一言の餘地があらうぞ。

▽倏忽！柔より剛へ轉換

或る重要な書類を、取り返すやうに、Nをやつた。「この位の優しいことは、一つ経験のために、自分でやつて見ろがい。理屈は、コレ／＼かう云ふやうに」と、話方まで、充分に教へてやつた。其れから、Nは數回行つて交渉したけれども、更に埒があかない。

其處で、私が行つて話した處が、「其れでは今晚七時に、こちらから参りますから」、このことであつた。来たらずたせて置けよ、云ひ残して、七時近くに、Nを銭湯へ出かけた。

八時頃に歸つて見ると、人相の險惡な、四十七八の男が、待ちあぐんで居る。私は、「ヤア、御苦勞」と、軽く挨拶し、「さうぞ、お樂に」と、會釈して、直ぐ、胡坐をかき、テーブルに倚りかゝつて、頬杖をついた。私の此の傍若無人な態度は、可成り、彼れの顔にさわつた見え、此の小僧奴が云ふ、氣持は、アリ／＼と彼れの顔に讀まれた。けれども私は、ソナナことには、更に頓着なく、頬杖をついたまま、「ファン、ファン」と、先方の云ひ分を、聞いて居つた。彼は子分を澤山持った請負師で、代理に頼まれて来たよ、自ら語つて居つた。そして、「契約書も入れて呉れないから、信用して、書類が返せないではないか」と云つた。私は兼ねて、用意して持つて居つた契約書を、懐の中から取り出し、ボンと、テーブルの上に、放り出して、靜かに、云つた。「コンナものが、要るならやる」。

抑えに抑えた彼の憤怒は、一時に爆發した。叩きつける好機、至れりとして、後へ身をそらし、「今更、コンナ物が欲しいと思ふか。人を馬鹿にするな」と、威猛高になつて、怒鳴つた。

私は尚ほ、平然として、頬杖をついた儘、「これが、圓滿な協定が、出来ないさすればだ。最後は、法庭に於て、争ふの外はあるまい。其の時に於て、一番有力な材料になるのは、此の書類だ」。其處までは、穩かに云つたが、其れから、上體を起して、中心を定め、右手を上げて、「コンナ物とは、何たツ」。力強くテーブルを叩いた。ピシヤツ……彼は、一度に嫌んで仕舞つた。

暫らくして、オロ／＼聲で云つた。「詳しいことを、知りませんので、さうも、飛んだ失禮を申上げました」。兩手

をついて、低頭した。「宜しい。明日の午前九時まで、待つてやる。書類一切を、此處まで持つて来い」。私は嚴然として、云ひ放つた。彼れは、平身低頭して、ソ、タサとして、歸つて行つた。そして、翌早朝、七時頃には、もう一切の書類を持つて来て、丁重に返してよこした。鷹立睡るが如く、虎行病むに似たり。正に是れ兎を掴み、牛を喰む機前の形。故に士は、聰明露はれず。才華逞ましからざるを要す。纒に肩輿任鉅的の偉力有り。

▽神が鬼となり、鬼が神となる

Nが學校經營をやるため、資金を調達するのたごて、相談に来た時、私は、臺所の爐傍に坐つて、彼に云つた。「十餘年も、田舎に這入つて居つて、何等學校經營なごに、經驗のない私が、此の煤だらけの臺所で云ふこと、學校經營に多年の經驗を持つTと、又永く教員生活をして居る君の云ふこと、何れが當るかは、要するに、もう一ヶ月半すれば、分る譯だが、い、か君、俺は、太鼓判を押して、……一抱もあるやうな太鼓判を押して、此の事業の失敗であること、斷言して置く。い、かね。い、可成の豫言もやなくつて、明言し、確言して置くんだ。君は應募學生を、二百名として計算を樹て、居るのだが、實際は十八名以上はないのだ。十八名だよ。二十名とキツカリ云はずに、十八名と云つて置く。此の豫想が、必ず、適中することを、俺は斷言して置く。君が二百名として居る所に、誤算と失敗とが、潜んで居るのだ」。

Nは、恨めしげの眼を上げて、私を見た。それも無理はないのサ、二百名以上の應募者があるものと、確信する程、勧誘、廣告の手段を、盡して居つたんですからね。それをタツタ、十八名たなんて、云はれたのでは、資金の援助をす

るのが厭やで、出まかせを云つて、妨害するのたご、感じたのも、無理はないことだ。
 宣なる哉、彼は、斷崖から墮落せむせざる彼を、助けてやらうとした、私のことをは、「アノ耶郎は、村でも、十人
 の中、九人までは悪く云ふ悪漢だ。先づアノ鬼見たやうな奴を、東京から追つ擲ふ、算段をしなければ、駄目だ」と、
 先生先生、××先生で、下へも置かずに黙待し、尊敬し、やがては、骨まで舐らうとする恐るべき仇敵に向つて、私の
 ことを、悪言罵倒して居つたのである。

然るにさうだ。四月十日の一切になつて見ると、驚く勿れ、應募人員十六名——讀者諸君、これは凡て事實談です
 ぞ。私が豫言したのよりか、尙ほ二名足りないのだ。

二百名以上を、收容するの校舎を、新築し、それに要する一切の設備をして、當にした生徒がなくて、收入が得られ
 ないさすれば、勢ひの赴く所は、さうなるのか。前日、自分を神と崇めた菩薩達は、忽ち夜叉の本來面目に立ち歸つ
 て、ギユウ／＼とNを、責め附けて來たのだ。如何なる深睡者も、痛さに目覺めざるを得ぬではないか。

此に於てか、魔、魔惡鬼たる私をこそ、救ひの神として、彼れは、頼り附いて來たのである。印章まで渡してある
 と、云ふやうな、信任ぶりであつたから、莫大な金をやつても、受取證一枚取つてあるのではなし、今になつて書けさ
 云つたさうで、書く筆はなし、止むなく、Nの妻をやつて、出納簿を持つて來させ、徹夜して寫し取らせるさ、云ふ始
 末、そんな工合であるから、有力有効な材料は、みんな實印を押して、ボン／＼取られて居り、私は實に、コチラから
 供給した武器に對して、赤手空拳を以て、立ち向はなければならむ苦境に、立たせられて仕舞つた。

此の事件を片付けるのに、學生修道院に居つて、七ヶ月の日子を要した。但し、如何なる場合にあつても、中心力の

鍛錬によつて、英氣も衰へず、精氣も衰へず、精氣神々の講演を、屢修道院でやつて居つたことは、當時在舎の學生諸君が、能く
 知る處である。

實は、十六名位の豫感であつたが、豫備として二名多く、云つて置いたのである。さうしてそんなことが、分るか？
 分るのではなくして、感ずるのだ。純眞な正中心の理智鏡に、フェイス映つて來るのだ。チャント感ずるのであるから、
 當るも八卦、當らぬも八卦と云ふ個中さは違つて、實にビシヤ／＼と、よく適中する。涅槃はこれ正見道なり、正見道
 とは則ち涅槃なり。

▽斷じて懸道路線は來ぬ

ついでに面白い話を一つ、入れて置かう。伊東稻取間の懸道路線の争奪問題に於て、私は、國立公園海岸の第一候
 補になつた程の絶頂を抱いた、海岸線を主張したのに對して、縣土木課は、單に經費がかゝらないさう云う丈の理由で
 最短距離の山の手線を擧げた。村會は海岸線でなければ、地元負擔金の寄附をしないさういふ決議をした。然るに山の手
 線に近い部落は、八万四千六百圓の地元負擔金の中、先づ三万四千圓の現金を寄附して、土木課に向つて懸行を願出
 した。土木課は喜んでこれを容れ、山から林から、メット切り開いて、道幅の鹿杭まで、全部打つて仕舞つた。
 其の路線が、八幡野の街道を横切る。眞正面に、以前、八幡野で、自動車の停留所をやつて居つたが、新しい家を
 建てやうとして居つた場所があつた。

土木課員はけに苦けて、此處は懸道路線の眞ん中に當るから、家を建て、はいけない。建て、も直ぐに取り毀すこと

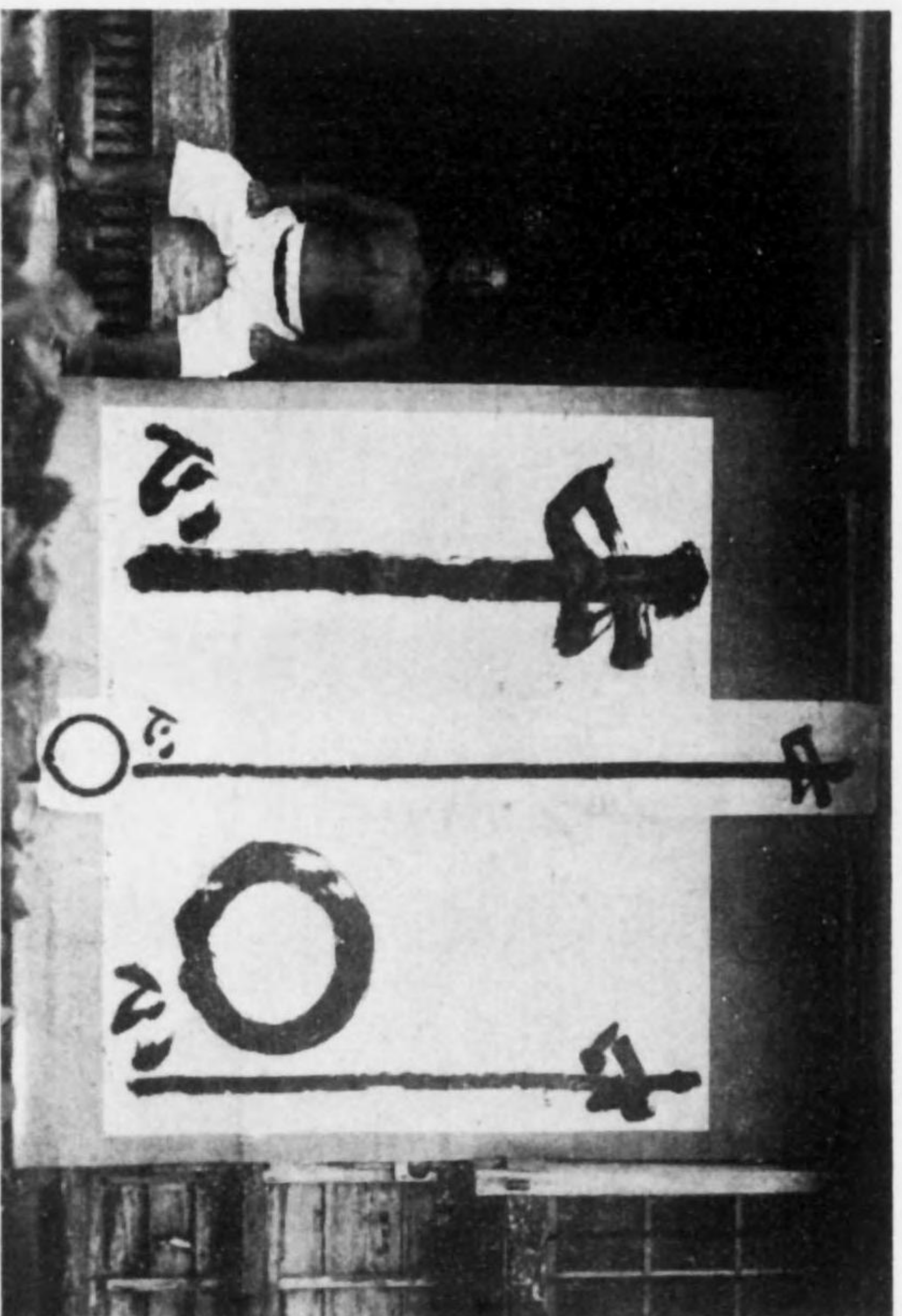
なり、さうなつても、移轉料はやらないからと、警告した。幅四間の縣道は、もう數丁の先まで出來上つて居る。こゝなつては、路線の變更は、絶対にやらないと、縣は屢々聲明した。反對部落民は、私に對して、惡口雜言罵詈訕笑の限りを盡して居つた。

此の時、Gは私に尋ねた。「材料は買つて仕舞つたのに、さうしたら良いでせう」と。私は言下に答へた。「大丈夫路線は來ない。直ぐ建つて、かまはない」と。彼れは直に建築にかゝつて、縣道路線の幅を標識した、燒杭と真正面に向ひ合つて、立派な二階建の家を、新築して仕舞つた。

此れを見た區民は、「飛んでもないことをさせて、今に間もなく、立退きを命じられるのに、移轉料は貰へないし、其の時の肥田の顔が見物だなあ」と、口々に云ひ罵しつたさうである。

だが、矢張り來なかつた。メツこ下けられたのが、現在の縣道である。起工數年前、伊豆東海岸の各町村で、路線問題の紛糾し始めた時、私は當時の伊東知事に、書を送つて、海岸線を取るのになければ、八幡野、赤澤約半里の間は、越え難き溝壑となつて、永く、熱海下田間の交通を、遮斷するであらうと、云つてやつたが、果して其の通りの状態を數年間曝して居つた。

而して私が立案した通りにやれば、四區の部落は悉く縣道に接して、村は將來、道路費は錢厘も要せなくなり、學校統一も出來たのであつたに、用ひなかつた爲めに本線以外、數條の而も長距離の連絡支線を、造らなければならなかつた。其の上、縣は所謂政治的解決で、其れ等の村道の大部分を、縣費を以て作るの、非合法的處置をさへ、取らなければならなくなり、一方個人寄附者等は、莫大な高利に苦しみ、運動費の使ひ方で、内輪喧嘩の醜狀をさへ曝露した



著者の中と揮毫

私の足元の區民が擧つて猛烈な反對運動を起した時私は彼等に向つて直かに云つてやつた。「君達は正面に絶壁が聳え立つて居ることを知らない。其れをワイシヨクで押して行つて岩にぶつかつても氣が附かない。鼻がつかへても氣が附かない。鼻の皮が剥けて血が出てもまた氣が附かない。肉が毛れて鼻の骨がコツクと岩に當つて音がするので始めて何だ岩があるのか。それでは行かれないなと、氣が附く位のものだらう。まア其れまではワイシヨクと押しかけて行け」こ。果して其の通りになつたワイ。

そんなことは、つまらん些々たることで、可なり大きな問題の推移等に就いても、虚無の中心を以て觀察を下すのに多くは的中して殆んど誤ることはない。

だが其れは何も、靈智でも妙智でもない。只中心虚無の明智に、過ぎないのだ。恰も直覺啓示の如く速に解りはするが結局其れは、冷やかな論理學的綜合的觀察が虚無清明の中心に纏まつて提供されるのに過ぎない平凡事なんだ。

正中心力一閃、あらゆる雜想俗念を踏破し去つて、明智獨り煌々たる時、ボカツと、自ら心鏡に映じ來るのである考へざるに考へ、觀察せざるに觀察する、虚無の活用に外ならぬのだ。

鳥語虫聲も、總て是れ傳心の訣なり。花英草色も、見道の文に非ざるはなし。天機清徹胸次玲瓏物に嚙れて皆會心の所あらむとは即ち其れ乎。

▽直に大幟を書く

楚の項羽は、「書は以て、姓名を記すれば足る。大丈夫の士、まさに須らく、天下を擲行すべし」こ、豪語したさう

だが、私も亦、字を旨く書くやうに、なりたいたまは、毛頭も、考へたことは、無かつた。中學でも、習字の時は、遊ぶものご、心得て居つた不逞者である。其の罰は顔面、私の字の下手なことは、御話にならない。

然るに、中心力の鍛錬を、やるやうになつたら、飛ぶやうな、筆勢の字が、書けるやうになつた。變なことも、あれはあるものである。中心運動の効果が、文字にまで、及ぼうことは――。

村の若者代表数名が、私の處へやつて来て、お祭に、お宮様の前に立てる幟を書いて呉れよ、頼まれた。嘉永年間、私等の彦宗さんに、書いて貰つたが、スツカリ破れて仕舞つたから、是非とも書いて呉れよのことであつた。経験が無

いからさて、一應断つたが、重ねてやつて来て、一切の準備をするから、是非書いて呉れよ、強請まれた。

よしッ。書かう。魂で書くッ。龍躍り、虎嘯く。其の意氣で、書きなぐれ。――快諾――。

昭和九年八月十七日、午後一時頃、一切の仕度を整へて、多くの青年がやつて来た。前の幟は、文句が違ふからとて、神官が書いた紙片を持つて来た。見るこゝつは、「延喜式内來宮大神、昭和九年九月十五日、岡若者中」、もう一つは、「當國一社八幡宮、昭和九年九月十五日、岡若者中」となつて居る。

書く時には、青年を手傳ひによすから、こ云ひ残して、彼等は歸つて行つた。青年が歸るや否や、私は直に、座敷の唐紙や障子を外して、書く準備を整へた。

それから私は、素裸になつて、裏庭に拵へてあるプールに行き、龜の子束子に、洗濯石鹸をぬたぶつて、ゴシ／＼と全身を洗ひ、プールに飛び込んで、數回泳ぎ廻り、それから、道場に這入つた。私は渾身の力を込め、猛烈極まる練習をやつた。

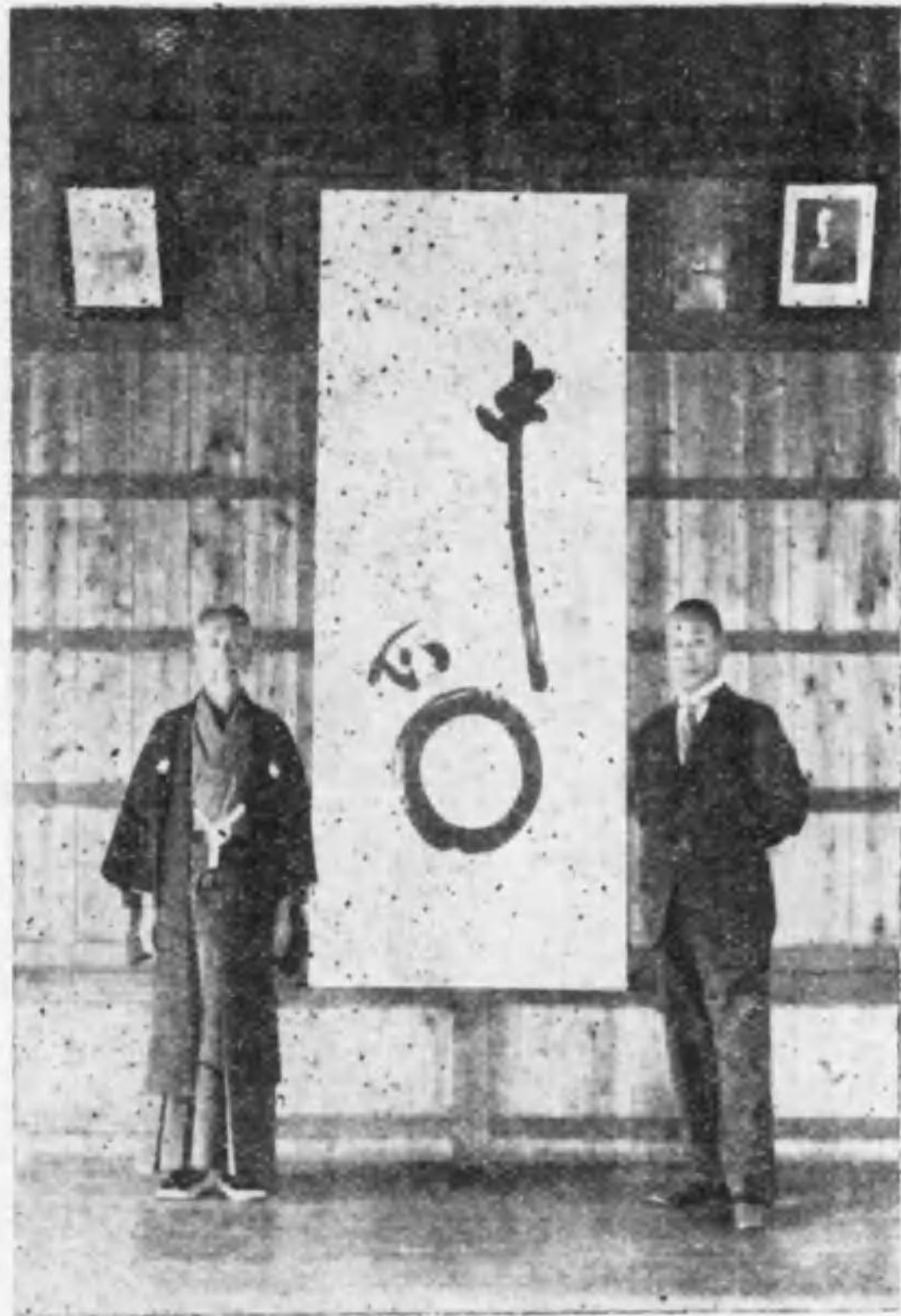
當時私は、豪い力を振つた中心力拔刀術で、生憎右前腕筋を痛め、力を入れて、手を握ることさへ出来なかつたので大きな文字を書くことなどは、ごうかと思はれたが、「何、そんなことを、關ふものか。腕で書くのぢやない。精神氣魄で書くのだ。生命で書くのだ。中心の魂で書くのだ。それにはウンと、腰と腹の力を練れ」と、全力を集注して私は猛練習を行つたのである。それから庭前へ出て、鐵のレールの一間もある奴を、ブン／＼と縦横に振り廻した。

普通、字を書くのには、力仕事なごしない様にして、腕を休めて置くこと云ふことだが、私のは其れと、全く正反對な譯だ。

汗を拭いて座敷へ戻り、運動ズボン一つに、バンドをキチツと締め、足袋を履いて正坐した。腰腹の中心には、生命の籠もつた、力學的無形の球が、輝如として、潜んで居る。

二升の墨汁を、バケツへぶちまけ、直徑四寸の大筆を、其の中へ突き込んで、下書もせず。習ひもせず。何の標もせず。進る氣合と共に、幅五尺、長さ二丈八尺の大幟二本へ、一一枚大の文字十五を、一擧に、殴り書きにしようとするのだ。

大筆にタツブリ墨を含ませ、私はジツと見詰めた。正に是れ、獅子兎を撲たんとする刹那の意氣か。……ビター――神靜まり、機、閃く……ヤツ、――裂帛の氣合と共に、中心力は筆端に送り、ビシヤツと打ちつけるこ、飛沫はサツと聲の上に敷きつめた新聞紙から、柱から、廊下から、ガラス障子まで飛ぶ。私は顔から、腕から、體まで被る始末……ヤ、ウン、エイッ、一氣呵成……約三十分――。見て居つた妻と、三人の子供等は、喊聲を擧げた。字が活きて



學修道院強健術道場

飛び出しさうた。準備に時間を取られた爲めに、書き終つた時には、夕陽、西山に白つき、閃影録に、八幡野の原を掠めた。ついでに、横一枚大の紙に直徑二尺二寸の大圓と、中の字の棒の太さ七寸からあるものを書いた。

翌十八日朝、長男修一郎を、消防部長の處へ走らせて、出来上つた云ふことを知らせた。昨日、晝過ぎに持つて行つたのに、今日はまだ出来て居る云ふのだから、部長が来て見て、驚いたのも無理のないことであらう。

書くのに當つて、一つ注意したことは、一點一劃と雖も、苟もせず。念と力を入るさいふこと、即ち中心力を込めて、書くけれども、慌てないこと、云ふことだけであつた。

この魂の氣合で、書き殿つた大織も、これから毎年、九月十四日から十六日迄、八幡、來宮兩社の鳥居前に立てられて、翻轉たる風に躍ること、なつた。

岐阜高等農林學校教授鈴木榮太郎君は、内務省の命を受けて、全國神社の調査をやつて居るが、こなた私に遊びに來られて、此處の神社程、幽邃莊嚴な境内は、殆ど見たことが無いと、感嘆して居つた。

境内には不思議にも、熱帯地方の奇木異草が茂つて居るので、今度、内務省から境内全部を、天然記念物として、指定せらるゝに至つた。

山と山の谷合に、古木老樹が鬱々として繁茂し、太い蔓藤が中空にブラ下つて居る。其の間には周りが、三抱も四抱もある様な、老杉數十本が、轟々として數十丈、天を摩する見事さ。社前にある最大のもの、周囲一丈五尺、仰ぎ見ると、杉の皮の大瀑布が、九天から落下して居るかの壯觀である。何百年を経た本社神殿の神寂たる聖容、其の彫刻の古典的な風格、身は恰も遠き神代の世界に逍遙するの感あらしめる。

昭和九年九月二十日、(大阪地方を荒らした、アノ大暴風の前日) 甲州小沼に於ける、両親の記念碑建設に就いて、努力奉仕をして呉れた、村の人達の希望により、私は七十餘枚、書き殿つた。一番骨を折つて呉れた小山盛吉君(村會議員)が、其の日も、愚摺りに来て呉れて居つたが、夕飯を喰べに行くまでは、私はまた着手して居ない。同君が食事を済ませて、歸つて来たら、全部書き上つて仕舞つて、座敷から廊下から、一杯列べてあるので、吃驚されたが、悉く、中心力の氣合で書くのだから、瞬く間である。

八幡野の、八幡、來宮兩社の大幟も、中心の氣合で、書いたのであるから、一本、タツタ十數分で、書き上げて、仕舞つたのである。

同八月二十二日、妹の夫、其城治君(瀨洲國々道局第二所長)一家が、遊びに來られて、これから、赤澤の海岸へ行かうと云ふ矢先、みんなの仕度の出来る間、幾枚程の鳥の子に、幟を書いた大筆で、「誠」と云ふ、一字を書いた。同君も可成、離れた所に、立つて見て居られたが、誠と云ふ字の、跳る所で、筆を振つたら、シュウツと飛沫が飛んで、同君の浴衣を汚し、更に一問半も離れて居る、東京日本橋の橋原商店で求めた、立派な唐紙にまで、容赦なく飛び散つて、黒斑々の記念を、残して居る。

九月十五日の祭には、私は居らなかつたけれども、字が活きて飛び出しさうたとは、衆評の一致する所たて、村人から、旅先の私に、通知があつた。

かくの如く、正中心の鍛錬は、あらゆる方面に向つて、持たなかつた技能までも、興へて呉れるものである。

對島村長堂森實藏君は、縣から派遣された手腕家で、齡六十歳、漢學の造詣頗る深く、體量二十餘貫、音吐巨鐘の如

き偉丈夫である。着々目覺ましき治蹟を、擧げつゝある。再三切望されて、止むなく贈つた私の書に對して、左の一編を、縣の雜誌に寄せられた。

▽隠れたる偉人の書に就て——堂森實藏

田方郡對島村八幡野に、隠れたる天下の偉人がある。其の人を肥田春充先生と云ふ。

肥田先生は、最高學府を出で、法學文學に造詣深く、更に人口に膾炙せられて居る、川合式體術の大先生である。

先生が、陸軍中尉服に正裝した姿は、誠に正々堂々たるものた。軍人の典型と云ふも、過言ではなからうと信ずるのた。

肥田先生が演壇に起つて、國事を論ずる時は、演説三昧だ。此の場合自己なく、聽衆なく、只熱烈なる雄辯を以て、説き盡す眞理あるのみだ。更に進んで佳境に入る時は、先生の精神は緊張して、顔面は紅潮し、拳骨を拵へて演壇を打つ。拳骨の肉は裂け、血潮流るゝも、我を忘れて猛然として、力説する。如何なる反對者も、肯定せしめなければ指かないと云ふ概がある。聽く者をして、知らず識らずに、襟を正して、拍手せざるを得ないまでに引きつけて、陶酔せしむる大雄辯を有して居るのである。

而して肥田先生の川合式體術は、精神修養は勿論、病根の絶滅となり、忽ちに強健なる身體となるべく、顯著な効驗を奏することである。

曾て肥田先生の、軍刀を使用する型を見たことがある。電光石火で縦横無碍である。如何にも精神力の充實した、體

術より出發した動作なりと、痛感した。更に軍刀の先端を見れば、殺氣颯々として生じて居るので、慄然たらざるを得なかつた。殺人劍となるのも、活人劍となるのも、刀其のもの、本性ではない。使用者の精神力の發揮であることを、正に體驗することが出来た。

最近、肥田先生の御揮毫になつた、紙本半折に、「中心〇」と、墨痕鮮やかな健筆を振るはれた、貴重な掛軸を頂戴したのである。

肥田先生の偉大な大精神が、紙面に躍如として居るの感、禁することが出来ない。之を床に掛けて端座して繰返して拜讀する時は、如何にも神々しさを感じて、中心〇の文字から、燦然として光を發して居るのである。

「中」は、偏せざる中道を云ふのであつて、中道は眞理だ。故に中道は、天地自然の大道にして、嚴然として存するのである。

肥田先生揮毫の「中」の字の椽は、長さ三尺八寸餘、眞直ぐに引いてある。其の筆勢は、精神力と餘韻が充實して、一見軍刀の如く、一點の錆色もなく、晃々として輝いて、如何にも切れ味の好きを感じしめて居るやうに、宛然紙面に活躍して居る。恐らくは肥田先生も亦、中則劍の大精神を以て、書かれたものではなからうか。

「〇」は圓ではなくして、圓球である。圓満である。圓球は動靜の兩性を有し、圓満は仁、慈悲、愛の三方面を持つ肥田先生には、中心〇を生理學的に觀察した一大卓見があるやうだ。併し肥田先生の觀察を、批評することは、努めて避けたのである。

惟ふに「中心〇」は、智仁勇、三徳を具體化した哲理である。「中心〇」に依つて、之を唯一の精神修養として、

直に人格完成に資せんことを欲して、「中心〇」の掛軸に向つて、正坐して丹田に力を入れ、自己と融合せしめて以て、造次順沖にも、拜讀して怠ることなく、肥田先生御寄贈の御厚志の万分の一も報めんとする微意である。(昭和九年七月一日静岡縣廳内發行、雑誌「静岡縣」第九卷第七號)

▼殉教者の意氣

私が着物を着て居れば、普通の人と、一寸も變らない。否普通の頑丈さうな人よりか。餘程音なしさうだ。知らぬ者は寧ろ、強い意氣地無しと、見るかも知れない。其れ程當り前、普通の様子なんだ。其れに、平凡人の平凡な態度であり、話たつて、有りふれたことしか、云はないから、百姓は、百姓の友と思ひ、漁師は、漁師の友と思ひ、大工は、大工の友と思ひ、年老は、年老、小供は、小供の友と思つて、強い男は、夢さう感する者もない。況んや、六づかしい扼介物たなごさは、誰が、氣が附く者であらうぞ。

だが、着物を脱いで、見事に發達した體格を現はせば、誰でも必ず喫驚して仕舞ふ。これは一目見れば、誰にたつて解ることだ。けれども、其の筋肉、イヤ身體の中心、即ち腰腹の底に、板でも根太でも、踏み抜けて仕舞ふ處の、強大恐るべき力が、潜んで居るさは、誰れが想像し得るであらうか。然し、息つく暇もないやうな、猛烈極まる私の練習を一見した者は、私の力の物凄いなことを、直感せずには居られまい。

體格も、見れば解る。力も板でも踏み抜けは、直ぐに解ることだ。けれども其れ以上、また力強くて、見へないものがある。其れは精神力の強さだ。眞理に對する殉教者の意氣だ。典鏤を以て威嚇されやうとも、アラユル殘虐な殺し方

を以て、ズダ／＼に斬りさいなまれやうとも真理に對する私の信念は、一分たつて、一厘一毛たつて、扛けるやうな卑怯は斷じてしない。私には微笑を含んで、死に就くの覺悟と勇氣とがある。此の信念と自信とは、正中心の覺醒によつて、真理の實體を、明かに直觀するに至つて、自ら湧き來つたのだ。

これは白、これは黒、明かに眼で見ると、よく映るのであるから、たゞへ殺されるからと云つて、黒を白、白を黒とは、云ひ得ないではないか。死の本體の何ものなるかを知り、真理に忠なるの樂を、理解する以上、死は何等の恐怖でもないのだ。死を恐れない以上、真理に忠なるの味を、屈せしむる力は、世界にないのだ。

正中心に活ければ、自ら真理を樂しむに至る、真理の爲めには、天下を擧つて、敵とするとも、敢て厭はず、眼一世を空しふするの意氣は、自ら胸臆を、充たすに至るのである。惟た慮なれば、則ち情平かに、惟た情平かなれば、則ち公を生ず。惟た公なれば則ち明を生じ、惟た明なれば、則ち智勇を生ず。

▽身體改造以上の大變化

正中心力鍛錬の結果、與へられた大なる變化の一二に就て、私は尙ほ御話して置かなければ、ならないことがある。これは自己の正中心を養ふのは、單なる健康法位の、問題ではないといふ事を、理解して貰ふ上に於ても、必要があるのみならず、實は私にまつては、弱い瘦せかけた體が、強い立派な體になつた以上の、大なる變化であり、大なる驚異だからである。其の一つは、吃同様で、人前では、喉に口をきくことさへも、出来なかつた私が、正中心生命の眞理を説いて、偉大なるインスピレイイシヨシに、撲たれた時には、數千の聽衆を、磐石を以て、壓するが如き、辯力を振い

得るに至つたこと、其の二は鈍劣であつた頭腦が明敏になつて、記憶力が非常に、良くなつたこと云ふことである。

殊に前者の如きに至つては、其の素質は全然、零であるのみならず、實にマイナスのマイナスであつた。差違ひみて、低聲で吃りて、オド／＼して、此の點に就いては、私はまるで御話にならん、低能さであつた。私の強健術に就て、實演を依頼された時、私の何よりも苦痛であつたのは、説明することであつた。

村井外國語學校教授が、曾て私の著書に寄せられた序文の一節に、「さきに、強健術の著書を手にして、殆んど小説を読むが如く、感興津々、巻を捲ふに忍びなかつたことがある。そして、道會（神田橋側和協樂堂）に於ける日曜講義を、其の紹介に費して、恰も聽衆中に居られた川合君を強いて、其の完全なる裸體美を、壇上に曝した事もあつた。其の實験や血あり。涙あり。我をして文部大臣たらしめは、川合氏を擧げて、體育の全部を委任するであらう」と述べられて居るが、其の時私は、聽衆から招かれて、壇上に立たせられたが、只無言のまま、裸體となり、無言のまま、一禮して十種類の運動練習の型を、實演して示しただけ、終つて又無言のまま、一禮して降壇したやうな有様であつた。其れは實に、大正三年六月のことであつて、一ヶ半年の軍隊生活を終へた直後でありながら、演説の才能皆無の状態は、かくも儼なものであつたのである。

然るに其れは、大正十二年六月より、俄然一掃されて仕舞つた。少くとも自分の自信を語ることに就ては、何等の不自由を感じざるに至つたのみならず、屢々鐵火の熱辯を、振ひ得るやうにまでなつた。これは私にまつては、體の變化など、較べものにはならぬ程の、驚くべき大變化であるのだ。

さうかして人前で話の出来るやうにだけは、なり度いものたゞ、幾度やつて見ても、何時も慘目な失敗に、終つて仕

舞つた。學生時代に、神田の青年會館で各大學學生演說會があつた時、私の兄にも態々、聴きに來て貰つて、私は相當の準備を、練習をやつて、演壇に上つたが、忽ち耶治り倒されて、立往生の醜態を演じて、引き下つて仕舞つた。さうか弱き人達よ、又思ふに任せずして、失意落魄の境にある方々よ。沮喪せらるゝこと勿れ。悲觀せらるゝこと勿れ。憤悶せらるゝこと勿れ。立てよ。立ちて御身の正中心を、鍛えられよ。御身は夢想たにせざりし力と、光を、與へられて、希望の生を、拓くに至るであらう。

私の講演を聴いた人達の、感想録を少し掲げさせて貰う。是れ皆中心力發動の、變つた方面への、現はれであつて、其の根底は、全く同一のものであり、木に竹を繼ぐやうな、別箇のものではないのだ。讀者諸君は、此處からも、中心力活躍の流れを、汲まれんことを、望まざるを得ない。

▽瞬間の眼差、偉大なる藝術品

先生の温容、恰も春風の如く、満身是れ愛、先生の智能、恰も神の如く、満身是れ誠意。先生の體格美、恰も仁王の如く、満身是れ膽。一度壇上に立ちて獅子吼するや、舌端火を吐く雄辯、心肝を貫き、克く懦夫を起たしむ。(那是製絲會社常務取締役波多野林一君)

茲に心身二にして一、本體改造の術あり。誠に古今の獨創、日本民族の誇りなり、今其の人に逢ふて感あり。オ、其の肉體美の壯麗なることよ。ミケラロンゼロ今あらは、恐らくは刀を捨て、嗟嘆せむ。其の中心神祕の聲を放ては、颯々の英氣滿堂に漲り、二千の聴衆、磐石に壓せらる。忽ちにして電光閃くの趣、忽ちにして胡蝶舞ふの妙、人皆恍然

として酔へるが如し。

昔日の茅椽、今威容堂々の仁王尊、昔日憂愁の眉目、今櫻花爛漫の顔。昔日失意悄然の姿、今旭日昇天の慨、一度微笑めは、春風駘蕩、小兒も狎れて戯れむ。一度叱咤すれば、六尺男子の群も、戰慄萎縮して、動くこと能はず。一度激勵すれば、懦夫も又よく、奮然として起つ。文武備に備はつて、腹底に潛み、虛無恬淡の心境、涅槃城裡に遊ぶ。明智よく時務を知り、憂國憤世の熱淚、鬼神も爲めに泣かむ。剛強の精神、明徹の頭腦、嗚呼欽慕に堪えざるの偉丈夫肥田先生、掲げ來れば、正に之れ理想的英雄の典型にあらずや。

過ぐる夜、三時間に亘りて、暗誦せられたる、「現はれざる古今の名文詩名歌」の數々、明晰の頭腦、強大なる記憶力、聽衆只啞然として、驚愕讚歎の外なく滿堂寂として、息を呑む。獨り先生の力ある美聲は、活泉の如く、明々口を衝いて、四隅に響き渡る。心弦に觸るゝ處、或は泣き或は憤り、恍乎として酔へるが如し。此の詩を通じ、此の人を透して、天地の生命燦然として輝き、雅趣韻々として堂に滿つ。(那是製絲會社教育課木上愛之助君)

正義の聲か。神の聲か。恰も火山の爆發したるが如く、先生の中心より迸り出づる生命力は、僕の魂を囚へて仕舞つた。僕は未だこんな講演を聞いたことがない。こんなに感激したことがない。(青山學院師範科生木上完一郎君)

肩ゆるやかに壇上に立ち、全身全靈の一大精力を、ドツカ中心に、纏められし瞬間の眼差、一個の偉大なる藝術品に、接した様な氣がして、思はず恍然と、見惚れて仕舞つた。上野の帝展に於ても、丸善の繪畫展覽會に於ても、アレ程純眞、直に人の肺腑に迫る底の、藝術品は見られない。(慶應大學法科部生青木史朗君)



月山合川と著るけに堂講院道修生學

▽電力に打たれ筆動かす

昭和六年九月三十日、新橋平民食堂階上に於ける、肥田先生の御講演筆記をせよと、突然幹事より命ぜられた。私は困った。大生命力の熱火、熾々として燃ゆるかと思はれ、春風駘蕩、袂を拂ふあり。閃電の空を奔るかと思はれ、山間の湖の如き平靜と透徹とあり。正邪の双、悪魔を八裂きにして、怯夫をして立たしむるもの、あるかと思へば、其の温情慈愛高潔、鬼面をして尙、涙を絞らしむるものがある。かくの如く變轉極まりなき、天來の大雄辯を、如何にして記録することが出来やう、然しながら、誰しも困ることであらうと、思つて、止むなく引き受けることにした。

場所は、新橋停車場を、眼前に控へた處で、省線ガードの側であるから、喧騒甚だしく、紹介の辭を述べた、前辯士は、かなり高聲であつたが、聞き取りにくかつた。然るに先生演説に立たれて、靜かに一言一句、力を込めて、語り出さるゝや、街頭の騒音は、忽ち地下に沈むが如く消え去り、會場はシーンとして、針の落つるのも、聞へるやうになつた。先生の姿は恰も、東天の紅雲を破つて上り來る、朝日のやうであつた。麗光遍なく天地を照し、万物は活動を始め、眼界は次第に複雑となり、深遠となり、脈々たる生命の躍動するを、見るに及んで、次第に筆力の不足を感じ、屢々、其の金玉の名言佳句を逸するに到つた。更に其の機關銃の連發式に、長いく詩や文章を、たて續けに原稿紙二頁三頁以上も、スラ／＼と暗誦された時などは、殆ど記すこと能はず。一片の原稿を持たれるではなし。滔々として、水の流るゝが如く、筆記の手はゆるめる暇もない。

更に驚き且つ困却したことは、春暖の野に子守唄を聞く思ひで、書いて居る時、突如百雷の合して、一瞬時に碎くるが如き氣合で、聴衆の心肝を、劈かるゝことである、ハツと思つて壇上の先生を、仰き見たまゝ、筆はバツタリと止まつて仕舞ふ。書くところの話ではない、筆持つ手はもとより、全身電氣に打たれたやうに、痺れて身動きさへも、出来ないものである。先生の姿を拜すれば、赫々たる光明を以て、輝けるを見る。其の眼差の神々しさ、此の世のものは思はれない。

後にて他の院生諸君に聞いたら、みんな初め、五六行筆記しただけにて、鉛筆をノートを、膝の上に持つたまゝ、終に何をも、書くことが出来なかつたこと云ふ。是れは眞實である。吾も亦同様、筆更に動かす。汝は筆記者であるぞ。筆記する責任があるぞと、心は頻りに叱咤するけれども、指先は痺痺して仕舞つて、動かす事が出来ない。

最後に云つて置く。肥田先生の筆記及び著書を読む者は、如何に感動したからとて、其れは實際の、ホンの一端、極々の一小部分であることを、知らねばならぬ。先生の大生命力に、觸れむとするならば、直接其の大獅子吼を聴かなければならぬ。

されど直接、先生の聲に、接すること能はざる人々のために、敢て其の演説の調子を述べれば、他の如何なる藝術家よりも、ベートーベンの曲に、相通するものが多いこと云ふの外は無いのである。(東京文理科大學教育學部森純吾君)

▽九十三桁の數字の暗記

作曲には一定の規則がある。されどベートーベンは、決して斯る事を顧みない。實に大膽不敵の音律を取てす。され

ごより深き生命の規律には、一歩も外れて居ない。

地の中心に至らんばかりの、肥田先生の力は、單にマッスルの力ではない。神の力である。私は先生に惹きつけられました。靜かな内部から發した、強大な光を覺えました。(慶應大學經濟部芦田清藏君)

◇此の御講演中、統計其の他の數字、百數十箇所に亘りて、用ひられたるにも拘らず、先生は手に、一紙片も持たずして、滔々懸河の雄辯を振はれ、其の最長のものとして、九十三箇の數字を、連ねたるものを、暗記によつてボード一面に、走り書きせられ、ポケットより其れを記せる、一紙片を取り出して、會衆に讀み合せをなさしめ、遂に一字の誤りも無し。其の驚愕すべき記憶力に對して、聴衆は只、啞然として、自失するの外なかりき。自分も亦あの域まで行きたいと云ふのが、御講話を拜聴したる後、吾心の全部を、捉へたる感想なり。(慶應大學法學部湯淺三吾君)(見よ天地は活けりの講演にて卷末に掲載)

◇嗚呼これ人の業なりや。神の業なりや。先生一度、中心に緊張を與へらるゝや、眼光焔々として寸毫の隙もなく、嚴然たる雄姿は自然界の何ものをも、壓倒し去る魔力あり。

先生の英姿、まさに壇上に現はるゝや、新橋街頭、汽車自動車の喧言、忽ちして消え去り、聴講者一同、宛然電流を通ぜられたるの感あり。此の神秘的作用を受けて、時の移るを知らず。俄然心臓を抜かるゝこと數回、一瞬時と雖も、緊張を弛むるの餘地を、與へられざりき。神人合一の境地にある、先生の一舉一動、一言一句、電光石火の如き中心力無限大の充實なる生命力、世界的文章と雖も、此の瞬間の絶美と、莊嚴さを、寫し出すことは不可能ならむ。(慶應大學經濟科内藤蕭君)

◇五月三十日の夜、院生一同と、夜の東京を眞一文字に、新橋ステーション附近まで、吾等の自動車は疾走した。今夜吾々は、吾々の肥田先生の熱辯を、多くの聴衆と共に、誇りしげに拜聴するのたご、思ふご、自然兩頬の熱てり来るのを、禁ずることが出来なかつた。

平民食堂二階の會場、集まり来る人々を見よ。今夜は必ずや、何ものをか掴まねは、止まないご云ふ熱心を、皆面に現はして居る。先生が院生三名と共に、會場にお見へになつた頃には、最早満員で、立錫の餘地もなかつた。補助椅子は段々ご、前の通りまで塞いで仕舞ふ。

先生の講話が始まるご共に、聴衆はある靈能に打たれて、溜息さへも洩れて來た。慥然として輝いて居る、先生の顔を仰ぎ見た聴衆は、眞善美の極致の力で、壓倒されて仕舞つた。世間でよく云ふ、江河を決する熱辯は、先生の演説を聞いて、始めて其の實際を、見るごが出来た。満場寂然として、無人の深林の如く、只然し來つて、何ものをも焼き盡して仕舞ふやうな先生の美聲のみである。これこそは正に純一無我、中心躍動、心身合致の、大雄辯と稱すべきであらう。(東京齒科醫學專門學校水間忠司君)

◇堂々たる偉軀、水々したる顔、誰か一見して驚嘆せざるものあらむや。齡ゆきて益々若く、益々旺んる感を、會ふ度毎に、深からしむ。

先生、一度、壇上の人となるや、忽然として會場は、一變しぬ。前譯士の説話中は、新橋驛頭より來る騒音喧しく、耳を聳したるに、先生靜かに口を開かる、や、四周忽ち間寂として、千里一鳥の鳴かざる、大深林の如くなりぬ。嗚呼是れ何の力ぞ。何の業ぞや。清新の氣を會衆を支配し、目眩きする者なく身動きする者もなし。(慶應大學經濟科三浦博君)

浦博君

▽力の光か、光の力か

◇壇上に立たれた吾等の先生、何ご云ふ崇高にして清楚な、そして活気に充ちた先生たらう。自づと走つて共に先生の胸中に、溶け入らんごす。吾等の先生であるよ。

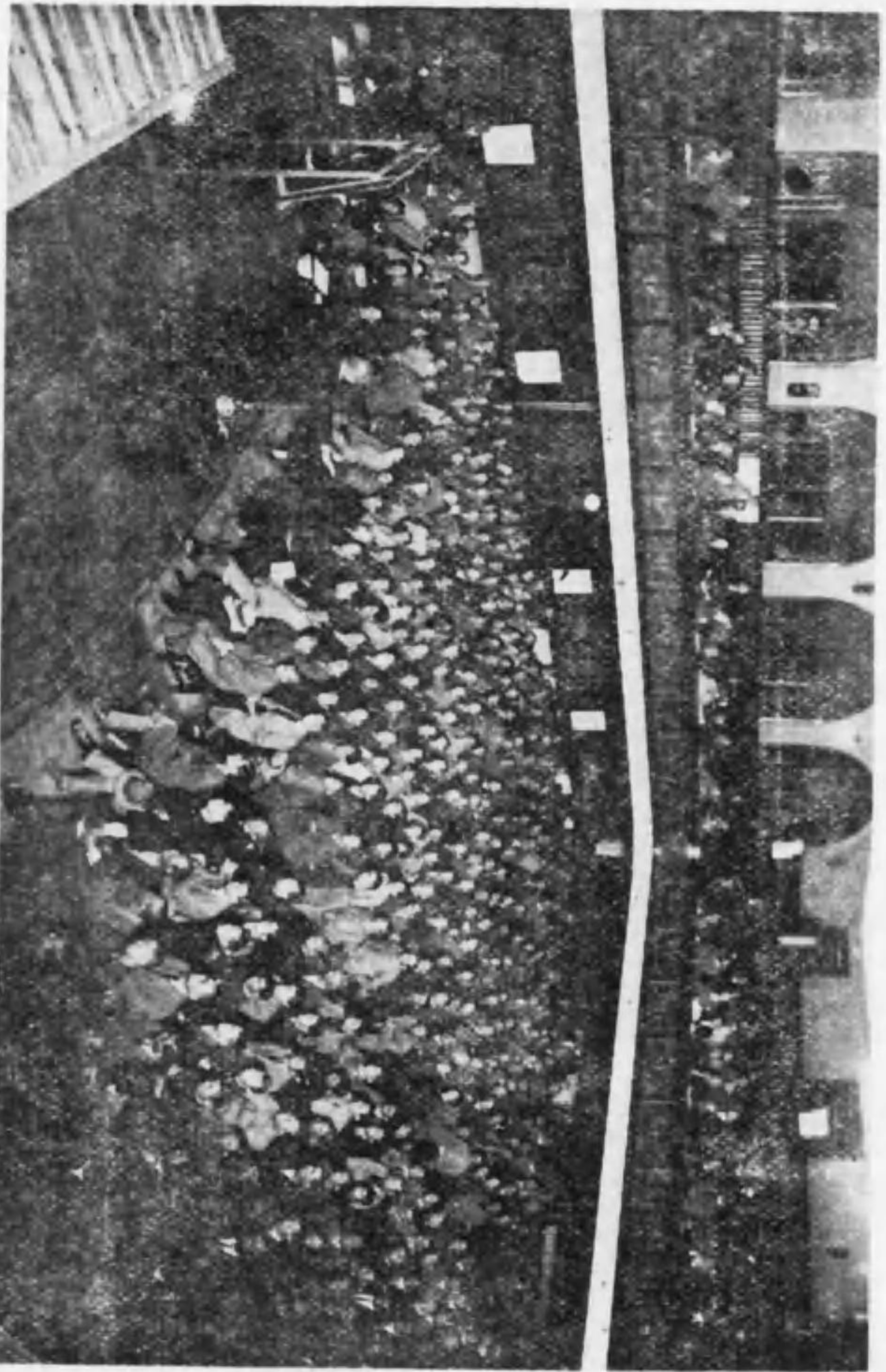
温容其のもの、如く、靜かに綻ぶ唇、チラリと現はれる、純白な揃つた齒、一言又一言、知らず我を忘る。時ならずして場内は、熾として、撒水の後の如し。鴛々たる街頭の喧噪も、何處へやら、消え失す。

時には知らず識らず、涙を催し、拳を握り、身慄ひし、或は歡喜に躍り、又は希望に燃え、吾等は皆、無我夢中の渦に捲き込まれしの状態。

先生は或は小羊の如く、或は猛虎の如く、或る時は、春日の和やかなるが如く、或る時は、怒濤の岩を咬むが如し。聞くのか、見るのか。神前にあるのか。山上にあるのか。海中に漂へるのか。雲中に坐せるのか。一人居るのか。多数居るのか。満身の肉は躍り、血は沸く。時には恍惚として陶酔し、時には慄然として、肝膽を碎かる。時空の觀念全く無く、茫然として、只凝視するのみ。

更に運動練習法演説に入りて、裸體の吾等の先生、有りつ丈けの美、勇、壯、麗等々の言葉を以てするも、到底現はし得べくもあらず。

緊張鋼鐵の如く、而しユツタリと、肥滿せる自然の美よ。肉體美よ。動作の鮮明にして、流暢なる。知らず恍惚ご



東京青丘會に於ける演劇

なる。

不思議と云はむか。至妙と云はむか。神の舞踏と云はむか。人間業とは、思はれぬ優観、美観、否壯觀……。

燦として引き抜かれた日本刀、力の光か、光の力か。凄光出で、唸りを放ち、電光雲を臂くが如し。凝視の鋭さ。大空颯ける鷹のそれさ、譬へんか。ヤツ、一聲の気合と共に、右手が刀の鯉口にて、一二寸動いたか。見れば、三尺五寸の長刀は、既に鞘を脱して、光せ陸離たり。瞬間、吾等は頭上より、足の爪先まで、電流を通じたるが如く、或る力に撲たれたり。神の怒りか。夜叉の亂舞か。寒毛悉く豎立せり。

殿たる掛聲は、猛獸の叫びに似たるも、白百合の如き気高き、美麗さは満顔に溢れる。蓋し、動中の静さは是れか。(東洋大學哲學科河崎勝彌君)

◇御講演に際し、金屬を打ちたる重きうな靴のまゝ、あの靈體(特に靈體と申上ぐ)を壇上に運はれたことは、眞に痛快事であつた。之は肥田先生でなくては、出来ぬ盛當である。

先生を一見して感ぜしことは、年と共に却つてお若くならせらる、様に拜したところである。あの肉體美を、眞に羨ましく思つた。

何時もながらの事なれども、御講演中の御暗記の様子を承はり、只々驚嘆の外なかつた。先生の腦の組織は、一種變つて居るに違いない。御死去後、學術のために、解脱の御遺言を希望す。

御講演を拜し、其の大進歩の妙技、神人合一の境を仰ぎ見て、只恍惚只嚴肅の氣分に、充つるのみであつた。昭和六年九月三十日記之。(那是製絲會社營養研究所主任鬼塚捨造君)

◇學生修道院では、肥田先生から度々、御講話に預かりましたが、御存知の通り、談論風發、其の止まる所を知らず而も説かる、所、高遠難解にして、筆記者の實に悩む所でありました。修道院に於ても度々、筆記を取ることを試みましたが、遂に満足なるものを得ず。こゝに御講話を掲載することが出来ない次第、讀者諸氏の御寛恕を御願する。(修道院第二十三號)

◇悠々たる心懷、從容たる態度、徹底的無執着、万鈞の重みある中心生命力、愛弟が益々圓熟の境に近づけることを喜ぶ。春山花開鳥聲朗。夏川水充香魚躍。(那是製絲教育總理川合山月)

▽理想の魂が貴い唄き

◇此の度は全く、凡てに禮を失したるこのみにて、衷心慚愧に堪へませぬ。然し小弟自身にさりては、豫て、御慕ひいたせし先生の、御高風に接し、親しく精練の極地たる、各種の御妙技を、拜觀するを得まして、何よりの喜びで御座ります。

殊に旅順及び、御伴ひいたして居ります時、御高教を賜はりし靈的、精神的、御悟道、御體得の次第は、全く平素より、心に留め居る、事項のみにて、先生の御高風を、目前に拜し、本當に心強く、有り難く存じたのであります。愈己の足らざるを思ひ、而も他人にのみ、任し置くを許さぬ、大任を果すべく、願へる小弟にさりまして、洵に貴い數日でありました。又高遠にして、切實なる數多の御教示の程、一々感激の至りであります。同じ縣下に、先生がお居で下さることは、只其れのみにも非常なる勵みみ力であります。今度先生にお目にかかりましただけで、愈元氣を

加へて参りました。浮薄情弱ならむさせる此の世、曲學阿世、小才辯口の徒に充つる現代に、行けるか。行けぬか。信する所に向つて、猛進するのみです。濱田壽一(靜岡縣學務部長)

◇昨日は眞に嬉しい、有難い、恵まれた、永久に忘れ得ぬ——貴い一日で御座りましたことを、衷心より感謝致します。先生奥様、御二方様の、貴い御柔しい御風姿に、接することを許され、洵に嬉しくつて仕様がありませんでした。そして四圍の風物、森のたすまひ、山の趣、何一つとして相應はしからぬものなく、この境に先生あられ、この先生方に、この景趣豊なるの感懐、洵に嬉しく、無邪氣な魂は、無上に物恥しい程、勇躍したのでした。貴い御高話を、御懇ろに御論し下さいまして、時の移るも覺えず。何一つとして、私共の魂に、貴い輝きと、印象を與へぬものは御座りません。先生の御文章に接し、先生と關係あるものに觸れる毎に、只讚美と歡喜とに、堪えないのです。眞に先生の在まし給ふことが、どんなに世界の輝き、日本の力であるか分りませぬ。先生の貴い御話、洵に又と得難く、深く肝に銘じて居ります。一々何から何まで私の理想の懐かしい魂が、貴い唄きをするが如くに感じ、獨り微笑まる、のでした。貴い時間を割いて、橋立其の他の景勝地に、親しく御案内頂き、恐縮の至りで御座りました。アノ森、アノ山、アノ海そして貴い先生につける、一切のものを偲びつ。——(濱田壽一)

▽よく抜けますなア位

◇九州を一巡して、歸りました。あなたの御手紙を拜見して、尊い御心持に、感じました。私には其れ程の事が分らず、又出来ません。御懐かしき思ひ出で、限りなく、突然の御たより、嬉しく存じます。何とも御無禮、又残念至極で

す。私は近來、外へのみ出がちでありました。御目にもか、れず、御返事さへも、差上げず。二重の御無禮、御許し下さい。御住所をも、確に存せず。表書の所へ宛てました。今度御上京の際は、是非御立寄り下さい。又何か、御たより申上げます。私は只もう、働くことだけ、それが何よりの楽しみです。同志は毎月、三万人計り殖えます。七十五万を越えました。私は確に見詰めた目標を、ダラダラと追ひかけて居ます。山の人に、こんな手紙、俗人の徹底ぶり、御笑ひ下さい。(希望社後藤静香)

◇先日は、長時間に亘つて、御垂示を賜はりまして、誠に有りがたう御座りました。私自身は、全然ものになつて居りませんが、かねて信水先生の御教へを拜聴し、又安藤さんからも、よく御話を承はつて居りますから、此の間の御話は、一々胸にこたへまして、息をつく餘裕もなかつたのでありますが、一般の人々には、難解であつたこと、思ひます。一人の體操教師は、腹式呼吸での、腹の膨脹力の大なるに、驚いて居ました。一人の校長は、よう抜けますなアと拔刀術の鮮かな所に、眼を睨つて居りました。先生御體得の境地の存在することすら、知らない人々には、恐らく、こんな程度にしか、分らなかつたものと、思はれます。御出立後、私如きもの、爲めに、御染筆を賜はつたことを承はり、意外に驚くと共に、深く感謝致して居ります。昨夜頂いて歸り、披らいて拜見致しまして、中心力其のものを紙面に活躍させた御筆蹟に接しまして、驚く言葉も御座りませんでした。(石黒立。(大阪府富田林中學校長))

▽孤獨的隱遁生活は神意か

元海軍兵學校教授、海軍大尉安藤藤治郎君は、私の運動法の、最も深い研究者の一人である。君の熱心にして、眞剣なる努力に對しては、私は涙ぐまき迄に、感動させられたことがある。

君が持つて居る私の著書は、研究事項や質疑事項で、全巻細かな朱字で、埋められて居つた。郡是製練會社で、強健術指導主任をして居られた。

曾て、私が郡是製練會社、強健術道場をやつた講演と、實演とに對して、感想を寄せられた。

「先生の御講演は、全く智さ力さの講演である。凡てが精氣と智さの、躍動發露である。聴衆は茫然として聽いて居る。講演が終ると、夢から覺めた様で、一種の不可思議力に魅せられて、居たことを感ずる。内容が大變六づかしいので、説かれる所が、餘りに大きく高いので、凡人には想像もつかぬ。雲の上から見た世界のことは、雲の下の人々には到底判らぬ。

強健術の御實演は、全く掴み所がないには困る。眞似が出来ない。軟かくユツクリして、のろい様で早い。何處に力が這入つて居るのか、少しも判らぬ。筋肉の柔軟なことは、何時もながら、驚くの外なし。非凡の人には、何でも無い事でも、凡人には一生涯の仕事になる。

中心力拔刀術では、刀を抜く時、鞘が割れる程、力が這入るが、アノ時の御體の具合も、力の入れ方も、少しも判らぬ。只無形の中に、中心力が發動するのたさは、感ずるけれども、要するに放れ技であつて、眞似も出来ない。

先生が進め進む程、凡人との隔たりは、益々大きくなるから、其の言動や氣持は、益々解らなくなる。つくづく凡人と、凡人との隔たりを、痛感した。

あんな體格になり、あんな放れ技が出来るやうになるのには、人を人とも思はぬ大氣魄と、身分のこまごま考へない大膽と、熱誠とが必要だと思つた。

池田氏令息の、其の夜も越せまいと、危まれた瀕死の重態が、翌日から忽然、快方に向はれたのは全く先生の御力である。此の放れ技は、先生にして出来ることであつて、若し先生を得なければ、矢張り醫者に委せねばならぬのである。先生の中には、醫術も哲學も、科學も宗教も、政治も、文學も、藝術も、渾然として、包容されて居り、眞理を傳へるのに十分な、忠誠と勇智と修養とを、兼備されて居る。

先生には長い間、格別の御教へを受けて居るが、今回ほど、其の偉大さを、痛感したことはない。而して川合先生はまた其の上に在らせられるのだ。天才に磨きをかけること、益々大光さを發揮する。

偉大なる天才に就いては、時々書物で讀んだことがあるが、如實に其の人に、接することが出来ることは、何と云ふ幸福なことであらう。川合先生も肥田先生も、古今東西に絶した偉人である。其の人に接し、其の人に學ぶことが出来るのは、神の恵み、汝に足れりと、感謝せざるを得ない。

先生の健康は、想像も及ばぬことである。連日連夜の活動、而も其の間に猶ほ一層の研究をなされて、少しの疲労も見られない。川合先生にアノ健康が、幾分でも御ありになれはと、何時もながら神の配劑が、物足らなく思はれる。先生の著述を、古いものから、順々に觀て來ると、其の變化の過程が、判然として居る。其の進歩が、餘りに早いので、後進の者はとても、隨いて行けない。其の型式の變化を直視すると、本質は少しも進まずに、外形の死物のみを、眞似るので、誠に頼りない。

九月上旬より、十月下旬に至るまで、約五十日間、親しく先生の教へを受くる機会を與へられたことは、深き感謝を、捧げずには居られない。其の間座談に、講演に、言々句々、凡て體驗より出た、尊き教訓であるが、事非常に高遠なる世界に屬し、私自身、咀嚼の出来なかつた事が多かつた。

神は人を見て、使命を下すに聞く。先生の如き人物には、單に強健術と云ふが如き、局部的のものでなく、天下を負ふ、大使命があるのではあるまいか。今や、國家多事多難の時に、アノ修養と、アノ智略と、アノ力と、アノ健康と、而してアノ集成の才とを有せらるゝ人が、草深き田舎に、孤獨的隱遁生活をされて居ることは、果して神意であらうか。川合式強健術なる、名稱に就いて、一言したい。川合と云ふのは、肥田先生の舊姓、川合式強健術とは、第三者がつけたので、不適當な感じがする。内容から見れば、術にあらずして、道であるが、創始者は改めようともされぬ。天地の大道なる強健術に就いて、區々たる身體上の効果などを、論ずることは、好ましくない。練修十年、未だ其の妙處に至り得ざるも、事に當る毎に、其の効果の大なるに感謝して居る。そして練修して居る間に、内容の偉大なるを知り、こんな方法が、人間技では到底、考案することは出来ないこと、讃嘆したことも、度々である。

▽安藤大尉より贈られた聴衆の感想文

◇過般の御講話に對する、感想を集めやうとしたが、餘りの偉大さに、驚嘆するのみで、書きやうがないと、云はれた。事實現し方がないと思はれる。日に留まつたものを抜萃して見る。

◇先生の火の如き大熱辯、體悉が聲をなす。講話を聞いた時、心の奥まで響き渡るかき、思はれる不可思議な力のある言葉、唯感嘆の外はない。

◇泰山崩れ来ることも、微塵も動かさず、云ふやうな態度と、凛として輝く兩眼と、颯爽たる英姿とを、仰ぎ見た時、何とも言はれぬ、壯麗な感に打たれた。そして何年経つても、少しも變らないのみか、益々若く旺んじられるのに驚いた。あらゆる名文名詩を、講演の各所に、自由自在に使用されるのを聞いて、記憶力の強大なるに、度膽を抜かれた。

◇先生が壇上に、立たれると、體全體から、何物か放射されて、會場に漲り、我々の身體に、浴け込み、我々は此の目に見えぬ、靈的勢力の中に、包容されて、居るが如くに感じた。

◇先生の體全體が、力の泉の如くに、見えた。四隣に響き渡る、氣合の發聲は、我々の心肝を突き、驚へず茫然自失、只偉大なる魅力に、壓倒されて居った。

◇先生は講演しながらも、夢の中を追ふやうに、而も涼しい、ハッキリした眼をして、暫し空間を、見詰められることがある。其の眼を見て居ると、何か知ら、神秘的偉大なるもの、引き入れられさうな感じがした。講演の内容は、餘りに深遠高大で、聽いて居る時は、大天才の言葉を、耳にして居るやうに、壯快な氣持であるが、後になつて見れば

何も解らぬ。我々の想像することも、出来ない様な、境地に居つて、下のものを見るに、アンナにも、見すばらしく見えるのか知ら。アノ可哀想な、儼みの表情を、顔に存べて、話されるのを、仰ぎ見た時、上の世界から見たら、我々感つて居る者が、いかにジレッタク、映ることであらうと思つた。

◇アレ程の境地と、アレ程絶妙の技能を得られるのに、特別の師はなくして、全く獨習獨創であるとは、驚愕せざるを得ない。雷霆を叱咤する大雄辯を、聽いた時には、陣頭に立つたナポレオンを、想像した。演壇の周囲の空氣は、電氣でも充ちて、居るやうに感じた。

◇大正十三年に、御目にかつてから、足掛八年目になるので、如何に先生でも、必ず御變りになつたであらう。いくら年老られ、或は少しは、衰へられたかも知れないと、思つて居つた處が、演壇に立たれた先生を見るに、年老る處か、却つて若々しく、却つて益々豪い元氣たつたので、全く吃驚して仕舞つた。實演の時の先生は、普通の時とは、スツカリ變つて、無邪氣な、清純な童顏は、海棠の如く、兩眼は異様の輝きを放つて、神々しく、俗に云ふ神が乗りうつつたさは、かう云ふのかと思はれた。

◇嗚呼今も尚ほ、眼前に髣髴する、堂々たる先生の英姿、我等は恍惚として眼を見張り、耳を聳てた。稀世の大雄辯熱し來ると、兩腕は自由に、振り廻され、兩脚は強く、演壇を踏み附けられる。ドカツく、叩き鳴らされる毎に、

心臓はピリツ／＼と、双を以て、剣られるやうであつた。生命力は電光の如く、巨岩の如く、吾等の頭上に、浴びせかけられて、吾等の魂は、万仞の險崖上に、或は怒濤逆巻く大海原に、或は花咲き、鳥歌ふ春の野邊に、或は若草萌ゆる小川のほざりにさ、千變万化、自由自在に、翻弄し去られた。

裸體となつて、實演される先生の體格の、立派さ、美しさ、艶やかさ、神々しさ、ギリシヤ、ローマの神像を見る心地がした。一度中心力の進る所、雲を起し、風を捲き、怒濤に激するの大活動となり、然も其の中に、言ひ難き静かさ、穩かさ、優しさ、軟かさを湛へられた、精妙の神技を見せ附けられて、只驚嘆と、恍惚と、陶醉さに、魅了されて仕舞つた。

かくも極意を悟得し終つた先生も、其の昔、少年時代青年時代には、人並以下に病弱であつて、「茅棒」を侮辱されたことがあるさは、さうしたつて、嘘のやうにしか、思はれなかつた。まさか、こんなに迄、變り得るものであらうかと、疑ひの念さへ、起らずには居られなかつた。其れ程、吾々は只、驚かされたのである。畢竟これ、隠された天品を、熱誠眞劍の努力を以て、磨き上げたものに、外ならぬのである。

◇肥田先生のごときは、社内の人々から、度々聞かされて居つたが、私は實際は、何に大した事があるものかと、高を括つて、別に期待もして居なかつた。處が會場に現れた先生は、全く私の想像を、裏切つて仕舞つて、堂々たる體格、沈着な態度、一歩／＼ユツタリと、確り運ぶ足取り、満場は忽ちサツと一變した。清新の氣は剛々まで漲つた。何と云ふ不思議な現象だ。最初多少の反感をさへ持つた私すらも、人格の偉大な方に、苦もなく、打ち倒めされて仕舞つた。

講演はまるで、立板に水の如く、止まる處を知らず。穩かな時は、春の海の如く、興至り情激するさ、昂然として、大喝叱し、一天俄に掻き曇つて、狂風地を捲き、電光閃くの快氣、満場を壓倒する。

◇先生の實演は、一度中心力が進り出ると、閃然として、電光の如く、鐵壁と雖も、ぶち抜くの勢ひであるが、終ると忽ち、電子も動かぬやうな、静けさとなる。目にも止まらぬ速技の中で、動靜交々至るの妙は、筆舌を以て現はしやうがあるまい。私は感動の極、とても駄目だ。及びもつかぬことだと、自分の見すばらしさを、悲觀して仕舞つた外に、得る所は無かつた。

◇やがて先生は、左手に長劍を持つて、壇上に立たれ、姿勢を決めて、キツト前方の空間を、見詰められた。其の眼差の神々しさ、清らかさ、物懐いやうな靜肅が、満堂を握えつける。會衆一同は、覺えず片唾を呑む。疾風迅雷、忽ち猛烈な勢ひで、長刀が引き抜かれる。ピカツ、／＼、人々は魂を除き去られたやうに、只恍惚として、陶酔の境にある。——動——靜——剛……柔……變化自在の藝術的姿態の素晴らしさ、全く地上の人とは思はれない。終つたけれども、拍手する餘裕なんかはない。一同の四肢五體は、まるで電氣に撲たれたかのやうだ。

◇肥田先生が、演壇に立たれると、其の莊重な姿勢態度に、聴衆は忽ち、電力に撲たれたやうな衝動を感じて、會場には急に、清新の氣が流れた。其の奔放自在な大雄辯に魅せられ、會衆は只恍然として、酔へるが如く、初めから終り

まで、寂然として、身動きする者もない。真に息詰ましい計りの、緊張であつた。演になること、洋服を脱いで、裸體になられた。「オ、マア」、一同感嘆の眼を睜つた。会場は、押えつけられたやうに、一層緊張する。若々しい、弾力に満ちた筋肉が、フツクラミ、而も滑かに、張り詰めて居る。芳醇な果實のやうな、魅力ある肉體美、これが果して其の昔は、「茅棒」さまで、蔑まれた體であらうか、疑惑の念すら、起らざるを得なかつた。中心に方を籠められた時の、崇高い、氣品のある、さうして神秘的な眼差と、時々チラツクと見へる、美しく揃つた純白の齒は、到底此の世のものとは、思はれなかつた。

學生修道院に於ける御講演を拜聴致し、靈化せる御人格の崇高さ、神人合一の境地より發する絶大無限の妙力、胸中一塵も止めざる其の精神の清純さ、人間界を超越して、かくも聖明なる世界に達し得らるゝものか、一言一句、純化せる魂の雄叫びなるに、痛く／＼胸を打たれました。而して其の得て居らるゝ處の、高く清く廣く妙なる活智を、深く裏に藏して現さず、其の圓熟せられたる御徳の奥深しき、御講演後に於けるアノ御やさしき御眞情、何と云ふ勿體なきことかと、仰慕の念を、禁めることが出来ませんでした。(陸軍歩兵少尉 増田智万雄君)

▽昭和九年九月東部に於ける講演

昭和九年九月十八日、私は、甲州小沼に於ける兩親の忌慰除幕式に臨んで、歸途見と共に、東京學生修道院に、立

ち寄つた。郡是製絲會社の社會奉仕的事業として、昭和七年西に富嶽の秀姿を望む、小石川丸山町の高臺に、堂々の偉容を誇る新寮舎が建築され、講堂も、強健術の道場も、立派に出来たことを報せられて、屢々來院を懇望されたけれども、其の機會を得ず、昭和六年以後、始めての上京であるから、顔を知つた院生は、幹事一名だけであつた。

明治三十四年、十八歳にして、體育に志してより三十五年、全く心身を改造し得て、明治四十四年、二十九歳にして、其の成果と方法とを、發表してより二十四年、大正六年伊豆の僻村に入りてより十八年、昭和九年九月、五十二歳の著者の體格と、元氣とは如何。請ふ。これを昭和九年九月廿五日、東京銀座大日本麥酒會社本館講堂に於ける著者の講演、同廿六日、東京學生修道院に於ける著者の強健術練習法講演を、聞見したる、學生修道院々生の感想文に、徴せられむことを――。

私が發願に於て、郷里でやつた講演の状況を述べたのも、私の幼少時が、極めて虚弱であつたのに、今はかゝる強大な體格を造り得たことに對して、郷黨の先輩同僚が、如何に感激したかを物語つて、改造の事實を明かにし、以て世の虚弱なる同胞諸君に、希望と、慰藉と、發憤の動機とを、與えんとしたのに外ならぬ。殊に現在の私の體格體力を見て其の昔、そんなに弱かつた者とは信ぜられないと、思ふ者すら少くないと云ふではないか。

今又、學生諸君の感想を掲げたからして、其れ等青年諸君の感動感激に對して、快なりとするが如き、つまらん稚氣を、私は毫末も、持つて居る譯ではない。只私は、アチコチを、講演で飛び廻るやうなことを、しないのであるから、私の實際を見ない、多數の讀者諸君は、實際に基いた私の著述を見ても、されただけに想像し、されただけに信憑してよいやら、分らぬであらう。故に、學生諸君の赤裸々の筆によつて、私の現在の状態を、記述されたものを、諸君の御清覽

に供することは、自らが、自らを語るのに優るご同時に、一面又、私の説く所が、空理空論にあらずして、悉く私自身の上に實現體得せる、嚴然たる事實であることを、立證し、諸君が心身改造の意氣を、鼓舞するに於て、希くは、一種の力ならむことを、望んで止まざるが故である。終りに掲げてある、吉田、岡井、兩君は、私の講演を聴かしむるが爲めに、電報を以て、丹波國綾部町郡是製絲會社より招致したのである。

▽あの意氣、あの漲る力

◇自分は肥田先生の御講話を、拜聴するの幸に浴し、偉大なる感銘を與へられ、非常なる觀喜を、感じたのである。中心力を知り、これを正確に練り行く時は、我々は實に無敵だ。心氣を籠めて、腹中丹田に置き、其れより發する力の偉大さ、實に驚嘆せざるを得ない。中心力なるかな。天地宇宙の大に通じ、絶妙、神に入る。(早稻田大學高等學院、川合道雄君)

◇我々は先づ、先生の偉大なる體感と、髓を超越した、強大なる體力と、圓滿に發達した肉體美とに、一驚を喫した。我々が得んとして居る所のものは、單なる物理的生理的の力ではなくして、この精神的人格的の力である。(日本大學醫學部、矢野尾一郎君)

◇精神と肉體との一致點に造られる中心生命が、如何に大なる力となつて、現はれるものであるかと言ふことが、よく分りました。(東京高等蠶絲學校、長谷部佐一君)

◇熱血溢る、講演、其れによつて、内部に眠つて居つた、自己の心を覺醒させられた。あの熱、あの意氣、あの漲る

力、少くとも自分の一生は、あの意氣と力と健康への要求に、向つたものでなくてはならない。(横濱商業專門學校、鈴木五郎君)

◇先生は、伊豆山中に行かれて、眞の心を體得せられました。大東京の眞中に於て、暮す人々の爲めに、大自然の心を、眞に自己の腹中に、作り出す方法は、如何なるものでせうか。(東京帝國大學醫學部、鈴木大四郎君)

◇先生の御聲は、思つたよりも柔かい、温かみのある聲で、其れでよく透つたので、一寸意外でした。然しお話がクライマックスに達すると、獨特のジェスチュアが加はつて、すつと變つて來ます。ビール會社職上でお聴きした時には仲々六づかしいわいと思ひました。(専門學校受験準備中、高力清美君)

▽態度、眼付、氣合で充分

◇我々が毎日行つて、心身の修養に努めて居る強健術を、肥田先生が實演されるのを拜見して、私には、一生を捧げても、到底其の根本精神に、觸れることは、困難ではあるまいかと思はれた。併しながら、今眼前に、私等がなり度い且つならねばならぬ所を、現實の事實として、拜見し得た事は、非常に、有益なことであるに違ひはない。そして見て居た人々は、先生の肉體以上の或る尊貴なものを、發見したのであらう。私は敢て、先生の御講話を拜聴しなくとも、實演の機会に於ける、先生の態度、眼付、氣合、中心力に依つて、十分でありました。何事でも、精神を打ち込んで永年努力するならば、あんな境地にまで、這入られるものかなあ、今更ながら驚いた次第であります。(明治大學法學部高木幸太郎君)

◇先生の御話の、少しも理解出来なかつた事を、喜んで居ります。(東京帝國大學東洋歴史科、鬼塚正二君)

◇御講演を拜聴して、第一に深い感銘を受けたのは「完全に正中心が、鍛えらるゝ、天地宇宙の眞理が、渾然として中心に溶け込んで来て、偉大なる力が、中心より發し、心は自ら、明朗透徹、活氣全身に張り溢れる。現に自分は、さうた」云はれたことである。(東京高等蠶絲學校、片山静治君)

◇天地宇宙の大生命大眞理に、透徹されて居る先生の御講演は、餘りに深遠、餘りに宏大にして、到底窺知し得ざる所なり。柔にして剛、剛にして柔、或る時は、三才の幼兒も戯れ、或る時は、魔神も慄然として懼伏す。偉大なるかな絶大なるかな。中心天來の力。(東京齒科醫學專門學校、水間忠司君)

◇先生の御講話の一切は、大生命に連らなり、生命のよつて現はれる、種々の様相に過ぎない。瞬間に現れ、瞬間に消え去る、一切の形式を超越して、直に大宇宙の大生命に通じ、一體となつて、躍動してゐる。其の波動の起點は、完全なる形の中心である。先生の温顔に接して、耶穌基督論中の一句、「緩なる者は、皎月の天を行くが如く、急なる者は、閃電の空を、奔るに似たり」に、想到した。先生の生命の進り出づる所、一切の時間空間の理念を超越して、大生命の動きと一つになり、其の間一つの人爲なく、而も天地の理法に適へるが故に、自由にして、且つ合理的なる所以を知り得た。(東京帝國大學經濟學部、室清君)

▽言行一致の極

◇生來の鈍感にして、感受性頗る鈍く、且つ又元來、疑ひを持つこと頗る多く、無條件で信ぜし言、無條件にて贊成

せしこと、未だ曾てこれあらず。此の生意氣な自分の心をして、耳より入るや直に、心の奥底まで強く衝つて、熱血を湧かしめ、無條件、何等考ふる餘地なくして、其の説に服さしめられたる、天來の言あり、これ先日、道場にて承はりし、肥田先生の御講演なり。其の腹の底、精神の中心より、進り出づる熱辯を聞く時、懦夫をして、立たしむるの氣概に打たれたり。更に強健術の實演を見るに及んで、言行一致の極、これに優るものなしと思へり。(東京高等蠶絲學校、眞下謙次郎君)

◇肥田先生の御來院によつて、我々一同が、精神的に又肉體的に、活氣附いて來たことは、恰も早天續きの後に、大雨が來た様なものでありました。そして私は、先生の御話を、始めて聞かされました時、何ぞ云ふ先覺者ならう。國民に今、此の先生の御話、及び人格の一端を見せてやつたら、迷へる國民は、至誠一貫、神人合一の境に至れる先生を、天來の尊師と、仰ぐでありませう。私は先生が、自分の腕に、宇宙の神の力が、觸れるのが分かるさ、腕を御示しになつた時には、覺えず、慄然として、靈感に打たれざるを得なかつたのであります。(東京帝國大學支那哲學科内田銀郎君)

◇何事を爲すにも、腹の据はつた人は、大きな事をするさ、云はれてゐるが、それは即ち中心力であることが、御講話を聴くに及んで、一層はつきり分りました。(東京高等蠶絲學校、小松正君)

▽鬼神も避け幼童も親しまむ

◇昭和九年九月廿五日午後七時、東京銀座尾張町の大通りに、宏壯なる新建築を誇る、大日本ビール會社本社樓上に

て、肥田先生の御講演を聴く。當年五十二歳云へは、所謂老人の部類に入れても、差支ないであらう。然るに今、眼前に立つて居られる先生は、三十代の若さにしか見えない。首から膝、腕を走る線の柔かき、磐石の如き體容、自ら心身一致の妙諦を示し、自な柔剛兼備の極を示す。此の抽象的言句は、直に生々として、躍動して止まざる活文字となつて、吾人の心境に迫つて來るのである。一度壇上に立たれるや、其の音聲は活殺自在——。

中心さ、のへは、音聲自ら活き、ジエスチユア自ら躍動す。大宇宙を貫く大生命力を、さかつご自己の丹田に收められて、滔々颯河の雄辯を振はれるのであつた。時には、舌端火を吐き、時には、春風駘蕩の感あり。誰か容易に、この驚くべき言を、發し得べきぞ。誠に先生は、當代無比の大雄辯家であると同時に、又稀世の大愛國者である。

次に翌廿六日、東京學生修道院、強健術道場に於ける肥田先生の實演を叙することにしよう。川合信水先生を始め、外來の聽衆、學生一同、道場に參集し、固唾を飲んで、先生の御來場を待つ。時に午後九時半、四邊全く静まりて聲なし。高橋ビル會社事務、二木醫學博士令夫人、加治平民病院長末亡人などの御顔も見える。やがて先生には、やおらの巨軀を、壇上に運んで來られた。磐石の如き大丈夫の偉容、首から肩腕に至る線の美しさ。微動たにせざる腰腹。實演は、其れから其れに進む。垂直に、瞬間的に、加速度的に、纏まつて行く中心力の活動は、見るものをして、恍惚たらしむるものがあつた。此の間に於ける先生には、禮應の隙もなく、容姿雄爽、勇氣凛々、自ら馬を陣頭に進めて、三軍を叱咤する猛將の如き概があるかと思へは、怒として、純真無雜、天真の精、無心の妙を示す幼兒の如き、溫容に歸る。其の變化たるや、自由自在、無爲自然、これ其の底に横たはる千古不動の、中心生命力顯現の一現象に過ぎず。これを思へば、其の偉大さ、其の深奥さに、自ら驚歎の情を禁ずることが出来ない。この中心生命たるや、三十

有餘年間、血と汗と、涙とに依つて、彩られた、深刻無比なる修練の結果、宇宙を貫く一大生命力と合致し、遂にこの超人的強力が生れ來つたのである。(東洋大學倫理科、吉田信恭君)

◇御講演を拜聴しても、其の餘りに高遠なるが爲めに、解することが出来なかつた。恐らくこれは、理屈では解らないものであらうと思ふ。先生の御體から、或る大きな力が迸り出て、浪の如くに押し寄せ來り、自分の體が動けなくなつた。直接に、強健術の實體たる先生の大人格に觸れ、體育上の疑義は、凡て解消したやうな、氣分になつた。或時は鬼神も避けんと思はれる御聖姿、或時は、童子も親しむの溫容は、實に例へる言葉もない。私達先生に、親しく接するに、始めてあつても、十年の御親しみを感じ、先生さ云ふ感じさへ、忘れさうな氣がした。先生に御會ひすると、無條件に、命も何も要らなくなる。戰場に於ける軍人が、死を鴻毛の輕きに比する心境も、かくあらむと、思はれた。(那是製絲會社強健術指導者、岡井太郎君)

▽修業一貫の實を示さる

今回、兄に隨行して、一城の世話をして呉れた、室貢君は、中學の教頭たる榮職を擲つて、眞の道を求むべく、私の兄の下に、馳せ参じた篤信の士である。昭和九年九月私は約二十日間、居を共にし、寢食を共にし、種々の御世話になつた。

私は宿屋に居つても、朝は大抵三時には起床した。早い時は二時に起きる。さうして、氷のやうな水を被り、室に歸つてから、獨り必す、練修を行つた。飯は、朝一杯、晝三杯、晚二杯、間食は、果物の外、更にやらない。酒、煙草な

さほもごよりのこと、茶もやらない。只清水だけである。朝は、主に茶葉の鹽漬だけで済まし、味噌汁も、顧らないことが多い。無論、動物性のものは、朝は断然、一切やらない。

演説する前だけは、飯を五六杯、香の物を副て喰べる。うさぐのかけたさ、四ツ位、平けて、腹を捲える。二三時間熱湯を振つて、二十分間も、猛烈な練習をするのには、其の位喰べた方が、良いやうだ。だが、卵たの、牛乳たの、肉たの、魚たの動物性は、全然攝らない。

其の方が暗々して、氣持が良く、力が湧き溢れて来る。種々、濃厚な所謂養物を攝らなくては、體が續かないなど、考へるのは、飛んだ間違ひである。私は明かに體驗して居る。左は、室君からの書面である。風恬に浪靜かなる中、人生の眞境を見る。味はひ淡く、聲希なる處、心體の本然を識る。

「先般は、何の幸福か、計らずも先生と、長き御同伴を許され、親しく御座談に接し、且つ先生日常の御起居の様を實地に拜見致す得難き機会を興えられ、先生多年御修業の一貫之道を示され、不斷の御實行を、目の當りに伺ひ、殊に兩先生御兄弟のお問柄の美しさに、云ひ知れぬ御教訓を受け、今回の隨行に、殊に收穫の多かりし幸福を、感謝致し居り候。從來教へられしことを、今更の如く、深く胸に刻み込まれしは、私我の根本的絶滅さ、不退轉の努力、練修の繼續を以て、一路向上精進せざるべからざるの一點に御座候。尙ほ氣附かざりし、最も大切なることは、兩先生も、表面平凡の御生活の裡、實に細心の注意が、万事に行き届き、其の結果より、共に大悟徹底せられ、一は純眞なる精神より、一は高尚なる肉體より何れも進んで、見神の境地に、到達せられしことにて御座候。先生の御講演は、小生に於りては、餘りに高遠なるがために、先生の御眞意を、看ることも、悟ることも出来ず。只表面の事しか伺はれず。御體

笑下され度候。又新しく自覺せしめられたることは、各自天賦の治癒能力があつて、簡易極まる養生法によつて、諸病を癒し得る道あることにて候。但しそれには、非常の決心を持つにあらざれば、繼續實行の困難なること、而して茲に、明師を得て、絶對信頼服従の要あることを、悟らしめられ候。昭和九年十月十二日」。

▽體格體力の客觀的狀勢を示すが爲め

私の兄が、郡是製練會社の教育總理たり、又東京學生修道院々長たる關係上、私は五六年振りに一回位、郡是修道院を訪ねることがある。其の折ついで、依頼されて講演することがある。兩者とも立派な道場があつて、毎朝規則正しく、私の強健術運動法を遺つて居る。そんな關係で、この二ヶ所ではたまに、講演することがあるが、他では殆んど、やつて居らない。私の講演實演に對する感想として、郡是の人々や、修道院學生のものを掲げたのは、さう云ふ關係に基くのである。

さう云ふものを、何ぞ掲げたか。其れは一言したやうに、少くとも、私の體格、動作、健康狀態の客觀的狀勢を、讀者諸君に見て戴く、一助にするが爲めに過ぎない。でないさ、山の中に埋もれて居つて、都會の眞ん中で、公開道場を持たない私が、いくら獨りで、私はかう云ふやうな體格だ。私はこんなに丈夫だと、云つた處が、單なる自畫自説では標準が立たないではないか。

若し夫れ、主觀的感想に至つては、私の關知せざる處であつて、諸君はたゞ、練り鍛へた體格と、其れから進り出た力とが、觀者をして、そんな風に感ぜしめた位に、御取りになれは宜しい。

私は一個の平凡人であり、平凡な自然の友であり、平凡な天の子に過ぎない。諸君も然り。たゞ私は、正中心鍛錬によつて、易々として斯の如き體格と、體力と、眞健康とを得た。故に諸君も、諸君自身の中心の寶庫を開けよ、力説する所以である。

其れが爲めに私は、私の研究を語り、實驗を述べ、又私自身が、得た處の効果を告げ、其の誤りなきことを、立證せんが爲めに、活ける私の體格を、示さんとしたのである。

下らん體格や、體力なさを、誇らむとする様なケチな考へは、毛頭も持つて居らない。持つて居るやうならば、都會を跳廻つて、田舎になさ燻ぶつては居らぬ。

否、苟くも誇り、高ぶるが如き、卑しい心があつたのでは、向上の道を、進むことは出来ない。正中心の鐵扉は、開かれないのだ。

私の經驗に對して、推稱の書面を寄せられた、多くの方々があるけれども、此處にはたゞ私の體格動作を、彷彿せしむるに足るものゝ、一部を掲ぐることにしたのである。請ふ。了せられむことを——。

▽太古の世界——閑靜な八幡野

待望十有六年、多數の人命を犠牲とし、巨額の工費を投じた丹那トンネルが通じて、伊豆半島の夜の帷は、開かれた。

熱海下田間の自動車が、伊東を發し、崎原の原野を馳て、八幡野に入り、對島村役場の側の停留所を過ぎて、稻取の



山小るあが家の著 著

方に向ひ、谷間に沿ふて、二三町も上つて行くと、北方の空を塞ぐやうにして、聳え立つて居る、一つの小山を見出すであらう。

南に面して、眞面に日を受け、急勾配の周囲は、杉林で包まれ、頂には樺、玉楠、樅、椎、水草、青木、櫻、楓、猿、迂り、楊梅、松、田保、小黃楨其の他の老木が、交錯參差、コンモリと美しく茂つて居る。其の幹の間から、瓦葺根が見える。其の後は、澄み切つた青空であつても、或は白雲が、捲舒して居つても、何れにしても、崇高な小山の姿だ。神社にしては餘りに山の頂邊過ぎるな。お寺にしては、チト明る過ぎる。さ云つて普通の家としては、アンナ山の上では、無不便であらうと、さう云ふ感じが、見る人の頭の中に、浮ぶであらう。其れが私の家なんだ。

若し夫れ、日麗かに風暖かな、陽春四月の頃である、私の山の麓には、青い麥畑が、毛氈を敷いたかのやう、其の間を黄白の菜の花が點綴し、處々に温州蜜柑が、緑の枝を延ばして居る。

縣道のため切り崩された崖、其の縁を彩る青草、みんな太古の静けさだ。其處の小徑を通る農夫、彼處の山で、木を切る炭焼男、皆これ太平の民、野良で働く年老達が、鋏を杖ついて、語り交す聲さへも、丁々谷間に木葉する鋸の音さへも、まるで夢見るやうな閑かさだ。

其の生活は、よし豊かならずとも、其の心は皆、純朴にして平和である。千九百三十五六年の國際危機を叫ぶ、非常時日本の一隅に、かくも穏かな、太古の世界があるのかと、怪しまるゝばかり——。思ふに是れは、伊豆半島の到る處に、展開されて居る、特殊の風物が、興へる氣分であらう。

茲に述べたやうに、私の家は、村を離れて只一軒、古木大樹の森々たる、小山の上にある。斷崖數百尺、一條の道が

僅に、背後に通じて、居るばかりである。昔ならば、天晴難攻不落の、天然の城塞になる。

家のまわりの藪には、雉や山鳥が居つて、玄關や椽前までやつて来る。山鳩や、懸巢や、啄木鳥や、其の他名も知らぬ大小の鳥は、始終木の枝で遊んで居る。鶯の鳴く音を聴かないのは、一年中、僅の間に過ぎない。

庭へは私が一杯、梅の木を植へたから、二月三月は雪の粉を、バラ撒いてあるかのやうで、暗香は絶へず浮動して居る。

裏庭の北側の方から、南を見ると、大木の幹を通じて、眞珠な海が、一杯に見えるので、私の家敷全體は、まるで海上に、浮んで居るかのやうな、又巨きな輕氣球で、海上へ降りて来たかのやうな、感じもされる。崖の縁からは、直ぐに海中へ、飛び込めるやうな、心持さへもされるのだ。

▽伊豆七島も指呼の間

それを段々に、南側の崖へ、近寄るに従つて、眼下に低く、八幡野の村が現れて来る。険しい路が、岡から濱へ通じて居る。朝朝が其處から、八幡神社を拜んだと云ふ、傳説が残つて居る拜松、學校、役場、駐在所、其れから一般人家、杉林等が、一面に野を蔽ふて居る雜木林の間に、點在して居る。耕された畑の黒土に、野菜が作られて居るが、其れはホンの僅なものだ。若し春ならば、處々に桃や櫻の花が點綴して、一段の風致を添へる。

富戸、八幡野、赤澤までの海岸は、紺碧の巖が、或は絶壁、或は洞門を形造つて、造化の妙を盡し、捻くれた松、柏杉などが、其の間を綴つて居る。けにや、海國日本の海岸美代表として、國立公園第一候補の選に入つた程の絶勝で

はあるが、陸上は今まで、交通が開けなかつたし、海上は潮流が荒く、激浪が絶えず逆捲いて居るので、全く世に知られて居らなかつたのを、二荒伯の麗筆に依つて、始めて天下に紹介された。

其の長城のやうな絶壁が、八幡野の港口だけ、僅の間裂けて居つて、小さな入江になつて居る。左方は橋立の奇蹟、右方は龍宮が鼻の崖、其の突端には、南詰にあるやうな松が、枝を長く差し延べて居る。匡救事業で數方圓投じた築港の堤が、白く横たはり、泉水のやうな港の中には、木の葉のやうに、小舟が浮ぶ。浪を蹴つて進む下田通ひの汽船も、丁度玩具のやうだ。モーターボートは心臓の鼓動を、トックトックと打ちながら、花を碎いて驅けて行く。

右方は浮山と云つて、磯へ行くにゴツ／＼の溶岩だが、上から見ると、まるで真平で、木を切つたら、數万のテニスコートも出来さうな、又十や二十の飛行場でも、出来さうに見える原が、雑木林に包まれて、姪々として杳冥奥深く伸びて居る。其の中に、アツチにもコツチにも深緑が盛り上つて居るのは、此の地の特産で、美味なここでは、果實の王たる梅である。灰色の幹や枝が、まるで鹿の角を立てたやうに見える。私の山の下から浮山の北側を、奇麗な縣道が走つて、是の大自然に、人間努力の細工跡を點じて居るのも、趣が深い。其處を、マツチ窺見たやうな自動車が、往つたり來たり、走せちがふ。

こなたにコンモリしたのは、基石が濱の絶壁の老松だ。道に巨牛の臥するに似たのは、北河の歐江、紫色の大島は、鯨の浮び上つたやうに、指呼の間に横たはり、日によつて、多少の違ひはあるけれども、頂からは絶えず、煙を噴いて居る。利島、新島、式根、神津、三宅の諸島も、飛石を落としたやうに、散らばつて居る。激の盛な頃の夜など、暗黒の海は、一杯の火で、まるで星を滾したかのやうである。

大島の東、薄紫に浮び出た、房相兩半島の迫る所、東京灣口は、寸尺の狭きを、憶ちて居るかのやう。して居ることは、帝都防衛の重責を擔つて居る、觀音崎や、富津洲は、アノ邊たらうか。あのギザ／＼の、形をして居るのは、鋸山ではないか。それから左へ、群雄の競ふが如くに、起伏して居るのは、相模の山々かな。

安元二年十月十日、大見小藤太、八幡行氏が、曾我兄弟の父河津三郎を、射殺したと云ふ椎の木三木は、浮山の西端縣道の上にあつて、血塚と稱する河津三郎の墓は、縣道の下にある。縣道は其れから、山又山の崖を縫ふて、遠く南へ消えて行く。暗い晩なき、庭に立つて居ると、遙向ふの山の中腹から、自動車のヘッドライトが、ボカツと現れ、魔の如くに動いて来る。こんな遅くに乗つて居る其の中の人達の、如何なる思ひと、如何なる用件を運んで居るのかと思ふ。

左方海岸に突き出した、岡の下が日蓮ヶ崎で、日蓮上人が捨て、置かれたと云ふ、粗岩のある所だ。此處からは、見へないけれども、側へ行つて見ると、物凄い激浪が、白い牙を剥いて跳り狂ひ、三疊敷ばかりの其の岩を、呑んだり吐いたりして居る。

更に眼を左方に轉ると、頼朝が敵に追はれて、此處まで來り、高見山を見出して、其處へ逃げ込んで、助かつたと云ふ、延命松がある。周圍丈餘の老木で、巨大な枝が垂れて地に附いて居る。

西北の方を振り仰ぐと、千年の風雪に抱いた巨木大樹で、山と山との間を埋め盡して、太古の面影を包んで居る、八幡來宮神社の森の、神々しきことよ。不思議なことには、熱帯地方の奇木珍草が澤山あるので、最近天然記念物として國家の保護を受けることになつた。

尙ほ一つ、特記して置きたいことは、私の山には地形上の關係で、冬でも夏のやうに、暑い所があり、夏でも冬のやうに、寒い所がある。

空は碧くく、澄んで、キネマカラーに見るやうだ。野も山も森も海も、皆悉く南國情調に充ちた、伊豆の世界だ。

▽正中心力體得の刹那

私の家の座敷から三、四間南の方へ庭を行くとき、屏風を立てた様な崖だ。崩れぬ様に杉が植え附けてある。崖の上の方は種々の大木で圍まれてある。其の中の、下から突き出た木の股に、丸太を渡して方六尺許りの頭丈の小屋が拵へてあつて、全く空に浮いてゐる。縣道から仰ぎ見ると、大鷲の巢でも木の枝に造つてあるかの様である。

大正十二年六月十八日夜、私は獨り此小屋の上つて、簡易練修法第四、斜腹筋運動をやつて見た。これは又、一面基本運動として、私が最も重要視してゐる所のものである。

兩脚を踏み開いて立ち、腰を反り胸を開き、兩腕を體側から、頭上に上げ乍ら、息を吸ひ込む。此の時兩膝はヒーンと伸びて、體の重さは爪先に落ちる。

頭上で組んだ兩手を、腕を伸ばして前方に下らし乍ら、息を吐き出す。同時に胸を縮め、鳩尾を凹くし、腰を屈めて腹の形を丸くする。兩膝は折つて、體重は踵に落ちる。

さう云ふ操練をやるのであるが、其の時私は、眼下の絶景も忘れてしまつて、無我無心にやつてゐるとき、——ドカツ——ノノノ。????ノノノ。



崖の上の望樓

突如!! 未だ曾て経験せざる處の、強大恐るべき力が、腰と腹との中心から迸り出た。

其れは床を突き通して、地中に入り、地球の中心を貫いて、ストーツ。無限の大宇宙を、無限に突き抜けて行つた。オ、無限の力だ。無限の力、無限の力、オ、無限の力だ。——身も心も震盪する絶大の力、光明の揺めきた。生命の躍動だ。これこそは真に、「活ける生命の泉」だ。無限の力と共に、無限の権喜は、私の中心から全身に漲つた。而も何んぞドツシリと落ち附いた喜びである事よ。泰山の重さである。大宇宙の静けさである。さうして身も心も、聖愛と生命との間に、包まれてゐるかの様。又丁度彼の燃え立つオリオンの大星雲中に、坐するかの様でもある。

而も、輕妙、超脱、虛無、私の體には何も残らない。只白い透明な輝きの外。……サラツ、く、く、體に於ける一切がサラツ、サラツと音を立て、振り落とされてしまつた。

何んぞ云ふ、身輕さ、何んぞ云ふ氣安さ、何んぞ云ふ樂しさ、何んぞ云ふ穩かさ、何んぞ云ふ温かさ。陶醉、恍惚、感謝、満足、充實、……もう澤山だ。受け切れぬ恩寵に、身も心も、張り裂けさうだ。オ、さうして、何んぞ云ふ輝かしさ。さうしてマア……何んぞ云ふ力強さだ。

何んぞ云ふ力だ。何んぞ云ふ豪い力だ。——無限の力……あるべからざる其の言葉以外には、表現の道がない。何處へも滞らない。何處へも觸らない。ドカツと、何物をもぶち抜いて行つてしまつた。酷い力だ。恐ろしい力だ。けれども何處へも當らない。腹にも、足にも、豪い力が走つたけれども、何物にも障らない。ツツウと、突き徹つて行つて仕舞つた。——無限の力……これは物理學的の言葉ではないが、此の力の實質を、形容するにふさはしい、他の言葉は私には知らないのだ。



太根と板たけ抜き踏に形の踵で力心中

私の力の性質は、全く一變した。全く違つた力となつた。私はこれを「圓滿無限の力」でも名附けたい。其れ迄の力は、強かつたけれども、ゴツ／＼して居つた。重い物を持ち上げたり、人を抛けたりする、單なる物理的の力であつた。動物的な只の力であつた。「圓滿無限の力」は眞人の力である。肉體の力と、魂の力が合一したものである。それまでの私の力は、強かつたけれども、堅かつた。即ち單なる體力に、過ぎなかつた。だが、眞の正中心力には靈がある。潤ひがある。生命がある。無礙の力である。力ならざる力である。柔剛混溶の力である。力の精華である。即ち聖なる力である。

私は狂喜した。更に斜腹筋運動の氣合應用練習法を試みて右足を力強く、踏み附けた瞬間……ボクツ——オヤツ／＼杉の八分板は、奇麗に足の形に踏抜けて居るではないか。二回、三回、ボクツ、ボクツ、何の手筈へもなく、踏み抜けて仕舞つた。第四回、ボキーツ、終に太い根太迄も、踵の形を立派に残して、ヘシ折れて仕舞つた。此の時の板も根太も、今記念として私の道場に飾られてある。

はて？ はて？ はて、はてな？——？／＼。私は冷静に顧みた。さうして其の際に於ける、自分の姿勢動作に就いて、嚴密なる審査を施し、細かにその時の力の作用を検討した。

其の結果、見よ、熟練の如き中心の赤誠進出する處、私は全く無意識の中に、從來、簡易練習法で、遣り來つた型を踏破し、打破し、ぶち破つて、——腰腹同量の力を造り、腰を反り、臀を突き出し、腹を下方に張り、鳩尾を凹くせず重心は兩足中央に落ちる形であつたのだ。(圖解参照)

解つた。解つた。突き抜けた。終に最後の勝利は與へられたのだ。心身修養の妙諦は、斷じて此の外にはない。此の

無上の聖快と、嘗て嘗えざる絶妙の力が、證明して餘りある。オ、此の體験、——オ、此の體得、——。

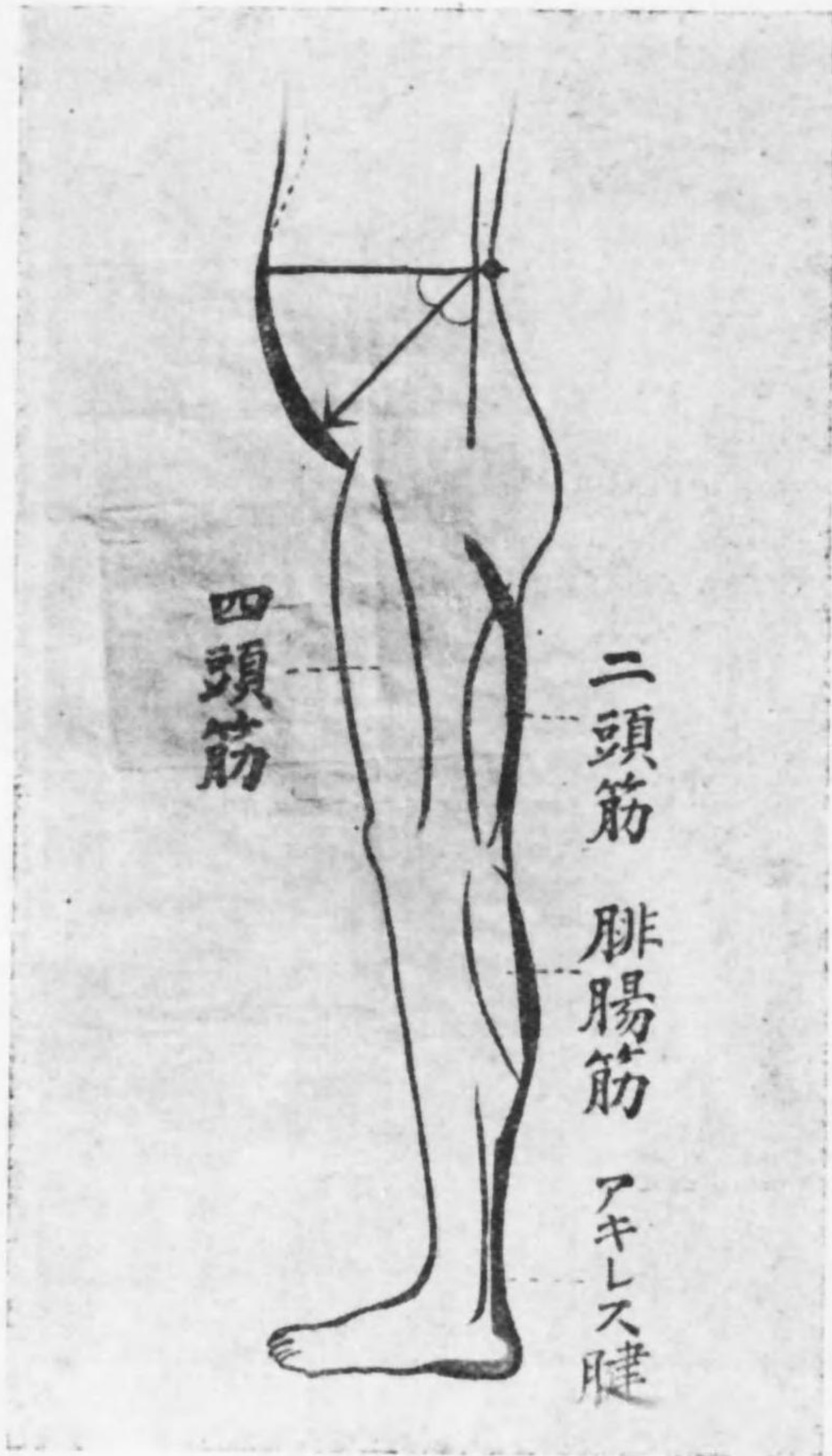
私の眼は涙を渡つた。敢らかに輝いた。公明と眞勇と、正義と強大と、さうして清純と溫愛と、寛洪と慈徳と、混合し溶和した眼眸だ。私は、私自身の眼に宿つた、美しい色彩を、直覺した。心身共に清淨透明にして、而もそれが完全に、正中心で統一冥合した時、私は此の聖き喜びと、美しさを直覺したのだ。

舊曆五日の月は優しく金色の光を凝らして、山の端近く落ちかかり、をちこちに散らばつた星は宇宙神祕の謎を永劫に守つて、まさに話しかけさうに瞬く。新緑滴る木々の枝、眼に響く浪の音、風は敢らかに頬を撫でる。空には一片二片綿の様な雲が動く。眼に映る万象の麗しさ。神々しさ。宇宙藝術の芳香は、胸までも浸み込んで來た。

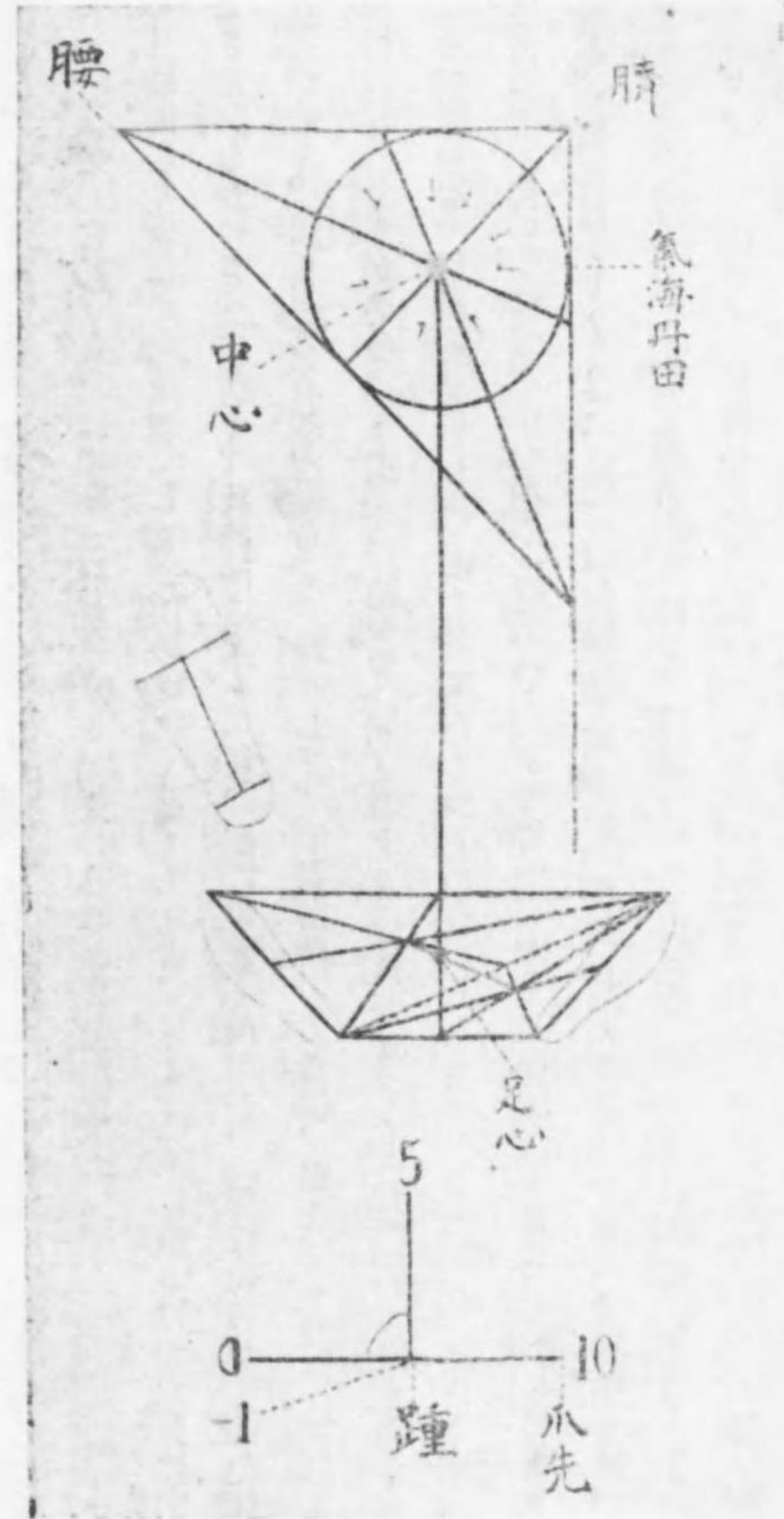
小屋の手前に、松の老木がある。その下に稍平ではあるが小さな角がゴツ／＼した六十貫もある大石が据えてある。地中に埋れてあつたのを、私が掘り出して、搬んで來たものである。

私は今の姿勢と、坐禪の姿勢と、中心の形は同一であるを考へたから、小屋を下りて、素足のまゝ、其の岩の上に結伽趺坐して見た。岩角はジリ／＼と、脚に喰ひ込んで來るが、我が正中心は却つてキユツと引き緊つて、岩と一體となり、更に岩と共にドツカリと、大地に連るの眞境を、體驗する事が出來た。悟道の妙境に突入するのに、私は一段の力を費した。——ピタリ……正中心が決つた時、脚の激痛も我自身も、洋洋として無限の虛無に消へ去り、大生命の活泉は滾々として腰腹の中心に沸き起つた。此の時の呼吸は極めて、靜かで殆ど止まつてゐるかの様である。光茫天冥の間にあつて、生死の別目も分らぬ位だ。

刮目すれば……オ、何んぞ云ふ、素晴らしい美しさだ。何んぞ云ふ神々しさだ。枝を差し伸べた青木は、……其の



力 心 中



係關のと力心中と勢姿きし正

平凡な、ありふれた木の枝までも、ユラ／＼と微風に戦いて神々しく、祇園精舎の菩提樹にさも似たり。満目の光景
 悉く、新たな粧ひを凝らし、邊り一面は、白紫紅の寶玉を鑲めたる様に、美しく輝いた。私の心は灼然として燃え
 上つた。その新世界の崇高莊麗なよりも、……見よ。我が正中心を——。其のま、燦然として、ダイヤモンドの神殿で
 はないか。

オ、嬉しい。辱ない、古へ野尊が、惘然として、大悟徹底せられた時、天地の万象は、燦然として光り輝いたと云
 ふが、——又ソクラテスは、三日間ギリシャの原野に佇立したま、冥想を凝らし、青天微光を呈した時、忽として悟
 得し、欣喜雀躍したと云ふが、……乞ふ私の不遜を寛恕せられよ。是れ以上の美しさ、是れ以上の嬉しさであつたであ
 らうか。いや是れ以上の美しさ、是れ以上の嬉しさが、此の世の中に、又さ有り得るであらうか。

▽思考の機關全く停止

ア、聖中心、これこそは人生無上の至達だ。自分こそは此の地球上に於て、最上の幸福者だ。自分の様な詰まらん者
 が、さうしてかくも、恵まるゝのであらうか。私には私だけを護つて下さる、私だけを偏頗に愛して下さる、特別の神
 様があるのかしらと、餘りの嬉しさに、そんな不合理な事さへ、その時考へた。ア、天縁なる哉。恩寵なる哉。それ
 こそは私の生涯に於ける、クライマックスであつた。生の昂揚の極致であつた。

出し抜き、——全く出し抜きであつた。私の力は寸毫も關つてゐない。私は何の作爲する所もなく、何の研究する所
 もなかつた、平常通り熱心に、無我無心に自分の練修法を、やつて見たのに過ぎなかつた。



坐露に上石下樹

(影撮君助之弘根關日九十二月八年一十和昭)

然るに出し抜きに、完全なる正中心にぶつつかつた。——ピシヤッ——。突作の間であつた。これこそ偶中云はうか。偶發云はうか。本當に偶然だ。全く思ひもかけずに……そんなことなどは、私は全然、豫想さへもして居らなかつた。其の時の其の瞬間迄。

ダマスコ郊外、タルソのポーロは、突然純白の天光に、撲たれたと云ふが、私の場合も亦、まさしく天光一閃の變化であつた。偉大にして至妙なる力の發現に會つて、愕然として、茫然として、瞠し目失して仕舞つたが、やがて己に歸つて、其の場合に於ける姿勢動作を、冷静に検討し、眞重に審査し、始めて其處に、整然たる理路と、嚴然たる不朽の眞理さを、見出す事が出来たのである。

かくして圖らずも偶然、ボカツと打ち抜けて仕舞つた。身を略して、坐禪辨道に耽んだ高僧が、ボカツと竹の節を割つた様に。調然天悟した消息を表すのに「乍ち一夜、忽然として落節す。従前多少の疑惑、根に和して氷融し、曠劫生死の業根、底に徹して滅す。」と云はれたのは、此の點にぶつつかつたのたなき、私は思つた。

此の時を區切つて、未見の新天地は、私の衷に展開された。身も心も、浮雲に乗つてある様に、軽くなつた。而も潤ひのある大活力は、常に腰腹の間に漂ひ、輝きのある樂しさは、常に胸膈の中に漲つた。

然り。完全なる正中心力を、體得したその瞬間から、私の世界は一變した。ガラツとした別天地に、躍り出した。まあ何んぞ云ふ氣輕さだ。何んぞ云ふ明るさだ。體、心、何物もサラリと、脱着して仕舞つた所に、而も鮮かな、活々した、ユツタリした我がある。天地の大生命に連り、大能の愛の抱擁の中に、感泣する我と云はうか、万古の月、寂然として照す寒潭の淵に佇む、我れと云はうか。一草なく、一鳥飛はざる高山の、頂に立つ神殿に於いて、靜かに祈る我

れと云はうか。

清淨、無垢、純眞、透明、我が全身心、全精力、全生命、全靈魂は、渾然として、天と地と、宇宙とに、溶け込んで行つた。深い沈黙と、亢奮と、美しい感激との渦巻に、私は只身慄ひした。

酒を飲まずして陶酔の境、阿片を吸はずして、恍惚の境、而も清明麗麗の極、光耀と生命と權喜とを織りなした自然生れて初めて解かれた、絶大絶美の姿、何んぞ云ふ素晴らしい光景だ。其の藝術的、音樂的情緒を、表現すべき適當の言葉を私は覺えない。一體何んぞ叙述すべきか。言語に絶して居る。實にや拙華微笑の外には、現すべき手段とては無いであらう。

恍然として陶酔の境にあるけれども、理性は益々鮮かであつて、一切は悉く明かである。けれどもその間、思考の機關は全く停止せられてゐる。其の矛盾と調和との妙境は、知る人ぞ知る。心端しければ、則ち體正しく、心敬しめば則ち容、肅しむ。心平かなれば、則ち氣舒ひ、心專らなれば、則ち視ること、審かなり。

私が曾て東京小石川の學生修道院に居つた時、大阪毎日新聞記者から、某醫事新聞の記者となつた岡田次郎君が、大阪から電報で、私の話を、其の新聞に載せたいからとて、會見を申込んで来た。承諾の返電を出したら、早速やつて來られた。私の實兄(川合山月)と三人で會つた。私は此の力に就て物語り、感興に乗じて、拳を固め、膝を叩いて説明したら、同君は恍然として、聴き惚れて居られたが、話し終つたら、手に持つたノートは白いまゝで、何も記されて居ない。ホツとして我れに歸つた様子で、「實際に聞いて居ると、良く解る氣持がするけれども、後になつては書けませんな。書いた處が、そんな哲學的境致は、醫者などには、解りませぬね」と、態々大阪から來られて、空しく、だが喜

んで、歸つて行かれた。

文筆の雄姿として、知られた岡田君にして、尙且つ、叙述の道がなかつたものを、文才皆無の私が、如何にして、其の圓滿澄徹、靈活無礙の力の作用を、明かに表現し得るものであらうぞ。止んぬるかな。く。此の項私はこれでペンを、擲つの外はないのだ。忘るべきなきを忘れ、香を焚き若を煮て、總て白衣の童子に奉ねず。道を爲むる者は、日に損して、且つ之を損し、これを損して、又日に損し、以て儘、本來の無爲に入らむ。

▽焼けるやうな足尖

私は正中心に活きた。正中心に活きた。足が活きて来る。私は知らずに居つたら、村井弦齋氏は私が脱いだ下駄の温度を書生に検べさせたさ云ふ記事が、或る雑誌に、挿入りて出て居つたのを、後年知人の宅で偶然見たが、頭寒足熱の意味から云つて、面白い實驗だと思ふ。

私は強い正中心力を體得してから、私の兩足爪先は、焼けるやうな熱さを感じることが屢ある。丁度火傷をして、火膨れにでもなつて居るかのやうで、嚴寒でもさても、布團の中になぞ入れては、置かれないことがある。そんな時には何時でも、兩足先を布團から出して、スツカリ冷たくなるまで、冷やすのを常として居る。

足先さ云つても、其れは五本の指先であつて、小指から段々、暑さの度が強くなつて、拇指が最も甚だしい。たのに觸つて見ると、不思議なことに、却つて冷たい。握つた掌の方が、寧ろ餘程温かなことが多い。然るに、兩足指先は、熱つてく、火傷した時の感じさ、一寸も變らない。けれどもこう云ふ時は、必ず上體は、

柔軟空虚であつて、全我が悉く正中心に、收まつた時でなければならぬ。體も暗々して居るけれども、心の樂みは更に、窮まりなきものである。

「ア、辱ない。天は私に、此の至寶を惠まれた。もう何時死んだつても、何の心残りもない」と、端然として私は合掌した。——合掌——我が正中心の至誠を以て、天の至誠の前に合掌した。合掌して直に、天心に連るの妙境は、私は正中心に於て、始めて完全に、味はふことが出来た。正中心より出でて、天心に連るの合掌、——心、體、天、合一の妙諦は、其處に潜在する。

▽氣高き芳香を放つ

最う一つ、私は私自身の上に現れた、豫期せざる生理的の變化に就いて、語らざるを得ない。其れは心身兩方面の中心が、正しく身體の物理的重點に合致した時、私の體からは、何處さもなく、妙なる芳香を放つことがある。種々の香料にも持たない、氣高い香りなんだ。さうして其れは、丁度乳のやうな味を持つて居ることを、私は感ずる。

其れは、完全なる眞健康によつて、呼吸、血行、筋肉の緊張弛緩、其の他凡ての生理的狀態が、最高位にあり、以て身外の自然作用と、相連り、相交はり、兩者俱に、渾然として一つとなつた時に、始めて發し來るものである。

中心定まる所、即ち是れ明天壽源、正身端坐する所、便ち石室丹丘を成す。完全なる正中心に徹底した時の、津快感、愉悅感は、只の健康問題などは、可なり、かけ離れたものである。心身ともに、健全であつて、活きた自然の裡に没入し、包容され、融和され、生命の芳香馥郁たる處に、自ら醗製されるものである。

其れが、中心から溢れ來つて、全身に漲る壯快味は、阿片や酒に酔つたからこゝて、決して得らるべきものではないと私は思つて居る。彼れは、心身を鈍らした癡痺感であり、此れは、生命の澄み渡つた、最高潮時にあるからである。然しながら是れは、心身の完全なる健康、其のもの、眞味であるから、得て此處に至つた者には、何人にも現れ來る生理的現象であることは、私の疑はざる所である。

先哲既に曰ふ。「唯心所現の故に、鼻根乍ち、稀有の香氣を聞き、身根俄に、妙香の輾觸を受く」云。最初私は、これを以て、壯快感を表す處の、美的形容詞に過ぎないこと、思つて居つた。何ぞ知らむ。そは正中心より發し來る、實際的生理現象ならむことは、

けれども是れは、外の人には、殆ど解らないやうである。私は盛に、この清香を味はつて居るのに、傍の人は、更に知らないからである。然しながら、時には、感ずることもあると見へて、「何だか大變、良い香りがする。何たらう」と、不思議がられることもある。其の中の一つとして、横濱市、日下小學校に、教鞭を執つて居られる、土屋友男君の書面の一節を、掲げて見よう。同君は目下、兒童の體操科の中に、私の強健術練修法の幾つかを取り入れて居るこゝて、過日教材配當表の、印刷したのを、送つてよこした。

「昭和七年八月十七日、この日こそは、本當に私の一生を通じて、忘れんとして忘れることの出來ない日であります始めて咫尺の間に、御面接致しました時、私は先生が意外にも、御寫眞に拜するよりも、又嘗て昭和二年に青山會館で御講演を拜聽した時よりも、恐ろしくお若く、生氣に充ちて、居らつしやるのを、日のあたりに拜して、本當に一時は、別人のやうな心地が致し、恍惚として、一驚を喫し、益々畏敬の念を、感じさせられました。先生の雄辯は、世

の定評ある所で、正に天下無敵であることは、夙に承知致して居りますが、座談せらるゝ際、如何にも活氣のある、愉快な調子には、全く引き入れられるやうに魅せられ、一言も聞きのがさじと、専ら耳を傾けて、居りました。先生が正中心の眞諦に就て、御話し下さつた時、先程からさうも、不思議な芳香が、漂つて居ると、思つて居ましたが、其の爲めであつたのかと、今更乍ら私共の、想像もつかない玄妙さに、打ち驚き、この道に對して、無限の勵みと樂みとを、覺えました。私は今、この手紙を書きながらも、其れを思ひ出しまして、勿體ないやら、有り難いやらで、ひとりでに涙がこぼれます。あ、世に知られない偉大な御事業、日には見え、耳には聞えなくとも、旭日躍る伊豆山中より、其の馥郁たる香氣を、行頭に漂はし、日本國中に、普からしむることを、私共は感得し、刮目して待つ者であります」云々。

私は、この香り、この一種の體具を、健全なる心身合一の香りであること、云ひ度いと思ふ。そしてこれにて何も、決して神秘的なものではなく、完全なる心身の健康を得た者には、何人にも起り來る、生理的現象であることを、私は疑はない者である。

心地沈迷せは、假ひ禪を談じ、偈を演ぶるも、總てこれ精魂を播弄せむ。性天、澄徹すれば、即ち饑えて喰ひ、渴して飲むも、身心を象濟するに非ざるはなし。人身、個の境にあれば、緣に非ず。竹に非ず。而して自ら恬愉す。熾ならず。若ならず。而して自ら清芬たり。須らく、念淨く、境空しく、慮忘れ、形釋くべし。緣に以て、其の中に游行するべきを得む。

正中心に落節してから、私の心理的内面生活は、一段と賑やかなものとなつた。獨りで居つて、淋しい處か、獨りの方

が、一層、賑かさを増すやうになつたのである。

▽隼の如き私の視力

私の練習演のある時、私の兄川合川月は、病氣衰弱中でも、出来る限り、出席して呉れた。そして或る時、私が歸つた後、會衆に告げて、「弟は、姿勢を決めて立つただけで、直に神人合一の境地に入つて仕舞ふ。此の點が解らなくては、弟の強健術の真意義に解れることは出来ない」と、語られたことがあるさうである。

練習中、私の眼光が、清く、明かに、牙え渡ることは觀者の等しく、認め得る所であるが、完全なる大中心力によつて、鍛えらるゝ處、そこに澄徹清純なる涅槃のバラダイス境は、忽ちとして、展開せらるゝのである。

其の結果、私の視力は、五十四歳の今日、青少年時と、毛頭も變つて居ないのみならず、却つて益々明かに、益々強くなつて居る。だから、視力表は、普通検査の倍以上の距離でも、一切を明瞭に讀むことが出来る。此の著述をするために、至誠堂發行の「ペビ新辭典」を、時々使つたことがあるが、マツチ箱よりもマツト小さな本に三万三千語から集めてあり、本字が粟粒大であり、其の振數名は更にその十分の一位の細字であるが、私は夜中の執筆に、十燭の電燈下で、もごより眼鏡などの必要ないのだ。

而も私は、同時に四個の大學に學び、其際では経理部にあつて、常に浩翰な成規類聚の編讀に追はれ、又十數種類の著述を刊行して、眼は随分酷使した方、あるけれども體力の増進と同様、視力も亦、年と共に却つて益々、鮮明になりつゝ、ある事實は、正中心力の偉効、其の及ぶ處、心身の凡ての方面に亘れることを、裏書するものにあらずして、何ぞや。

其れはその筈だ。毒質の眼病で、視力を失つた者さへも、素食と中心力とで、ドシ／＼視力を回復し、先づ人の顔が分るやうになり、遂に新聞までも、讀み得るやうになつた位だもの。――。

竈に一切のものが、細大悉く明かに、眼に映るのみならず、此の眼光の透ぐ所、奸者惡漢共は、直に其の肺腑を射徹せられて、萎縮し、憐なる敗慘者は、其の心肝を濕されて、同情推察の涙に洗はれ、而して、此の眼光を以て、新聞、雜誌、書籍等を読讀すれば、直に紙背に徹して、其の真相を觀取すると同時に、如何に美辭麗句を列ねたものであつても、白く塗りたる墓の偽善、羊頭を掲げたる狗肉の擬裝は、忽ち剔抉せられて、蔽ふべくもないのだ。

これは中心清明の眞鏡に、一切が其のまゝ、映じ来るからであつて、毫も不思議なことでもなければ、又私自身が、殊更、誇張の言を弄したものでもないのである。凡ては、正中心による自然の働きに過ぎないのだ。而して其れは、一點の誇りも、高ぶりも、一塵の穢れも、濁りもない虚無絶對の境だ……年と共に、視力益々明かなるの最高秘訣、諸君お解りになりましたか？。

▽歩々―喜の花歩々―樂の霞

夜明けの景色を見ても、野、山、海、川、森、川を眺めても、星、月、空を仰いでも、只美しく、只嬉しく、日に新たに、又日に新たに、何物も珍らしく、何時でも新しく、便所の窓から、大空に畫かれた森の梢を、チラツと眺めても、「マア美しい」。「オ、奇麗だな」と、私の眼は見張り、私の胸はさきめく。坐つて居つても、寝て居つても、

嬉しさと安らかさの浪は、絶えず此の身を洗ふ。

鎌を持って山へ行つても、肥料を擔いで、畑へ行つても、歩々、喜びの花は満まき、歩々、樂みの霞は香る。土だらけの柔道着に繩の帯で、草の上に横たはる樂しさよ。日は暮れかゝつても、汗だらけの仕事着を脱ぐのが惜しい。

夕陽、山の端に落ちて、閃光軟かに野を走る。「何さ云ふ美しさ。お前はなぜそんなに奇麗なのだ」と、睨みつけて叱る。人里離れた山の中で、タツタ一人黙々として、用水桶の修理をしながらも、銀座街頭でも見られない賑かさを感ずる。

惜しくつて惜しくつて、仕方がないが、四邊が暗くなつたから、溢々、仕事着を脱いで、土と汗とにまみれた、愉快な體を、水槽の處へ運ぶ。嚴冬の北風を、ヒュー／＼と素ツ裸の肌にかけて、ニツコリと微笑は、頬に染れる。

チャブン、チャブンと、頭から水を被る。其れから洗濯シャボンを、龜の子把臺にぬたぶつて、ゴシ／＼と全身を摩する、そして又チャブ／＼と、水で流し落として仕舞ふ。

錐のやうな痛快な、寒冷刺戟よ。これこそは甘美なる、眞健康の味である。筋肉は充實してハチ切れさう、皮膚は奇麗になつて、ギユウ／＼と、ゴム人形のやうだ。

なぜ？洗濯石鹼を使ふのかつて？。何、其れは、別に意味は無いのサ。人糞や埃で、穢れた體を、棕櫚タワシで洗ふのたもの、洗濯シャボンで、澤山たらふちや。……ねえ、君——。

▽法則の生命に活きる正中心

星がキラ／＼出て来る。時空生死を超越した心感には、空を仰いでコマバゴを思つても、只美しく懐かしい。コマバゴ……それは銀河系宇宙の、島の集團だ。我が銀河系宇宙だけでも、直徑四十万年光年、厚さ六万年光年、一秒間に七万五千里飛ぶ光線の速さを以てしても、端から端まで届くには、四十万年かゝるさ云ふのだ。そして約二十億の恒星から、成り立つて居るのである。其の集團さ云へば、思つても恐ろしい洪大なものだ。アンドロメダ星座だけでも、一千万光年と云ふ螺旋狀星雲が、七十八万八千個からある。其れが皆一々の宇宙なんだ。けれども、其れ等を支配する、法則の根源たる眞理の生命に、活きた正中心には、只美しく、只懐かしく、感ぜらるゝばかりである。

それからカラ／＼と、下駄を引つけて、家に這入る。オレの拾つた松薪で、大分燻るな。御馳走は何だ。麥飯に菜ツ葉の生煮の味噌汁か。ウン美味しいな。かくして談笑の中に、暖かな夕飯が始まる。生命を蝕はむ正宗たの、テキタの、フライだの、カステラだの、羊羹だの……況んやウイスキットだの、ベルモットだの、そんなものは、我が神聖なる食卓上に、姿を現はすことは、絶対に許さぬのだ。只是れ尋常の家庭、素位の風光は、纒に是れ、個の安樂の高奥なり得るを貪る者は、金を分けて、玉を得ざるを恨み、公に封せられて、俵を受けざるを恨み、權豪自ら乞丐に甘んず。足るを知る者は、藜藿も、膏粱より旨しさをなし、布袍も、狐貉より暖かなりさをなし、編民も公相に譲らず。

其の夜の眠りの安らかさよ。枕なんかは、押し除けて、大の字なりに、仰向様に横たはる。胡蝶の羽はたきの様な、楽しい呼吸は、スウ／＼と、微に通ふ、軽い、快い疲労が、段々溶けて行く。崖頭樹下、風に吟じ、月を弄せば、万塵を、脱離し了る。蘆花被下、雪に臥し、雲に眠れば、一窩の夜氣を保全し得べし。

バラダイスの境は、其のまゝ此處にある。云ふこと勿れ。善行を積んで、死んだら極楽へ、行き度いものたぞ。……馬鹿な——何を未來に求むるのか。それ其處に、極樂淨土は、お前のそばにあるではないか。何時でも、何處でも——而して永遠に、……須らく汝の正中心に、活きよ。行住坐臥、到る處これ涅槃城裡の春……。

▽鑊錢見たやうな健康法を捨てる

此處に到れば健康法なんて、卑近なものではないか。其處等に、散らばつて居る、塵見たやうなものた。そんなものに、違々として、うろ付き廻る人達の、何ぞ羨まじきことよ。其の根本中心をさへ、得たならば、そんなものは、着物の裾に喰附く埃同様、自然に隨いて來るものた。健康も強力も、只それだけのものならば、つまらん鑊錢、見たやうなものた。

中心を得ぬ弱い人達には、そんなものが、千万金の寶のやうに、思はれて、盲人が盲人の手引しつゝ、足掻き求めつ感ひ徘徊ふ有様の、扱ても憫れなることよ。友よ。何を捜すのか。何を何處に求むるのか。汝を活かす生命の鑊は——汝自身の、衷にあることを知らざるか。——眼を開けて、見ろ——。

「神の國は、見ゆべき狀にて、來らず。此處にあり。彼處にありと、云ふべきものにあらず。視よ。神の國は、汝等の中に在るなり」。「人もし渴かは、我に來りて飲め。我を信する者は、聖書に云へるが如く、其の腹より、活ける水川となりて、流れ出づべし」。「我に汝等の知らざる食物あり」。

正中心に活きよ。然らば其の水、其の食物は、汝等の衷より、滾々として、湧き溢れて、常に汝を、養ふことであらう。理寂なれば、則ち事寂、事を遣つて理を執るものは、影を去つて、形を留むるに似たり。心空なれば、則ち感空なり。境を去つて、心を存するものは、糧を聚めて、餉を却くるが如し。

▽變らぬ若さ

さもあらはあれ、私は本年（昭和十一年）五十有四歳——たが……私の筋肉に於て、内臓に於て、齒の美しさに於て體力に於て、何處に二十三四歳、血氣旺んな時と、違つた處があるであらふか。ない。ない。ない。のみならず其の凡てに於て、悉く進歩發達しつゝある事實を、私は微笑を以て、物語らねばならぬ。何となれば合理的不磨の練磨は、かくも永く、青春の力を、保持し得るものであると云ふ希望を、身を以て、明かに示すことになるからである。嘗て私の體が、さうであるばかりでなく、私の精神も亦、十有八才の秋、奮然として體軀の改造を志した時と、少しも變らぬ感激と、興奮と、熱誠とを、失つて居らないのみならず、其の意氣益々、旺なることを、併せて附言して置かねばならぬ。

而かも是れ皆練修時、心身の兩中心を纏めて、よく物理的重點に、合一し得た賜物に外ならぬのだ、正中心の妙諦、其の及ぶ處、まさに計り知るべからざるものあるに對して、私は只管、歡喜、感激、讚美の熱情に、陶酔せざるを得ないのである。

昭和五年四月末日、講談社の野間社長から書面で、記者を派遣するから、會つて呉れこのことで、承諾の返事を出したら、五月五日に、編輯部の柳井正夫君が來られた。

私は私の、現在の心境を書いて貰いたいと思つて、御話したが、さうも旨く書けないから、少年時代の發憤の状況を書いたと、後で云つて来た。そして、其の七月號には當時の私の寫眞を掲げ「これで四十八歳です」と註がしてある。

昭和六年九月二十五日夜、麴町區一番町の宮内省官邸に、侍從長鈴木大將を御訪ねした時、大將は私のことを三十歳位、奥様は二十歳位と思つたこと云はれた。(其の時私は四十九歳)

同年同月二十九日、池田前神奈川縣知事を青山の寓に訪ねた處が、「さうだ。若いねえ。まるで二十代だ」と云はれ奥様は三十歳と思つたこと云はれた。

昭和九年九月、郷里甲州小沼に歸つた時も、私の年老らぬところが、大評判だつたさうだ。「前に来た時(昭和二年)一寸も變らない。却つて若くなつて居る」とは、何處へ行つても云はれた言葉だ。九月十四日、父在世の頃、親戚同様に世話になつた醫家の、渡邊顯二君未亡人が、病氣で寝込んで居られると聞き、これも其の當時、最もよく父の世話をして呉れた、渡邊勇兵衛君未亡人に連れられて見舞に行き、養生法を話してやつた處が、私を見て「マアお若いですね二十一位だ」と、云はれて居つた。——まさか……ソナナことはない。けれども、私の體力、元氣に於ては、まさに二十三四歳壯年時と、更に變らないのみならず、其の實質に於ては、到底比較にならない程、現在の方が優れて居るのだ。九月二十五日、二本博士をお訪ねして、歸らうとした時、一婦人が見えられた。博士に紹介された。「此の人は、針を執つては、日本一の河村さんです」と。奥さんは私のことを話された。「此の方は、これで五十二歳になります。非常なお力をお持ちでございます。田舎にいらして、メツタに、いらつしやいませぬ」と。

十二月十四日、帝大理學部教授で、熱河の學術探險をされた中井理學博士が、三人連れて、突然訪ねられた。「ヤア

暫らく」。『ヤアさうぞ』。自動車を持たせてあるが、此の人達に、中心力で足の形に踏み抜いた板を根太を、見せてやらうと思つて、一寸お寄りしたと云はれるのを、「マア、い、でしやう、一寸でも」と、無理に座敷に招じた博士は同行の者に云はれた。「八年前にお訪ねした時よりか、一層若くなつて居られる。私さ丁度同年だが、二十歳は違ふね」と、大笑ひ、同行の二人は、吃驚して、「私共は三十位かと思つてみました」と、啞然たる様子。

其れから、私の道場に行つて、同じ形に踏み折つた板や、根太や、振ぢ切つた鐵棒なぞを見せた。其の時、私は長劍を取つて、突如、抜き放つた。博士と私は、一尺未満の間隔、目にも止まらぬ速さで、私は數種の型で抜き放つた。ピカッ、く、く、く、刀は博士の面前一二寸の處を、電の如くに、通過した、一分でも手先が狂へば、博士の顔を斬る處だ。他の二人も、殆ど私と接して、立つて居るのに、刀は元より、肘も觸れない。私は簡単に、中心力の説明をした。博士は、男性的で、實に痛快ですなえと、大喜びであつた。坂の下まで送つて、惜しき別れを告げた。博士の御盡力によつて、郷社八幡來宮神社の境内全部が、内務省より、天然記念物として、指定せられ、其の保護を受けるに至つたことを、此の機會に於て、私は厚く感謝の意を表して置き度い。

村井滋齋氏未亡人が、學生修道院に私を訪ねられた時、夫人は、十八年前と、少しも變らぬと、云はれた。何年振りで逢ふ人達に、私はよく云はれる。「少しも變つてゐませんね」と、私は心中で答へる。「イヤ變つてゐる。益々強くなりつゝある」と。宿屋に泊つた時、本當の年を書くと、何處でも必ず、「出まかせでなく、さうぞ本當のことを」と云はれる。全部嘘を書いたのだと思はれるのだ。

だが、容貌の若さなどは、問題とするには足らない。要は、體の實質の若いこと、心の若いこと、魂の若いことが

肝腎なんだ。

其れと同時に、私は、學者等が、ヤレ老衰豫防の薬たの、若返りの手術たの、たわけた事に、頭をひねり、又自己の根本實質を良くすることはしないのみならず、勝手な不仕たらは、遣り放題でありながら、一寸した服薬や手術で、若くならうなご、する愚劣さを、嘲笑せずには、居られないのだ。——廢めて仕舞へ。ソナナ馬鹿けたことを……。

▽宇宙生命の羽搏を感觸

昭和八年、陽春四月の末つ方、裏山の密柑畑の斜面で、朗々たる天日を、滿身に浴び、深緑燃ゆるが如き林を背に、私は、枯枝を引つて居つた。流る、顔の汗を、シャツの袖で拭ひながら、枯木の幹に腰かけて、暫し休息しやうとして、フコ、腰腹の姿勢を決めた處が、……何事ぞ、突然、私は驀へ方なき、大なる力を感じた。

空も、海も、野も、山も、一時に生命の動搖を以て、迫り來り、私の身も、魂も、壓倒されむばかりの、重い觸感を覺へた。

此の時私は、自然の大方則の裡に、絶大の生命力潛み、絢爛たる大光明臨り、莊嚴にして優麗なる真理の流れ、滂薄として、流打つて居るのを、眺めた。宇宙は、生きて居る。天地には、生命がある。

オ、さうだ。宇宙は生きて居る。詩人の空想ではない。神經衰弱者の幻影ではない。其活きた力は絶對強健な此の心の、奥底にまで、響いて來るではないか。頭強な此の筋肉に、健全な此の頭腦に、生命の羽搏きは、明かに觸れるではないか。

大なる感謝と、歡喜と、感激とに、私の全身は震ひ、私の心は、焼き盡されむばかりであつた。やがて私の兩眼からは、熱淚漉々として、地上に溢れ落ちた。

ア、私は、自然の子だ。私は真理の中にある。私は自然と共に生き、真理と共に、死ねばよいのだ。無上の幸福、無上の歡喜、生も美しく、死も亦美しく、生も美しく、死も亦美しい。凡ては正しき方則の中にあるのだ。

▽無限のインスピレーション

關羽は「千里獨行」をやつて、他の援けを退け、宮本武藏は「獨行道」を唱へて、勇往邁進した。「時機、佛を見ず大悟、師を存せず」。「衣を千仞の岡に振ひ、足を万里の流に洗ふ。大丈夫の居る所、立つ所、行く所、皆主一に由る」。——天と我れ……直ちに天堂の聖境に參して、真理の靈光を汲む……これ我が偏に希ふ處、友と離れ、事業を捨て、世と絶ちて、伊豆山中の幽寂境に、自然と親しみ、自然に學ぶこと二十箇年、正中心力の體得によつて、健康問題に治病問題に、人生問題に、宗教問題に、幾多の疑義は、私に於ては、忽如として悉く消融され、ダイヤモンドの天光は、潜然として、雨の如くに、此の身に降り濺がれた。……只清明、只強大、只優美、只高貴、只平凡、只感謝、只歡喜である。——光明は流打ち、生命は躍る。

オ、光と命とに満ちた、スバラシイ大自然の展開よ。野にも、山にも、木にも草にも、石にも水にも、宇宙生命の脈搏は、動いて居る。凡ては魂の彫刻だ。神の一大夢幻劇だ。何と云ふ神々しき、何と云ふ美しき、紺碧の空へ、綿を抛つたやうに、白雲が散らはつて居る處、眞理の呼吸は、麝香のやうに、浸み出してゐる。

私の心は豁然として、只其の神祕に溶け入り、無限のインスピレーションの流れに酔はされる。

「大變なものだなあ」と、我れながら屢々驚く。實に是れは、容易ならぬことなうた。

「我に元玄真丹の神祕あり。上々の器にあらざるよりは、得て傳ふべからず。古く黃成子、是れを以て、黃帝に傳ふ帝三七齋戒して、是れを受く。夫れ大道の外に真丹なく、真丹の外に大道なし」。

是れを受くるに當つては、皇帝の貴きにあつて、尙ほ且つ二十一日間、齋戒沐浴して身を磨き、心を清くした。而も上々の器でなければ、其の奥祕を傳へることは出来ない。雨餘、山色を觀れば、景象便ち新研を覺ゆ。夜靜かにして鐘聲を聽けば、音響尤も清越となす。

だから、其の深奥無限の、極秘に至つては、眞率熱誠、不撓不屈の士が、心を磨き、身を清めて、精勵するでなければ、到達することは出来ないのだ。されはさて、徒に徳々促々、氣宇狭小の者も亦、憐むべし、空しき努力を、續けるだけであつて、中心光明の流れを汲むことは、六づかしいのである。

▽完全なる健康の實感のみ

昭和九年六月二十三日夜、私は獨り密室に於て衷に深く、大中心力の鍛錬、二十回行つた。水浴後、庭に立つ。半輪の月、既に傾きて、眞黒な青木の枝から、金色の光が洩れて来る。明るく空には、星がチラホラと輝いて、呼びかけるやうだ。生暖かい風がソヨ／＼と、肌を撫でる。

私は此の時、頭で精神的に、天地の美を感じるさういふのではなくして、完全なる健康の力を以て、肉體的に生理的に物理的に、觸覺的に、全身を以て、此の絶美なる大自然の中に、溶け込んで行つた。青春の甘美と、眞紅の情熱とは魅惑的の力を以て、私に迫り來り、私は夢想的玄境に陶醉した。

「マア、何と云ふ、素晴らしい光景だらうか。明明にして豊饒、鮮活にして清楚、私の全身には、若き血汐がさきめいた。オ、誰か、月は死滅せる土の塊りたさ云ふ。誰か星は、只燃えさかる、火の一團たさ云ふ。誰か大氣は、酸素、水素、窒素、アルゴン、炭酸瓦斯、オゾン、ヘリウム等の、物質のみたさ云ふ。誰か樹木は、無意義に繁茂して居るのに、過ぎないさ云ふ。オ、誰か、天地の物體には、思想なく、情念なく、感覺なく、生命なく、魂なしと、斷言し得るものだ。」

見よ。天も地も、月も星も、風も樹も凡て、實在的物理的、生命的、精神的、感覺的、情熱的の力を以て、私自身の肉體其のものに、明かに、囁れて來るではないか。

嗚呼天地に道あり。力あり。生命あり。神は生きて、宇宙を主宰し給ふ。人生の旅に、淋しく行き暮れた、敗殘の同胞よ。孤獨の友よ。世は皆、白眼冷嘲を、君の上に灑ぐとも、御身若し、己が中心の鐵扉を、開かるゝならば、活ける自然は、直に來つて、力強き抱擁を以て、逆境の暗雲を、拭ひ去つて呉れるであらう。達磨大師は云ふ、「求心不可得」と、心の憂愁を一掃し去らば、環境の暗流も、何するものぞ。喜びは衷に溢れて、餘りあり。雨をして、勝手に降らしめよ。風をして、氣儘に吹かしめよ。

或る大宗教家が、大正十二年六月の、私の経験を以て、「宇宙の力と、合一したのだ」と、云はれたけれども、私はそんな、深遠なものとは、考へて居ない。單に、「最も正確な、姿勢から出た力だ」と、解釋して居る。

又、正中心を決めた場合、天地燦然として、輝き渡るの現象も、只、完全なる健康によつて、天地の實體を感ずるのたゞ、思つて居る。何れも單純なる、理學的現象に過ぎないことを、併せて茲に、附言して置く。但し、一切の理學的現象の中に、神の法則、自然の原理が、動いて居ることは、これ又、言を俟たぬのである。

即ち何等、宗教的修養でもなければ、宗教的經驗でもない。諸君若し、眞神の道を、尋ねんさせらるゝならば、我が兄、川合山月の教を、受けられんことを――私は彼れの、靴の紐を解くにも、足らざる者である。私の裸體姿が、直に體的修養の、木義を示すが如く、我が兄の聖化されたる、靈體の上には、何人も直に、神の佛を、認めざるを得ぬことであらう。

私は單に、最も完全なる健康と、最も完全なる力を、體得したる者たるに過ぎない。

「聖中心道」なる言葉を聞いて、何等か、宗教的獲物を得たいと、希望されて、私を尋ねる方があつても、私には堪ふべき、何物もないことを、明かに断つて置く。同時に私は、靜黙を愛し、談話は、甚だしく厭ひ、嫌ふ者であることも、ついでに、御了承を願つて置かねばならぬ。私の門前には、十數年前から、「面會謝絶」の札が、懸つて居り、私の應接間には、「御面談十分間に願ひ上候」の、貼り紙が四枚、壁の前後左右に、掲げられて居る。

▽宇宙神秘の素晴らしい姿

昭和八年十月十九日、病後の妻を休ませる爲めに、私は未明に跳起きて、家の北側にある所の臺所へ行つた。玄米と小豆を洗つて、釜に入れ、火を炊き附けてから、爐の前の板の間で、中心力鍛錬法二十回やつた。

眼光を北側の、曇りガラス中の一點に定めて、完全強大な中心力を造つた。心身一如として、時空を絶して、水垣の濱邊に佇み、浩々乎として、虚無の生命と合一した。

終つて裏庭へ出た。――ヤツノ見よ。雑草が輝く。杉の木立の向ふの土手の上に、種々な雑草が生ひ茂つて居るのが金銀珠玉を以て、鑲められて居る。土手の下は、蜜柑畑で、梢の頂が、これも矢ッ張り永遠の光に彩られて居る。其の向ふは、富戸の盆野久堂山の山腹の流れた。それから遙に、紺碧の海を越えて、房州の山々が、夢のやうに浮んで居る。

美しい輝きは、滂らめく。其の輝かさ、其の明かさ、其の安らかさ、其の聖らかさ、私は終に、形容の言葉を知らない。私の全身の血汐は躍動した。私は眼前に、宇宙神秘の素晴らしい姿を見た。まさに是れ、基督の愛、釋迦の慈悲、孔子の仁の、活きた標徴さでも云はうか。軟かな一抹の精氣は、霧のやうに、私の全身を包んだ。

ア、是れ何の光景なるぞや。幻覺か。妄想か。睡夢か。……非ず。……これぞ純健康が齎す現實的感覺に外ならぬのだ。即ち、強大なる中心力が、眼を通じて感ずる、一種の生理的作用に、外ならぬのであると、私は信ずる。

▽至健なる自然生活

昭和九年七月二日、朝食、玄米飯に水をかけて一杯、原稿の筆を擱いて、久し振りで仕事にかゝつた。久し振りの勞働に、壯快禁じ難く、直に猿股一の素ツ裸となり、勇躍して外へ飛び出した。跣で土を踏むと地氣はゾーツと、足の裏から泌み込んで来る。

セメントに砂を混ぜて、水槽の補修工事をやつた。結構旨くいった。午前中かゝつた。セメントで積れた體へチャブくさ、頭から水を被つて、ザット拭いて晝飯、玄米飯二杯、副食物は茶つ葉の漬物、アツサリして居つて、實に美味しい。飢が十分に充たされたのみならず、お肌の中まで、嗜々して居る。

私は松の木の下の下へ、裸のまま、仰向き様に横たはつた。松の枝を通して、青空に白い雲の動くのが見へる。海上を渡つて来た風に、深翠の葉がザワめいて、天琴を奏する。女神サイレンの歌に耳を傾けて、其の身の獸に變ぜらるゝも知らなかつた漁夫のやうに、私は恍乎として、其の神々しい無法の樂に聞き惚れた。其れからウトくさ、私は暫し、睡の國へ落ちて行つた。

フト眼が覺めると、新元氣は全身に、充ち溢れた。私は微笑を以て、起ち上つた。そして鉄を以て燭に行つた。夏の日はカンくさ、照りつけるのに、帽子も被らず、素ツ裸で、鉄を振ふ愉快さよ。可成り廣い燭は、瞬く間に奇麗になつて行く。熱汗は浴びるやうに、全身に滴る。

バタ／＼バタ／＼と猫を振ふ音が、燭の隅で聞える。目を上げて見たら、其處には雌雄二羽の山鳥が居つて、尾の長い雄の方が、舞ひ上るやうな形をしながら、猫を振つて居るのである。スルト何事だ。雌の方は燭の土手を下りて行つたが、雄の方は、チヨロ／＼、チヨロ／＼と、私の方へ歩いて来る。私はジイツと、石地藏のやうに立ち盡した。山鳥はたん／＼、私に近寄り、丁度私の四尺ばかり、前の所を通つて、さすが足早に、右から左へ抜けて行つた。其の時私はハツキリ山鳥を見た。其の猫の美しい艶つたら無い。マルで滴らむばかりの色である。警戒に動く頃の素敏さこそ天然食に依る彼等は、かくも健康の幸福を、満喫して居るのかと、私は感に打たれて眺めて居つた。

私は水を飲み、臺所へ行つたら、樋の口から水が出てゐない。私は其のまま、裸で、跣で山へ登つて行つた。藪の中を潜つて、樋の破損箇所を調べながら歩いた。

私は曾て甲州小沼の家に居つた時、桂川を泳ぎ渡つて、裸で跣で、四千一百四十四尺の倉見山の頂まで、登つたことがある。伊東あたりでは、私が跣で、茨の中を飛び歩く噂してゐるが、其れは私がよく運動ズボン一つで、跣のまま、山を歩いてゐるのを、八幡野の人達が、見てゐるからである。

私は藪の中で、大きな竹が割れて、其處から水がガシャ／＼と、洩つてゐるのを見出した。致方がないから急ぎ馳戻つて、大きな孟宗竹を切り倒し、細い鐵棒で節を抜き、其れをかついで再び大急ぎで山へ登り、舊い樋を取り代へた。

修理を終つて、家に歸ると、長男の修一郎が、學校から歸つて來てゐる。そこで二人で楊梅の木に登つたスル／＼と忽ち頂邊の細い枝まで行つた。マルで猿のやうだ。體を枝の中から出して見ると、緑の葉と葉の間には、黒い實、紅い實が、一杯鈴なりに、喰らひ附いて枝垂れてゐる。大供小供二人は、其の中の熟した黒いのを、兩手で撮み取つて、頬張つた。味に於ては正に果實の王、美味しい汁は、口一杯になつて、喉から流れ込む。大豆粒よりも、大きな種は、其のまま、ドン／＼飲み込んで仕舞ふ。二人で二升以上は喰べた。小供が一升なんか喰べられるかと、都人は怪しまれるかも知れないが、事實その位は何でもないし、又一々種を出して居つたのでは、折角の旨味が、半減されて仕舞ふのだ。ソソに種を飲み込んで、胃腸に障りはせぬか。大丈夫、そんな心配は、絶対にない。

楊梅には、適當の鹽酸が含まれて居つて、強力な消化作用が行はれる。楊梅を喰べる時、直ぐお腹が空く。一番消化作用の強いのは、山芋で、次が楊梅、其の次が大根下しである。稀鹽酸や、ヂヤスターゼの様な、不自然な濃厚抽出

物よりか、かう云ふ自然の健胃消化劑の方が、何倍か優れてゐる天理の妙を、讀へすには居られない。何も要らんのたぞ、諸君。特製品なんて、何も要らんのた。自然には、凡て完全に備へられてゐる。自然から出て、自然に存在し、自然に生きてゐる一切の自然物は、皆悉く、自然と俱でなければならぬ。自然に歸れ。汝自然の反逆者よ。然らば汝は、自然に病魔を驅逐して、至健の幸福に、飽滿することが出来るであらう。

今日は七月二日、竊藤内閣瓦解の機は、刻々迫りつゝある。後藤内閣を自指しての暗躍策謀が、百鬼夜行の醜劇を演じてゐる。愛國の高士をして、面を覆はしむるものがある。千九百二十五年非常時を控へて、神州帝國を愛する、純眞の熱情があるならば、何の暗躍だ。何の策謀だ。衆議自ら一に、歸すべき筈ではないか。嗟乎、花枝動かん欲して、春風寒し。世間紛々何ぞ問ふに足らむや。如かず高臥して且つ餐を加へむには――。

▽地球の呼吸が足裏から

流る、汗は、健康の雫だ。人は暑さに、ウー／＼と茹たつて居る、夏の眞晝、猿股一つの素ツ裸で、帽子も被らず、裸足のまゝ、賑々たる炎日に、曝されながら、掛聲と共に、斧を木の根に振ふと、土埃は、パツ、パツと進む、汗みづくの體は、忽ち泥に塗れる。私は耐熱の壯快に叩かれて、微笑の頬に滾れるのを、止めることが出来ない。

畑の耕作、肥土擔ぎ、耕翻、土堀、石搬び、木切、中心力抜刀術、凡て力を腰と腹とへ、籠めて遣る動作、何れも痛快極まり無し。

天日のもとに鉄を振ひ、草を毛つて、湖を躰へた時、緑の葉濃く燃つた中に、黄金の塊が、果々さ垂れて居る、蜜柑

の木の下に馴けつけ、枝を撓めて、皮の一部を喰ひ破り、淡紅色の薄皮の中に、湛へられた玉漿を吸ふと、新鮮なヴィタミンの精氣其のものが、油然として、鼻口を襲ふものあるを覺へ、仙人は木の實を枝になつて居る儘で、口を附けて喰べるご云ふ、傳説も思ひ合はされて、羽はたきし度い計り、美味しく感ぜられる。

劇しい労働をして、熱汗が燒けるやうに顔に滴つた時、山の中を通る桶から、冷たい水を兩手に受けて、顔を洗ふ壯快さよ。労働は神が與へ給ふた恩寵の、大なるもの、一つである。

夕月を仰いで、薄暗い山道を歸り、體温で熱つた、襪履シャツを脱いで、冷たい風に、皮膚を曝す、氣持良さ。更にゴム足袋を除つて、素足で大地に親しむ嬉しさよ。地球の生命と、地心の呼吸とが、足の裏から、心臓の中まで、必み込んで来る。

私は用事の爲めに、都會へ出て、暫らく汗と土とに、塗れることが出来ないご、鉈や、シャベルが、堪まらなく戀しくなる。早く歸つてタツタ獨り、山の中へ這入つて行き、青葉蔭かな雜木の下で、特別製の大鉈を振るつて、スボリ／＼と、太い枝を切つて見たい。薩々たる兩腕の筋肉を、躍らせて、土の中深くシャベルを突き込んで、山芋を掘つて見たいご思ふご、體中の肉はビク／＼と動く。ア、此の力、ア、此の肉、自分は本當に、無上の幸福者だご、清快の情は、脈管に漲うつ。かくして活々さ、自然と親しむごの嬉しさよ。清修に個の眞物あり。向上に種の眞道あり。人よく誠心虚我、形骸兩つながら釋け、行氣交々流れしめは、調息觀心に勝るごご千萬なり。

健康は生命の光なり。病弱は人世の重荷なり。「夫れ持てる行は、益々與へられ、持たぬ者は、其の持てる物をも、奪ひ去る」。鍛錬努力の樂は、其處にある。

だから強い者は、益々強く、弱い者は、愈々弱くなる。強い者には、寒風も、炎熱も、——其の他一切の自然物は、悉く彼れの滋養物となるけれども、弱い者にとっては、其れ等の凡てが、悉く彼を傷ふ双なる。強者は、益々自然と親しんで、愈々強くなり、弱者は、益々自然から離れ隠れて、愈々其の身を弱くする。強者の幸福を祝すると共に其れ等の弱い人達の……ア、何ぞ云ふ氣の毒なことたらうなア——。

▽太行の路、巫峽の水

伊豆山中の一軒家だ。四邊はシーンとして、幽寂の氣は家の内外を包んで居る。其の閉ざされた密室の道場だ。其處で私は只獨り、心にくいまで、正中心の妙技に酔ふのだ。氣合の聲は足踏と共に、四圍に木響し、私は獨り飽くまでも、中心の力を満喫し、無限の甘美に魅了される。そして恍然として、現し世か、神の國かこの別日さへも、定かならぬ境地に徘徊ふ。

見よ。其處には唯、雄大にして、妖艶華麗なる新天地が、展開せられて居るではないか。全く世に埋もれて、知る人さては、誰も無いけれども、此の時こそは、私にとつて、千万金の價値ある生涯であり、生の意義と昂揚とを、此の時に於て始めて、私は自覺し、認識することが出来るのだ。

富も、名譽も、學識も、事業も、勳功も、此の時の私にとつては、まさに塵埃に等しきものだ。只獨り、我れ只獨り、——私は獨り、正中心の聖き境に酔ふ。

我が中心は、何時でも、我を捨てぬ。自然も何時でも我を捨てぬ。だが——中心を外れると、自然は我を捨て、

他所くしき姿となり、我れ又我を捨て、我と我が身を、捨て除すことさへもある。我れ中心の大道にあつて、正しきを踏む時、神また我と俱に歩み給ふ。

天下一切のもの、皆我に善しと雖も、天下一切のもの亦、皆我に、善からざることもある。只終始一貫して、如何なる時と雖も、我れを捨てない、力強い支持者は、ア、是れぞ、我れ自身の、中心生命にあらずして、何ぞや。

當にならんの、人間だ。「鶏鳴かざる前に、汝三度、我を知らずと云はむ」。然り、此の時テテロ盟ひ、且つ誓ひて云ふ。「我は汝等の云ふ、其の人を知らず」。

彼の人も往つた。是の人も離れた。彼の人も去つた。是の人も反いた。太行の路、能く車を推く。若し君が心に比すれば、是れ坦途。巫峽の水、能く舟を覆へす。若し君が心に比すれば、是れ安流。君見すや左納言右納言、朝に恩を承けて、夕には死を賜ふ。……朝に恩遇を蒙り、夕には坑に焚かる。人生の浮沈は、晦と明とに似たり。實にや、世上行路の難は、山に在らず。水に在らず。祇た人情反覆の間に在り。

時移り、事變り、利害相反するに至れば、他人皆容易く、我を捨て、豈嘗に他人のみならむや。窮すれば、我れ又、自ら我を捨て、自暴自棄なるもの、其れならずや。

然るに、何時如何なる時と雖も、必ず我れを離れず、我れを捨てざる、眞實の友がある。何ぞや。云ふまでもない。我が正中心である。中心の生命である。中心の光である。正中心は、何時でも強い。何時でも充實して居る。何時でも輝いてゐる。何時でも安息所である。何時でも微笑んでゐる。如何なる逆境も、如何なる悲運も、如何なる迫害も、悉く一時に克服し去る。力強き友よ。絶對虚無の妙機は、常に正中心の裏に潜んでゐる。

自ら助くる者は、天又是れを助く。自ら棄つる者は、天又是れを捨つ。正中心を得るのは、自ら助くる、最上の道であつて、又是れ天に通ずるの道である。即ち我が中心に生きて、併せて、天道に至る所以である。釋氏の隨縁、吾儒の系位、四字はれ渡海舟の浮囊、蓋し世路茫茫、一念全きを求むれば、則ち万緒紛起す。中心虚無に隨つて安んずれば、素琴、故なくして、常に謙へ、箴箴、腔なくして、自ら適す。

「人若し、汝の右の頬を打たば、左をも向けよ。汝を訴へて、下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ」と、愛の唱道をなし、多くの善から、神様のやうに、尊はれて居る友人がある。それは誠に、結構な事には、相違はないが或る時私は、抑捺つて云つた。「君達のやうに、こんな悪漢でも、愛してやれ。何事も樂觀して善意にされど教へてさへ居れば、善い神様で通れるがねえ、おれ等のやうに、善を善とし、悪を悪とし、是を是とし、非を非として、明確な案を下せば、其の悪させられ、非させられた方は、忽ち餓虎の如くに、噛み附いて来るんだ。吾輩も、在郷軍人や消防組や青年團の頭なさをやつて居つた時には、い、旦那さんで收まつて居られたが、一朝複雑な地方問題にぶつかつて最も公平な具體的意見を發表すると、昨日の神様は、今日は忽ち、最悪の悪魔と顯露した。然り、然り、否、否の聖訓に従つて、明々白々の態度を執れば、敵は必ず、出て来るものだ。だから我が輩には、常に下らん、時もない敵があつて、神様ごころの騒ぎぢやないよ。まことにどうも厄介な娑婆でしてねえ」と。

節義を以て、誇を受け、道學に因つて、尤めを招く。故に君子、腥膻の世に處する行誼は須らく至純なるべからず。併せて惡事に近づかず。亦善名を立てず。只渾然たる和氣、纒に是れ、身を居くの珍なり。惡を聞くとも、就ち惡むべからず。恐らくは讒夫の、怒りを洩らすことをなさむ。善を聞くとも、急に親しむべからず。恐らくは奸人の、身を進

むることを引かむと、古哲は懇切に、保身の訣を説かれた。

然り。明刀一揮、正邪を嚴にすれば、誹毀忽ち起り来ることは、始めから覺悟せねばならぬことだ。だが、正中心に徹すれば、敵もなく、味方もなく、彼もなく、我もない。空々乎として、而も善惡正邪、得失可否を明かにす。されば時には、一切の汚辱垢穢も茹納すべし。只夫れ醜毒を多數の上に流すに於ては——木ツ葉微塵に、ブチ碎いてやれッ。

▽强健の息吹は浪打つ

正中心の鍛錬、二十回を終ると、無限の青春は、中心から湧き起つて来る。而も其れは、蒼白い未熟な、青春ではなくして、圓滿豐熟の青春なんだ。完成し、圓熟した青春、これ即ち理想的、青春でなくして、何であらう。

躍々として、賑々として——ムクムクとして、全身の筋肉は、ハチ切れさうに、張つて来る。强健の息吹は、浪打つて居る。覺えずフツクツとした上腕を、自分で觸つて見る。まるで弾力の強いゴムだ。擦摺たわしの摩擦で、表皮の新陳代謝の旺な皮膚は、滑かたで、軟かたで、赤ん坊の體のやうだ。自分も丁度、今生れて来たやうな無邪氣な、屈臣のない氣持だ其の樂しきッたら無い。此處に、俺だけの寶玉が、藏されてある。此處に、他人には解らぬ、富が蓄へられてある。

「此の輩、黙しなは、石叫ぶべし」。私は押し寄せ来る喜びの爆發に、堪へ得ずして、天空を仰ぎ、高く手を挙げ、思はず喚聲を、挙げるこがある。片手ではない。天心を仰いで、覺えず兩腕が、サツと舉がる。ニツコリと笑ひながら、片手を差し伸べるこもあるが、そんな時は、尙ほまたるし。劇しい喜びに變はれた時には、思はず兩腕が、一時に舉がる。何者か、兩手を執つて、スーツと舉げるかのやうで、私としては、無意識であり、衝動的である。

ア、ッ嬉しい。何と云ふ美しさたご叫ぶ。知らぬ者が見たら、氣違ひたごも思ふであらう。此れは人間の喜びではなくして、天の喜びだ。天の喜びを、直接感ずるのだ。人間の喜びは、少しも違入つて居ない。喜びの性質が違ふんだ。この喜びは、人世の何ものにも、關りは無い。何物にも、——富にも、名譽にも、地位にも、學識にも、家庭にも、肉身にも、イヤ、そんなものが有つては、起り得ない喜びなんだ。凡てに捨てられ、凡てを離れ、誤解、非難、逆境、孤立、暴風、怒濤の大荒の真只中に、赤手空拳の我と、天とに於て、始めて感得することが出来る。聖なる喜びである。而も其の時に於ては、天もなく、我もなし。只あるものは、眩ゆき計の美しさご堪へ切れぬ喜びごのみ。

▽面壁九年の眞意義

天運の寒暑は、避け易きも、人世の炎涼は、除き難し。人生の炎涼は、除き易きも、吾心の氷凝は、去り難し。この中の氷凝を去り得ば、滿腔皆和氣、自ら地に隨つて春風あらむ。

心に其の心なくば、何ぞ觀に在らむ。心を觀ると曰ふは重ねて其の障を増すなり。物本一物、何ぞ齊しうするを待たむ。物を齊しうせよと曰ふは寧ろ其の同を割くなり。便ち自ら衣を擲つて長く往く。達人の手を懸崖に撒するを羨む。窓を開いて、華々しい絶景に、向つて居つても、強大な正中心の力が、漲り來ると、其れはみんな、忽ちして奈落の底に、消え去つて仕舞ふ。

秀麗の山、何ものぞ。閑かな春の海、何ものぞ。雲のたすまい、空の色、扱ては床しき鶯の聲も何するものぞ。然り、正中心に輝く、働きの美しさ、樂しさ、嬉しさに比べると、其れ等のものはまるで、下界の塵にも等しい。

正中心點からは、何と云ふ知らぬ偉大さが、限りなく、フツ飛んで來る。そして豁然として、忽ち大空一面にまで、擴がつて行つて、天も地も我も、渾然として、一體の光明に、包まれて仕舞ふ。

正中心の働きを、些少なりとも、制肘されない意味から、云つたならば、寧ろ無氣味な柱か、陰氣な壁に向つて、練修した方が、遙にました。最も——正中心が完全に働けば、天下の絶景も、柱も壁も、一體に空となつて、たゞ正中心の活躍、光輝あるのみだから、それは結局ごちらでも、關はない譯ではあるが——。

茲に於てか私は、達磨の面壁九年の眞意義が、自らハッキリした。オ、さうだ。達磨大師の面壁九年は、陰鬱な籠居生活ではなくして、光明燦爛たる、宇宙精神の、大活躍であつたのだ。此の正中心に、透徹した達磨にまつては、武帝の勤業治績の如きも、「無功德」と、一喝した底の價値しか、無かつたのだ。

回途の石馬紗籠を出で、透網の金鱗、猶ほ水に滯る。此の正中心に徹しなかつたならば、寺に這入つて、墨染の衣を、身に纏ふたからきて、其れはたゞ、實社會を離れて、僧籠に身を投じたご、云ふだけのごであつて、所謂回途の石馬透網の金鱗、矢つ張り俗界に、居るのご、變りはないのだ。

又自力本願、他力本願と、云ふごがあるが、一方に偏したのであつては、其の何れでも、駄目なんだ。自力の目的は、自己正中心に覺醒するにあり。他力の本質は、徹底した正中心を捧けて、天地の神に、任せ奉る處のものではなくてはならない。如かず、身心を放つて、冥然天造に任せむにはご、如かず、身心を收めて、凝然、寂定に歸せむにはご、放者は流れて猖狂となり、收者は枯寂に入る。唯善く、中心構機に據つて、身心を操る者は、柄櫛手に在り。收放自如、方圓並び行はる。

私はこの事が、解つてから、甦ろ、柱に向ひ、壁に向つて、練修した方が、最初から精力が、内に溜んで却つて、好まじきことを、経験した。

延促は一念に由り。寛容は、之を寸心に係く。故に機、別なるものは、一日も千古より遙に、意、廣きものは、斗室も寛くして、兩間の如し。斗室の中、万慮都て捐つれば、甚の畫棟、雲を飛ばし、甚の珠簾、雨を捲くことを説かむ。一撤の後、聖眞自得すれば、唯素琴、月に横たへ、短笛、風に吟するを知るのみ。

如何なるかは聖諦第一義——廓然無聖、ガラリとして悟りも迷ひもない。……朕に對する者は誰ぞ。聖者ならずや。——不識——。人間修養の最高絶頂は、生死榮辱に臨んでも、殊更らしい感を持たない、無心の境地である。

正中心の鍛錬は、健康道の極致であり、天と我とを結合する、宗教的修養の堂奥である。而もこれによつて、運動練修法に活氣と、生命とを興へ、且つ又速度を、極端に利用して、其の効果を一層、顯著ならしむることが出来る。そしていくら、強い力を使つても、いくら敏速に、動作しても、過激の問題は、斷じて絶對に起らないのだ。

ア、若し正中心の裏に活くるならば、何の見所もない古柱、そして陰氣な濕っぽい土壁でも、其處には天光燦爛たる道の生命が宿つて居る。蠶繭は至穢なるも、變じて蠶となり、露を秋風に飲む。腐草は光なきも、化して螢となり、采を夏月に耀かす。

▽中心の冥想

フランス、ザビエは、佛蘭西の貴族に生れたが、深くキリストの大愛に感じて、東洋の傳道を思ひ立ち、身に襦袢

を纏ひ、繩を以て帶となし、渡航の船中では、水夫等と共に、甲板上に、起臥した。印度に於ては全く土人と同じ生活をなし、跣で街路を歩み、銅鑼を叩いて人々を集め、音聲喰れて、聞えざるに至るまで日々キリストの教へを説いた。

彼は曰く、「たごへ我が前に、一万回の死と、死の凡ての態を死べられむとも、我れは一人の靈魂を救はんが爲めには、誓つて是れを辭せざるべし」と。炎々たるこの大精神、彼れは果して、何れより得られる。彼れは毎朝未明に、

キリストの一生を冥想して、これを彼の魂の中に、活かしたのであつた。冥想中に、大なるインスピレーションに撲たれるや、彼れは叫んだ。「オ、主よ。此の世に於いては、さまでに喜びて、我を見給ふこと勿れ。我が心は、感謝と歡喜との爲めに、將に破裂しなむとす」と。

私の實兄川合山月も亦、キリストの心を學ぶべく、四十有餘年（明治二十三年八月、受洗してクリスチャンになりてより今日まで不離精修、一路直進しつゝある）、刻苦修行を續け來つたが、同じく基督の生涯を、冥想して、其の魂の化に歸した。其の著「耶穌基督」は、極めて短篇の中に、金玉の美文を以て、基督の一生を、叙述したものであつて、朗々として、吟誦するに足るべく、千變万化の基督の精神生命生涯は、躍々として、私共の眼前に、展開して來る。（東京神田尙文堂發行）、彼れは又、明治二十六年より、エツサンの講く所の、キリストの聖像を、机上に飾つて、日々其の神采に親しみたるため、流石数十年間の修養の力は、驚くべきものであつて、其の容貌が、全く基督の畫像に似るに至つた。私の兄に逢ふ凡ての人達は、何等、道を語るのを聞かれなくとも、其の震然たる慈容より發し來る徳と光とに、驚化せられて、期せずして、聖者の胸に接するの感激に、燃えることであらう。

私は端的に、腰腹中心を鍛へて、身體の改善強健を圖つただけで、何等精神修養を目的とした譯ではないが、練修が

進むに従つて、期せずして、身體の中心に、精神生命の中心が、溶和統一するや、爰に燦然たる、魂の輝を得ると共に天地の万象、悉く聖なる光明に包まれ、この光明精氣發して、古來幾多の聖賢君子の心體に、宿つたものであることを、實見悟得することが出来た。

爰に於てか、正中心を豎へて、以て聖賢君子英雄偉人の精神を、冥想することの、如何に力強かるべきかを思つて、私は時々、石斗欄干の中宵、樹下石上に正身端坐して、これを試みたのに、私の心は、虚然として、超我、絶我、滅我——直に其れ等偉大なる魂の中に、躍入することが出来て、心弦爲めに、高鳴るのを、覺えた。基督の熱愛、釋迦の聖雅、楠公の誠忠、孔明の上智、ナポレオンの壯大、羅蘭の俠勇、大石の義烈、峨山の練心、海舟の誠懇、ヒットラーの意氣——。冥想も亦、中心よりしなければ、其の眞意義を發揚することは出来ないものである。……靜夜の鐘聲を聴いては、夢中の夢を喚び醒まし、澄潭の月影を觀ては、身外の身を窺ひ見る。心體、整然、本來眞に歸すれば、唯ち寸功隻字なきも亦、自ら堂々、人ご做り、万物、居然として、皆其の陶冶に入らざるはなし。

だが——これは、只姿勢を正しく執つて、靜かに思念した場合のことであつて、若し夫れ強く、正中心力を、キチツと決めたならば、一切は忽如として、無限の空に歸し、聖凡、正邪、賢愚、美醜、凡ては悉く、明天、晴涼の光輝裡に、没了し去ることを、忘れてはならない。何となれば、正中心が完全に決つた時には、思考の機關は、全く杜絶遮斷せられて仕舞ふからである。只白明々たり。只恂々乎たり。只空々如たり。芸窓の中、正坐して雅かに蠅吟鴉噪を聴けば、恍として雲中の世界に在るが如く、方に靜裡の乾坤を知るべし。

▽中心神秘の寶庫には重い鐵扉

私は思つた。練修法其のものは、合理的に組織して、其れを實行することのみによつて、直に完全なる體育上の効果を收め得るものでなくてはならない。そして觀者の有無の如きは、もこより對照に置くべきものではない。けれども熱達して、洗練され、純化された場合には、其れは渾然として一大藝術となり、豐滿に發達した筋肉、階調のある美的動作さから、進り出る力には、數千の觀衆も亦、恍然として魅了されるものである。常に藝術的であるばかりでなく、恰も高山の頂に祀つた神社のやうな、聖純な、清楚な宗教的神彩を、帯ぶるものである。故に練修は、熱練に熱練を積んで、一舉一動、明確に正中心の根柢より出で、肉體で出來得る限り、美しい緊張の、連續でなければならぬのだ。儉人は、徒らに瀟散の浮華を逐ふ。天、即ち著意の中に就いて、其の魄を奪ふ。眞士は、外に徹むるの意なし。天、即ち、無心に就いて、中心の神秘を觸く。

私は、道場——北向きの陰氣な、薄暗い道場ではあるが、獨り、裸體となつて、其處へ立つ。直に神の聖殿に參入したやうで、四邊はもう、嚴かな燭火が、一杯、輝いて居るかのやうな、清感に撲たれる。把握未だ定まらざれば、宜しく跡を、塵塵に絶つべし。此の心をして、欲すべきを見ずして、亂れざらしめ、以て吾聖體を澄ます。操持既に堅ければ、又當に跡を、風塵に混すべし。此の心をして、欲すべきを見るも、亦亂れざらしめ以て吾圓鏡を養ふ。塵環に入つて紛亂を離脱せんと欲せば、當に幽所に正修して、須らく眞我の中心に歸趨すべし。私は何も考へない。何も巧まない。何も望まない。私は一切を捨て、全靈魂の力で、正中心に於て、力爭する。奮

開する。まさに熱血近るの戦ひだ。

さうして自分の肉體も精神も、武術的に、藝術的に、哲學的に、極度に忠使して、木ッ葉微塵に——粉微塵に、叩き壊して、ぶち壊して、一つの滓さへも、残さぬ迄に焼き盡して、泥濘の中へ投げ込んで、さうして其れを突破して、ぶち壊して行く時に、其處には驚嘆すべき偉大がある。絶大の感激さ、至妙なる陶醉さ、さうして豊麗な、純真な、至美な、體育、心育、藝術、宗教の新生命が躍動するのだ。

然り。私は只全身全力、全生命全靈魂を、正中心に打ち込んで、眞劍に自由に、傍若無人に、赤ン坊が地面太踏んで暴はれるやうに、動作するのみだ。型にも提はれない。方則にも拘らない。奔放自在、天馬空を行くが如きものだ。

だが、中心の基點さへ正しければ、心の欲する處に順へさも、規を越へず。キチンくも、型にも、方則にも、當て嵌つてゐる。そして瞬間、瞬間の動作毎に、魂の力は我が衷から、漲り溢れて、山と木と雲と宇宙とに、泌み込んで行く。身も心も、純白の光明に包まれて、清淨無垢、明徹透徹、此の世の塵は一つたに附いては居ない。

オ、——完全な正中心を得た瞬間の、あの絶美なる天地の姿はさうだ。何と云ふスバラシイ詩的神境だ！。全く超現世の清き輝かしさだ。清快壯絶——これを何と表現するか。形容に絶してゐる。只恍惚、驚嘆、讚美、忘我さ云ふより外はない。

宇宙神祕の至寶は、各人の正中心に、潜んで居る。無限の光明である。絶對の歡喜である。たが其處には、重い鐵の扉が閉ざされて居るんだ。い、加減のことでは、開かんど。一大鐵鎚を振り上げて、渾身の力を込めて、叩きく、大言響と共に、此の鐵扉が打ち碎かれて、ダイヤモンドの靈光燦然たる時、人は始めて眞の自己に活き、天地の眞の姿を

直視することが出来るのだ。まさに是れ父子不傳の妙であつて、進んで自ら得る者でなければ、子と雖も、與へることは出来ない。身を以て是の眞諦に悟入した事でなければ、想像することすらも、不可能事であらう。風化の瀟灑、雪月の空清、唯中心靜住の者、これが主となり、水木の榮枯、竹石の消長、獨り中心本我の者、その權を操る。

▽忽焉として變化す海上の風光

圓満無限の正中心力を、體得してから、私は練修時間を、益々劇減して、毎朝タツタ三四十秒時を費すのに過ぎない。而も體力は、年と共に増進し、頭腦は愈々明晰、暗記力は、益々強大、胃腸の消化力など、され程たか、分らぬと思ふ位、視力は健全、純白に揃つた齒は、大きな梅十の種子でも、ホリくごと、噛み砕くことが出来る。

しかのみならず、人體の、物理的中心を鍛へること、其處に、精神修養の妙諦が、潜んでゐる。正確な中心を、得るここによつて、精神状態は、機械の如くに、支配せらるゝものである。若し夫れ、ビシヤアツと、強大な中心力が生ずると、精神の中心は、自ら下つて、其の一點に集注し、一切の思念観想は、機械の運轉が中止したやうに、ヒタリと停止されて仕舞ふ。考へやうとしても、考へることは、許されない。思念しないのではない。思念することが。出来るなくなるのだ。明瞭なる無念無想の状態は、自ら現出される。此の時に於て、天地の万象は、燦然として輝き、樹も、草も、岩も、流れも、五色の彩光を放つて、眼に映する。唯これ一瞬間、一瞬にして榮光の世界と化する。オ、其の美しさ、淨土と云ひ、パラダイスと云ふさ雖も、是れ以上のものは、思はれない。

交通不便な爲めに、未だ世に知られない、伊豆東海岸、富戸、八幡野、赤澤の絶景を、活動寫眞に撮映すべく、昭和

二年十一月十六日、東京シネマの社長藤川君と、伊東の濱から、モーターボートに乗った。渡邊伊東警察署長と、副署長と、製絲の山口君も同行した。

此の日は、カラッソと氣持よく、晴れ渡つて、紺青の空には、一片の雲もなかつた。けれども、強風吹きすさんで、白波高く躍り、飛沫は霧の如くに飛んだ。

其の晩、八幡野小学校に於て、私の強健活動寫眞を、村の人達に見せることになつて居たので、私達は、さうして歸らなければならなかつたのである。

船が日蓮崎近くにさしかゝると、浪は益々荒れ狂つて、其の昔、日蓮上人が棄て置かれたさぶら岩、浪底深く包まれて、姿も見えない。モーターボートは、木の葉の如くに翻弄せられた、長城のやうな絶壁に、翠松が曲ねつた海岸の景色も、ユラリユラリと躍り跳て居るかのやう。他の人々は、みんな船底へ潜り込んで仕舞つた。

私は獨り、船間に腰かけて居つたが、フト心附いて、腰腹同方の正中心を、撃へた。すると、——突如……其の瞬間、海岸から、天城の連峰まで、バツと輝き渡つて、輝きそのもの、世界となつた。崖、其の上の松、楊梅、さては一切の草木、雑草、悉く、燦然たる光を放つた。其れ等の凡てが、五色の光彩に包まれた神々しさ。其の、落ち付き振つた穏かさ、静けさ。活々とした素晴らしい美しさ。マア！、何としたことであらう。私は只恍乎として、絶大の法悦裡に酔つた。

風は強い。浪は荒れる。船は躍る。岸は動く。……だが、何と云ふ静けさだ。何と云ふ穏かさだ。そして何と云ふ輝かしさだ。涅槃城裡の妙さは、まさに此の如きものであるか。——而も其れは、全くの機械的であつた。機械的に、最

も正しい中心の姿を執つた丈けである。何等、冥想、觀念の力に頼らないのである。（私は冥想、觀念を非するもの極めて良いことである。只私のこの場合は、正中心の強い力によつて、機械的に光明界の現前する事實を述べたのに過ぎない。）

▽三疊の一室、聖光に満つ

伊東縣取間の、縣道路線に就いて多年の間、激烈なる争奪が行はれ、其間知事を送り迎へること、五代に及んだ。私は、私の家が、此の縣道のために、最大の利益と、便利を受くべき位置に、あつたにも拘らず、將來伊豆東海岸

開發の爲めに、自己の便益は、これを弊履の如くに擲うち去り、最も公明正大な、具體的解決案を、八幡野小学校で、多數村民が集合した席上、突如として發表した。各町村關係、各部落關係、更に政黨關係等もあつて、必ず何方からか

悪み恨まれることになるので、隣近の有力者は悉く泣眼を守つて、一人として、確乎たる腹案を、發表する者が、無かつたのだ。

崎原線だこ、私の庭前の蜜柑畑の直ぐ下へ来て、マット私の所有地を通ることになるのを、未だ知られない、海岸の絶勝地を開き、且つ村内四部落を、悉く縣道に接せしむる意味から、私は海岸線を主張したのである。私の公明な、且つ機械的精神を現はした提案の前には、まさか反對者はあるまいと、自惚れたのは、また私が若かつたのだ。

區々たる目前の私利私念に捉はれた、反對部落民は、陰險醜劣なる小人輩に煽動せられて、餓虎の如くに暴はれ出した。さうして、私の意見に賛成した村長、村會議員、區長、區評議員等を威嚇した。丁度、昔の白洲へ、罪人を据えたやうに、其れ等の人々を引きずり出して、多勢を恃んで、侮辱し、脅迫し、立憲治下にあるまじき非道を敢てした。

其れ等の人々の家族は、猛烈な壓迫に堪え兼ね、泣き叫んで、苦衷を訴え、其の子、其の夫、其の父に、主張を講ずやう、強請した。其れが爲めに、恨みを飲んで、彼等の前に、首を垂れ、無念の調印をした役員も少くはなかつた。私のことは、馬鹿の、附拔けの、叩き殺せの、年老から、婦人から、小供に至るまで、悪言罵倒の限りを盡した。只私の強大な方に恐れをなして、私の家だけは、一回も押し寄せては來なかつた。

大正十四年六月十日、今又、多勢、役場へ押しかけて、怒號して居ると、聞いた私、自ら、公義によつて、終始せり。雖も、自分が意見を發表したことによつて、かくも迷惑を、世に及ぼすことの責任を思ひ、私は獨り、薄暗い三疊の書齋に退き、机に向つて、肅然として端坐した。

さうして、何心なく、キチツと正中心を整へた所が——何事ぞ……身邊に蟻集した、批難、攻撃、罵詈、譏諷の聲、怒顔、鐵拳、鐵、鐵、鐵、竹槍の影は、一陣の清風に、吹き飛ばはれた塵埃の如く、脚下に飛散し去り、「月すみて、谷にぞ雲は沈むる。嶺ふき拂ふ風にしかれて」の、別天地が現出した。と同時に陰氣な、濕つぽい、三疊の一室は、燦然として、光り輝いた。「凡て、疲れたる者、重荷を負へる者は、我に來れ。我れ汝等を、休ません」。力の國は裏に在る。安樂の法門は、我が正中心に在る。

此の身は恰も、明朗々たるダイヤモンドの塔中、神聖不可侵裡に、安住する清快さを覺えた。古語云ふ。熱は必ずしも除かず。而も此の熱惱を除けば、身は常に、清涼臺上にあらむ。窮は遣るべからず。而も此の窮愁を遣れば、心は常に、安樂高中に居らむ。誠に然り。

私は、正中心の姿勢を以て、隨時、隨所、何時でも機械的に精神を支配し、瞬時にして、皎々たる清明界を、啓き得

るものであることを、一層、明かに、體得することが出來た。私は、私を竹槍で突き刺して仕舞へよ云つた、首謀者の一人に向つて「君達は、俺の横ッ腹へ竹槍をぶち込むよ云つたさうだが、俺の體は、五本や六本の竹槍では、利きはせんぞ」と笑ひながら、抑拵つてやつた。勢ひの越く所、時には流血の慘事まで、演出したこともあつた。

而も、惡口雜言の云ひ放題である、彼等の、群集せる面影を、私は獨り、昂々然として、邁歩した。又其の騒ぎの真最中、暗夜、山を下りて、小供等を連れ、小學校へ活動寫眞を、見せに行つたことも、屢々である。時には暗闇に桑畑の中から、石でも投げられると、危ないから、夜歩くのは止めた方がよいと、注意されたことがあつたけれども、そんなことには私は、一顧たもしなかつた。私は毛頭の不安も恐怖も、感じたことはなかつた。のみならず、青天の意氣は常に腰腹の正中心に躍り、鐵腕は何時でも、隆々として唸りを生ずるの感があつた。嗚呼是れ、何等の天龍なるぞや。正中心を磨けば、自ら公義を愛するの念を増し、體の強くなるよりも以上に、精神力が、旺になるものだ。

▽踏む處、觸るゝ處、花のトンネル

丈夫、冲天の氣、須らく隨所に王たるべきで、かりそめにも、環境にのみ、支配せらるゝが如きことが、あつてはならない。交通最も不便な僻村に、多年、黙々として、語る友もなく、只管、己の衷に、眞世界を開拓することに、努力しつゝ、ありさは云へ、時に十餘年振り、青山會館や、朝日講堂の檯上に立たせられても、喬木鬱々たる谷間にあつて獨り、竹籬の修繕をして居る時ささして變つた感じも、覺へない。

昭和四年、親戚の文學士某が、或る事業に關係して、幾多の民事刑事の、問題を惹起し、戦慄すべき、死地に陥つたのを、救済すべく上京し、凡てを、一身に引き受けて、八方に當り、無類の難件を、處置した時でも、私は絶へず、透明なる、水晶宮に住するの輝きを以て、終始することが、出来た。進退、谷まるの窮地にありながら、中心の力を、鍛へるこゝによつて、小石川學生修道院の地味な庭木は、燦々として光り輝いた。

人里遠き林の中で、獨り、薪を取つて居るこゝ、バラリと下つた、見すばらしい杉の梢は、樂しげに、私に話しかける私は覺えず、頭を寄せ、手を耳に當て、天來、無聲の聲を聴く。

森厳な暗夜、獨り山に佇んで、紺碧の空を仰ぐこゝ、沈黙した衆星は、鮮やかな美光を投げて、此の身はまるでダイヤモンドの雲に浴するが如く、恍然として、時空を絶して、永遠の生命と、親しむのである。

鬱陶しい、梅雨の節、朽ち崩れた、穢い、水槽のそばに立つても、私には、其處に、尙ほ澄々たる生命力が、躍如たるを感得して、清快の氣は、何時でも胸に満ち溢れる。……而も是れは、自ら造つた筋肉——而も是れは、自ら強くした内臓……。而も是れは、自ら養つた力——而して期せずして、更に是の新世界を、附與せられむこゝは……。

此の心、常に看得て圓滿ならば、天下自ら絶障の世界なからむ。此の心常に放ち得て、寛平ならば、天下自ら、險側の人情なからむ。——足の踏む處、手の觸る、處、其處には唯、満開の花のトンネル、我が心は燃える。我が筋肉は躍る。……俺は本當に、活きた生命の機械たなア——。

▽生命の瀑布

健康であるのが、當り前だ。自然に従ふ山野の鳥獸は、等しく生物であるけれども、醫者も、病院もありませんぞ。万物の靈長と誇る人間が、僅に健康を保つがために、やれ何の藥、やれ何の器械、やれ何の滋養物、やれ何の靈術……

マア何と云ふ煩はいしこた。動物には、醫藥が無いと云ふ非文明を憐む前に當つて、彼等には、其の必要がないと云ふ事實の前に、人間よ、汝の誇りを擲つて、恭しく跪け。彼等に跪くのではない。其の事實の前に跪くのだ。さうして其處に、尊貴なる大教訓を汲まねはならぬ。彼等から、教へを受けるこゝ、云ふのではない。彼等をして、しかあらしむる、大自然の眞理の聲を、聴けと云ふのだ。

人若し、正しき中心を得るならば、人體と引力との關係は、正しくなり、解剖的には、各機關の位置が正しくなる。さうするこゝ、生理的に、各機關の機能は、自ら正しく行はれる。それに、中心力を起して、正しき作用が、更に強く働くやうにし、尙ほ其の中心の一點に、全精神、全靈魂を、集中、合致、統一せしめたならば、其處に、澎湃たる中心生命力は、生ずるのである。是れ完全なる健康の最絶頂……。

中心に正坐して、友照する者は、亦に嘲れて、皆藥石となる。中心を外走して、動念せは、即ち是れ矛盾、一は以て衆善の道を闢き、一は以て諸惡の源を發し、相去ること霄壤なり。

天、我を海くするに、福を以てすれば、吾、吾中心を正うして以て之を返す。天、我を勞するに、形を以てすれば吾中心を高うして、以て之を補ふ。天、我を厄するに遇を以てすれば、吾、吾中心をせらしめて、以て之を通ぜしむ。

ア、友よ。迷妄を捨て、毅然、眼を開いて、己に歸り、眞剣に自己の本質、本體其のものを、鍛錬改造せよ。然らば自然の凡ては、——日光、空氣、土、水……一切のものは、來つて御身の靈肉の、眞の糧となるであらう。

昭和七年七月二十七日、朝三時半起床、獨り道場に立つて、魂を打ち込んで、正中心鍛冶の練習をした。其の時私は腰と腹とが、キユツと、絶妙なる緊張を來して、重心の一點から、生命力が、瀑布の如く、白い絹糸の繩の如くに、兩足支撐底面の中央部に向つて、垂直に走るのを、明かに感得した。其の力の微妙なる移動状態が、私には、書を見るやうに、鮮かに分つた。力の量は、明かに數字を以て、現はすことが出來た。即ち、力線の前後左右は、悉く十の力に充たされて居つて、更に濃淡厚薄の差を持つて居らない。又其の線は地平に對して、正しく垂直の形を執つて居つた。操練の一擡一動毎に、生理機能が中心から、力強く全身に波及する。私の心身は、自然の法則の依つて立つ處の原理と、完全に一致冥合した。

觀よ。表に輝くダイヤモンドの世界、其の光の美しき、神々しき。これぞ活ける生命の輝、——オ、宇宙生命の囁きが聞へる。万有を超越し、一切を包含する大生命の、力強きことよ。

私の胸はびえ渡つた。私の眼は輝いた。薄暗い道場内に漂ふ生命の力は、ジューツと私の體にしみ込んで來た。オ、私こそは、まさしく此の地上に於ける、至福至幸の者ならずや。この愚かの身が、何が爲めにか、かくも深き皇天の御恵に浴するのであらうぞ。堪え難き眞の歡喜は、中心から湧き溢れて來た。沸、々、々、々、まるで泉のやうに……。

▽六貫目の鐵棒、藁の如し

中心力の妙味に就いて、述べたら、盡くる所を知らない。いくら書いても、書き足りない。何せよ。妙用無限ですからねえ——。たがも一つ面白いことを、御話して置きたいと思ふ。其れは物の重さが、失はれることよふことである。

と云ふと、如何にも、非科學的な言葉に聞へるけれども、其れは實際上の實感實狀を、述べたまふであり、そして又何の不思議もないことである。諸君は濡りに、奇蹟に解ふの弊風を、掃めねばならぬ。でないに、熟練の結果、到達した妙機を、物語ることが出來ないのだ。

重さ六貫目もある、鐵のレールを持つて、胸の處まで、持ち上げる動作を、遣つて見た所が、普通の上げ方である。前腕筋と上膊二頭筋とは、可成りの緊張をする。其れは、筋肉組織の上から云つて、當然のことである。そして三四十回もやると、腕は相當の疲勞を感じて來る。

然るにさうだ。中心力だけで、同じ鐵棒を、同じ動作で持ち上げると云ふと、中心力だけが、グツ／＼と、腹の中で動くことは、分るが、……さうしたことだ。其れ程重い鐵棒が、スツカリ重さが無くなつて仕舞つて、マルで、腕を持つて、上下して居るかのやうだ。前腕筋も、上膊二頭筋も、別に緊張しない。何回やつても疲れない。何も持たずに、腕を上下して居るのさ、殆ど變りはない。これこそ、眞に輕快と云ふべきであらう。たが是れさて別に不思議なことは更に無いのだ。支點たる中心に、重量が平均に落ちるから、體に重さを感じないのである。強大恐るべき原子力が平均して無力状態にあるのさ、同一現象に過ぎない。

頭は益々輕くなる。胸は空く。體は空へでも、舞ひ上るやうな氣分だ。重い物を持つて居つて、心身ともに、コンナ軽さであることよふことは、——何と諸君、面白いことではないか。然るに雜念が一寸でも、頭に浮ぶと、鐵棒は直ぐに重くなつて來る。中心虛無の力の至妙なることを思へ。

竹影、階を掃らへさも、塵動かす。月輪、沼を穿てさも、水に痕なし。水流急に任せて、境常に靜かに、花落つる類

りなりと雖も、意自ら閑かなり。人若し此の境地に立たば、身心、何等の自在輕快なるぞ。

▽猛烈極まる練修直後、脈搏不變

私は至妙なる中心虚無の力を、體得してから、健康法なき騒ぎ廻るこの低劣を感じ、強力なこの價値の淺薄なることを、覺へざるを得なかつた許りでなく、名詩名畫に對する興趣さへも、失つて仕舞つた。其處に、輝く我を、活きた自然さを、見出したからである。

中心力は、一切を排除し、一切を包容する、最も充實した力であるけれども、其れは又、一切を放棄し、一切を超越する、無想の力である。寒燈、焰無く、徹夜、温無きは、總て是れ、光景を掃蕩す。身は腐木の如く、心は死灰に似たるは、虚空に墮在するを免れず。然り。真空は空にあらず。執相は眞に非ず。破相も亦眞に非ず。然らばさうするや。問ふ。世尊如何にか、發付する。在世出世、欲に徇ふは是れ苦、欲を絶つも亦苦、懸け。吾儕が善く自ら、修持するの道を、只是れ前念滯らす。後念迎へず。但た、現時的の隨緣を將つて、打發し得去れば、則ち虚然として、無有に入らむ。無有に出で、纔に天地の眞機に觸る。無有は是れ、色則是空、空則是色、中心力は即ち、無有の力である。

中心から出る力は、單なる機械的の體力ではなくして、其れには、生命と光と道とが、織り込まれてある。剛くて柔かた。重くて軽い。そして輝きながら、潤つて居る。……正に是れ力の最絶妙——。

是れは、完全なる姿勢によつて起る、腰腹同量の力であつて、此の雜念があつても、駄目だ。否、正しい力が出來た場合には、一切思考の機關は、ヒタリと停つて仕舞ふ。精神作用は忽ちとして停止される。清明である。靜穩である。

聖美である。是れを何と、譬へやうか。日蝕の時、太陽面に見える、奔騰數万里に亘る紅端と云はうか。或は、富士山嶺の夕暮、七色の雲の中に閃く、電光と云はうか。

單なる、乾燥無味な、機械的の力ではない。體的精神力だ。體的生命力だ。そして、非常に強い、輝いた力である。若し夫れ、身體の中心に、精神の中心が、ヒタリと完全に、合一した瞬間に於ては、一寸厚味の道場の板も、足の形に踏み抜け、周り一尺有餘の根太も、踵の形に碎けることがある程、強大猛烈なものである。

そんな酷い力で、生命を籠めて、遣ははる程、頭腦は却つて、澄み渡り、眼光は益々、冴えて来る。そして私の呼吸は、一層靜かになり、練修が終つて直ぐに、私は極めて穩かな、……其れまで、火鉢の前に坐つて、低聲に話して居つたのと、全く同一の靜かな語調で、更に細かな説明を加へることは、私の講演及び實演を實見した人達の、普く知る處である。

坐臥進退、交々變する、各種練修法數十種——呼吸運動、内臟操練法、各部主要筋肉鍛鍊法、氣合應用練修法、椅子運動法、中心力拔刀術迄、強猛激烈、火の出るやうな練修をやり終つた直ぐ後、……瞬時も休まずに直ぐに、脈搏を見ても、練修前と、チツとも變りはない。靜かに、穩かに、——粟粟の花を渡る、微風の閑けさだ。

曾て數年前、東京本郷の平野胃腸病院長、平野博士が、私の家へ、遊びに来られた時、私は強烈な氣合應用強健術運動法を始め、全練修法を、遣つて見せたことがある。

流石はお醫者様である。運動開始前に、先づ私の脈搏を診られた。其れから私は直に、道場も廻るやうな、眼にも止まらぬ劇烈な練修をやつて、直ぐに又脈搏を診て貰つた。けれども、運動前と少しも、變つては居らぬ。靜かなく

脈の搏ち方であつたので、非常に驚いて居られた。たが是れさて、不思議なことは更でない。腰腹中心の正しい姿勢で内臓機關は悉く、鐵桶内に納められたるが如きものだからである。

其の時、博士は私に向つて、五十歳になつても體が衰へないやうならば、詳しく調べさせて貰つて、其の研究を、發表したいものだ、云はれたが私は本年（昭和十一年）五十四歳、衰へる所か、肉體精神共に益々強くなりつゝある。又曾て、帝大醫科大學教授、田宮醫學博士に、御目にかゝつた時、博士は以前、私の著書を読んだことがあるさて、私が腕に力を入れた場合に於ける、筋肉緊張の音響を、聽音器を出して、圖かれた。私も借りて、緊張時に於ける、自分の腕の音響を聞いた。風に吹る電線のやうな、音がして居つた。

以上の實際に於て、動靜一致の眞味が御解りのこと、思ふ。即ち、心身ともに、強烈に働いて、而も、一面、心身ともに、斯くの如く靜かなり。麓麓高嶺、青山綠水の雲烟を存吐するを見て、乾坤の自在なるを識り、竹樹扶疎、乳燕鳴鳩の時序を送迎するに任せて、物我の兩つながら、忘るゝを知る。

▽中心でやれば二倍三倍の仕事

けれども尙ほ進んで自然の妙體と、合一せんことを求むる私は、此の僅、數十秒時の練修さへも、特別の方法に屬するものは、一切是れを放棄したいと、望んで居る。

一切を捨て、さうするの？——労働するのだ。中心力を基點として、労働するのだ。だから、筋肉労働は、最も良い。精神労働の場合は……姿勢を正しくし、精神を落ち着けて、やれば良いのだ。中心を基礎とした仕事の、輝かし

ことよ。さうして其の能率の、優秀なことよ。

私は、午後三時頃に、一抱へもある、大きな木を、切り倒して、鋸で引いて、薪割で割つて、日の入るまでには、薪にして、山のやうに、積み上げたことがある。此れを見た袖人はみんな、儼然に二日分の、仕事だと言つて居つた。

伊豆の山々に、自然に生えて居る山芋は、精気が強く、質が細かくて、非常に美味しいものであるが、下へなる程太くなつて居るから、良い處を取るには、さうしても五六尺は、掘らなければならぬ。それもシャベルで、細い穴を掘るのだから、仲々容易なことではない。然るに私は、庭や畑の隅なごの平な處で、午後から始めて、日暮れまでに、十四本掘り取つたことがある。後で澤山の深い穴を見て、自分ながら、驚いた程である。

石を運んでも、木を切つても、人の二倍三倍の仕事はするので、雇人を頼んだ時には、私は一緒に、働かないことにして居る。仕事に非常な差が出来て、自然、無理な働きを強ひる結果に、なり易いから。或る時、塙所の違つた處で、同じ仕事をして、私の方が、三倍以上のことを、やつて居るのを、暮れ方見た其の雇人が、如何にも困つた様子をしたので、其れからは私は、雇人とは、一緒に仕事をしないことにして居る。

労働も中心を基礎として始めて、完全なる能率を擧げることが出来ると共に、大なる樂みと壯快さを、感ずることが出来るのだ。中心應用、これこそ労働を、聖化するものである。労働の聖快を知らぬ者は、天が人間に與へられた所の、大なる恩寵の一つを知らざる、氣の毒な人達と、云はねばならぬ。

労働——楽しい労働、尊い労働、人間に澤山の骨や、澤山の筋肉があるのは身體を千態万様に、働かせんがためだ。労働は、解剖生理の天理に合するものだ。鋸を持つて、畑を耕し、鋸を振つて、薪を切り、竹を擔いで、水樋の工事を

やる。石を運んで道を作る。……絞る汗、流る、汗、オ、息き壯快な汗よ。まさに是れ溼潤たる健康の雫ならずや！。

▽天真——其のまゝの世界

人間の作つた特種の方法——それが如何に、理論的優越なものであり、實際上有効なものであるにもせよ。——そんな特種の方法によらずして、體其のまゝで、仕事それ自身で、即ち、經濟的、生産的の活動をなしつゝ、直に、眞健康の奥殿に、參する妙諦を、私は始めて、會得することが、出來た。私が年來の疑問は解かれ、多年尋んで、得られざりし、天真の世界は、啓かれた。

天真の世界とは何だ。其のまゝの世界、日光輝き、草木繁茂し、鳥歌ひ、花笑ふ、只其のまゝの、此の世界である。其のまゝの世界に、其のまゝの體で、働きつゝ、労働しつゝ、其の燦然たる光輝を浴び、其處に、沸々たる、無限の靈泉を、掬むのである。

歡喜の世界、光明の世界、不動の世界、安住の世界、生命の世界だ。聖人の道とは、何ぞ。政治の妙用とは、何ぞ。倫理の要諦とは、何ぞ。各人をして、各、此の眞世界を持たしめ、此の聖境を、樂しむことを、得せしむるにある。其のまゝの世界に、其のまゝの身を以て働いて、其のまゝ、肉となり、血となり、靈となり、光となるのが、天真の大道だ。私は確信する。心身ともに、眞に健全の者にあらざれば、労働の眞味は、解せられない。労働の眞體は、宗教の本義と、一致せねばならぬ。

健康上欠陥ある中は、特種の鍛錬修養も、必要であるが、やがては、凡てをかなぐり捨て、原則も、確信も、體得も

悟道も、木ッ葉微塵に、ぶち碎いて、瀑の中に叩き込んで此のまゝの世界に、此の體だけを以て、溢るゝ、幸福と、歡喜と、光明の恩寵を汲むの、眞自由境に、活きねばならぬのだ。

即ち、我が求むべきものは、我にあり。我が衷にあり。我が中心の世界にあり。然り、我が腰腹中心の世界、……其處に、神聖不可侵の聖境あり。ダイヤモンドの神殿は、靈光燦然として、聳峙し、無限の生命、此處に動き、無上の法悦、これを繞る。

誇る處もなく、恐る、處もない。凡ては、輝き、凡ては、樂しく、凡ては強く、凡ては、安らかに、さうして、凡ては、微笑む。嗚呼、快なるかな、靈肉合一の妙諦、之れを收むれば、腰腹の中心に藏れ、之れを披らければ、天地宇宙を包羅す。

都門を去つてから二十年、殆ど世の一切を絶つて、伊豆東海岸、八幡野の一确、溪谷、綠樹の間に、埋もれながら、此の身を以て只管、澄徹せる中心界を、啓くべく、鈍才に擧つて、私は、日夕、其の道に勵しみつゝある。

△盡く十方世界これ一顆の明珠

曾て私が、二荒伯及び令夫人と、伊豆伊東町最靈寺のほこりを、散歩した時、門前の木板に、澁文が掲げてあるので何たらうかど、近寄つて見たら、普勸坐禪儀の一節であつた。曰く、「諸緣を放捨し、万事を放擲し、善惡を思はず、是非に管すること勿れ。心意識の運轉を停め、念想觀の測量を廢め、作佛を圖ること勿れ」。

私はこれを読んで、私の意見を述べた。曰く、「道元禪師は、既に其の境地に、到達して居られるので、前後の順序

なごに、關まはず、其の境涯を、述べられて居るが、其の道程を、分解的に云ふと、坐禪辨道によつて、正中心が定まること、心意識の運轉は、機械を繰るが如くに、ピタリと停まり、念想觀の測量は、自ら休止せらるゝのであつて、其の結果又自然に、諸縁を離ち、万事を超越し、善惡是非を、截斷し去るの清明境に躍出し、作佛を圖らざるも、其處に慈悲圓滿なる、阿彌陀如來の出現を、見るのである。

先づ正中心を得て、心意識の運轉を停め、念相觀の測量を、廢めるのでなければ、諸縁を放捨せんこと、欲するも能はず。善惡を思はざらんこと、欲するも能はず。是非に管せざらんこと欲するも能はず。

前者を得れば、後者は自ら得られる。前者を得ざれば後者は得んとするも、得べからず」云々。

私は、「運轉を停め、測量を廢め」の句によつて、自分の經驗に徴し、云ふまでもなく道元禪師は、五十年六十年の刻苦修業により、禪の中心力で、機械の如くに、精神を支配し、神經作用並びに、思考の機關を、停止せられたものであることを、想察することが出来た。然りしすれば、其の際、天地の一切は、光明に輝く境地を、書かれた文章が、師の澤山の著述の中の、何れかに無ければならないと、思つて居つた。

昭和六年十月、東京學生修道院での講演に於て、遠羅天金や、夜船閑話や、十牛解や、十玄談や、寶光明經や、涅槃經や、無量壽經や、阿含經などの名句で、暗記して居るものを、ペラ／＼と引用するので、筆記の任に當つた學生諸君が、参考接用の爲めに、高僧名著全集を購入せられた。

私は道元禪師篇を借りて、一通り讀んで見た處が……あつた。あつた。果して、私の想像した通りのものが、正法眼藏辨道話の章にあつた。「大師釋尊、まさしく得道の妙術を、正傳し、また三世の如來さまにも、坐禪より得道せり。こ

の故に正門なることを出傳えたるなり。しかのみにあらず西天東地の諸祖みな、坐禪より得道せるなり。參見智識の始めより、更だ燒香禮拜念佛修懺看經を用ひす。但し打坐して身心脱落することを得よ。三昧に端坐する時、遍法界みな佛印となり、盡く虚空悉く、悟りとなる。一時に心身明淨にして大解脱地を證し、本來面目現す。是の化道の及ぶ處の草木土地共に、大光明を放ち、深妙法を説くこと、極まることなし。盡く十方世界、是れ一類の明珠なり」と。心身明淨にして、草木土地共に、大光明を放ち、天地宇宙の一切、悉く透き徹つた明玉たご云々。這個の境涯、説き得て遺憾なしである。更に、「草木諸壁は、よく凡聖含靈の爲めに、宣揚す」と云つて、草や木や牆や壁までも、巨響隨るの神界を、直觀せられて居る。

▽是をしも病的現象と斷じ得る乎

然るに、此の如き宗教家の、一切の文章は、たゞ、壯快感を説明する爲めの、誇張的形容語に過ぎないこと、速断し去つた、唯物論者があつた。イヤ其れは單なる神學的、幻影妄想であること、判定した生理學者もあつた。

前者の如く、造作なく論斷し去る者に對しては、何等辯明の餘地が、殘されて居らぬと共に、其の必要も、更に無い譯である。

他面、神學的幻影なりとする、論者に對しては、私は私の經驗上から、一言せざるを得ない。由來、神學的幻影を起すのは、神經系統に疾患を持つ者に、現はるゝ處の現象であつて、身體頭強、神經健全なる者にあつては、さる現象は皆無である。

私も亦、病氣ばかりして瘦せこけて居つた頃には、「月見れば千々にものこそ」、そぞろ悲しく、情熱の詩人ヘルチーのやうに、「月よさらば汝のペールを取り去り、彼の女が泣くが如くに、下界に泣け」と、メランコリックの叫びを上げたが、心身を鍛練して、頑健なるに從つて、其れ等の妄想は朝日を迎ふる霜柱の如くに、消え去つて仕舞つた。そして物事を何でも、科学的に、理論的に、現時的に、観るやうになつた。

月の面積は、地球の其れの十三分の一、直徑は四分の一、體積は五十分の一、重さは八十一分の一、地球との距離は二十五万マイル、光線の速さは、一秒三分一で届く。

天文學者ジョージダルウインの説によると、月は今から約五千四百万年の昔太平洋の部分から飛び出して、あつて今、空に懸つて居るんだ……いや待て。其の説はチト可笑しいぞ。月の容積と太平洋の全水量が同じだから、地球表面が既に固くなつてから、自轉による遠心力で、太平洋大の塊が、地球の引力をぶち切つて、飛び出したらふかしら、月が地球から、分れたものさすれば、矢張り、星雲時代の、ここでなければなるまい。して見れば其の痕跡が太平洋の四みさなつて、残されてゐる理由はない筈だ。

年代にした處が、五千四百万年なんて云ふ、僅なものではなくして、何億万年か前の、遠い、劫初の、出來事ではなればならないなぞ、潜越な批判まで、浮んで來る。月の觀察もかうなつては、殺風景極まるものだ。

體が頑丈になつたら、私は實際、一時はさうまで、非文學的、非藝術的な、人間になつて、涙なき法科や、冷やかな商科の講義を聴いたり、軍隊教練で、射撃や、銃劍術を習ひ、敵を打ち殺す方法を、研究したりすることこそ、却つて適はしきまでの、者となつて仕舞つた。

然るに其れから、一層鍛えに鍛えて、私の體格は益々良くなり、私の體力は益々増進し、大正十二年、更に完全なる正中心力を、會得してから、却つて忽然として、天地万象の一切は、美化したのだ。是の事實を、何と見る。これをしても病的現象だと、斷じ去る勇氣が、果してあるであらうか。

だから其れは神經的疾患による、幻影妄想ではなくして、却つて完全なる健康が、齎した處の、生理的現象に外ならぬのだ。即ち知る。健全なる天地の美を、感得しないのは、一面其の自身、完全なる健康を、持つて居らぬこと云ふことを、立證するものであることを――。

完全なる正中心が、ビタリと決まると、體の感じは忽然として、變つて仕舞ふ。樂な伸びくした、愉快なまりなきものである。精神も亦、恍然として、而も活々として、宇宙神秘の中に、溶け込んで行く。

▽悟前悟後の善惡

正しい正中心力を起した場合、物理的には、強烈恐るべき力となつて、現れるが、其の時の精神状態は、機械的に清明澄徹となり、恰も、嚴冬の深夜、寒月、雪の富括を照すが如き、趣がある。

此の心理状態は、物理的に機械的に、惹起せらるゝものであるから、境遇の順逆等には、何等影響されることはないのだ。

其れは、中心に於て、統一された力が、腰に於ける。髓骨神經叢より、脊髓神經を通じて、大脳前頭葉の智能中樞に傳はり、判斷、辨識、思考の作用が停止され、其れが最も、自然なる特機的白紙状態に、置かれるからである。

即ち其處に、一切の苦樂、善惡、思考、觀念を離脱し去つて、忽ちして、清明なる別天地が展開せらるゝのである。而して、時空を絶したる、無限の大生命と、相連らなるに至るのである。

まさに是れ、至上の聖快、最高の恩寵、天上天下、これに優る幸福なく、これに比すべきの榮冠なし。私はこの絶大なる天寵に浴する時、感謝、懽喜、感激の涙が、双眸に溢れ来るのを、禁めることが出来ない。

洪川和尚が「悟りの前の善惡は、善惡ともに惡なり。悟りの後の善惡は、善惡共に善なり」と云つたのは、思ふに此の境地を指したのではあるまいか。悟は即ち虛である。虚なれば即ち善も無く、惡もない。只空、只虛、只眞である。洪川和尚の此の語に就いて、私の兄川合山月が、曾て、新井奥達師に、其の意義を訊ねた處が、左の如き御返事があった。

「お尋ねの語に就きては、別に私の意見無之候。佛家者流の語言は、概ね皆、然るものにはあらざるか。若し此の語に就き、私をして問はしむれば、悟りて後さ云ふ悟りとは何を悟れるものなるや。如何にして、善惡共に、善なるものか。其の次第方法如何。和尚如何に、其の變化を、一に歸するや。其の言虛か。實か。眞か。偽か。空言にして、靈體の存するなきものか。悟らぬ前の善惡は、善惡共に惡なりとは、根源善惡なしと云ふの意味に、歸着して、現在の殺人をも、教人と認むると同時に、殺人をも、殺人なりと、看做す心成なりや。如何。篤と御存知の通り、私はクライストの奴隸にして、其の奴隸を以て、永久に甘んずる者にて御座候。故に吾主クライストの生命に屬する限りは、如何なる言語動靜さ雖も、私の同情賛成する處に御座候。若し、唯一父母たる眞神と、一體なるクライストの道に外なるものならば、何事と雖も、私其の奴隸の生命として、些かも妥協する能はず候。右、某和尚の心事が、主クライストの道に、

根本に於て、關係如何なるものに候哉」と

新井奥達師の言は、神の道を、忠實に歩まんとする者の心事として、誠に立派なものであると、云ふの外はない。私は、滿腔の敬意を以て、これを拜讀した。

だが、洪川和尚の所謂、悟前の善惡は、執着より出で、作爲より出で、其の根本、純眞ならず。故に是れを惡と云ひ悟後の善惡は無執着より出で、清明より出で、其の本源、善惡を超越せり。故に是れを善と云つたのではあるまいか。

▽幽玄の彼方より

昭和八年二月四日夜半二時、私は、黙讀しつゝあつたフリードリッヒ、リストの、「國民經濟組織論」の巻を閉ぢて獨り、裏庭へ出た。後年鐵血宰相ビスマルクをして、「獨逸の振興策は、此れに據るの外にはない」とまで、讃嘆せしめた、經世の大論策も、一人も顧みるものなく、失望落膽の餘り、南獨逸の山中に入つて終にピストル自殺を、遂けて仕舞つた、謙倅な著者の上を想ふて、私の胸中は、無限の感慨に鎮されて居つた。

空は、晴れ渡つて居るが、時々凍風が、ビユウくと、耳を掠める。だが、空氣の味は、嚴寒が最も美味しい。水の味が、冬は冷たくて、一番旨いやうに――

暗黒は重く、山野を流れて、宇宙の夜は軟かである。黙々たる衆星は、黄金の碎片をバラ撒きながら、私の魂に迫り無人の山中、四邊間寂として地球の足音も、微に響く。北天から南天へ……大銀河は乳を流した夢のやうに横たはる。悠久の空間に、無限を物語るミルクウェイよ。其の距離實に、一万六千光年里、今、私の眼に入る姿は、大氷河時代に

其處を飛び出した光素の微粒子ならずや。

暗中更に黒く、轟き出されたのは鬱々として茂つてゐる、青木、樺、樺、樺、松、樺等の大木である。脚下には漁村の燈火が點々として、遠く々に散在して居る。斷崖を打つて、崩落する怒濤の響きが、風の間にしく聞える。

車南の空には、標準一等星の十三倍、恒星中最大の光輝を有し古代エジプトに於て、宗教的儀禮のことに、崇められた大犬座の巨星シリウスが、一種の威風力を以て、鎮座して居る。

エリダンの銀河を隔たつて、バビロンの昔嘗時の人民に拜跪された、小犬座の首星プロシオンが、一等星の光で、無限の奥に、瞬いて居る。

更に、エチオピア國王セフェウス、王妃カシオペア、王女アンドロメダ、英雄ヘルセウス、神鳥ベガソス——オ、其れ等星座の姿に、ギリシヤ神話の繪巻物は、満天に展開せられて居る。

昭和四年一月六日の夜、來泊された二荒伯と横子令夫人とに、庭前に立つて之れを指し、「アノW字をして居るのがカシオペアの腰掛けて居る椅子、丁度奥様の御椅子に宜しいでせう」と、戯談を云つたことを、私は想起した。

ア、莊麗なる談、オリオン座大星雲。鏡を着、櫛を持ち、大刀を振り翳した雄姿よ。其のフイゲンス境界の中央部は、原始星床の門口であるのか。其の空際から、鳥宇宙の深みが、隠現して居る。眞珠の輝きを感つた光の殿堂が、宇宙の奥の奥にあるのだ。

何ぞ！……、幽玄の彼方に、蕪惑的な神曲が、溶けるが如き旋律を、漂はして——居るではないか。其れは宇宙の驚嘆及び、秘密を囁くの聲か。エルマンや、ヂムバリストの腕にかゝつた、バガニーニの協奏曲も、バハのバルティー

タも、かゝる至微絶妙の幻樂の前には、其の無力を、託すには居られぬであらう。

此の時たゞ。私は恍然として、佇立したまふ……私の凡てを以て、私の一切を以て、私のありのまゝを以て、無限空を支配する、宇宙の眞と、合一した。其處には、善もなく、悪もない。善惡紛々を論議する世界は、まさに千里の遠きに、消融し去つて、また求むべくもない。其處には只、輝があるのみだ。永恒があるのみだ。聖美があるのみだ。絶大があるのみだ。

私の魂も、私の生命も、私の精神も——のみならず、朽ち果つべき、私の肉體までも、其のまゝ、天地の眞と、ヒタリと完全に、合一しやうとは……。私の心は燃えた。私の肉は縮つた。私の血液は、力強く流れた。

▽醒、空、病 貧これ四妙

此の境地と、洪川和尚の語とに、如何ばかりの關りがあるかを、私は知らない。だが私は、かくも廣潤な、かくも絶對自由な、さうして、かくも清浄な、かくも生命に充ち満ちた、別世界があらうとは、夢にも、思ひ浮んだことはなかつた。嚴冬の深夜、黒闇々、恐るべき山中の幽寂境に在つて、突如として、かゝる啓示を受けたのは、そも何たる事であらうぞ。

何も無い。何も要らぬ。只此のまゝ、只此の中心の姿だけを以て、私は直に宇宙の眞と、合一した。世は知るなきも人は知るなきも、オ、これぞ、絶美の榮冠、至上の光榮、無比の幸福、最大の恩寵でなくして、何であらうぞ。

恍惚として、陶酔しながら、而もハッキリと、鮮かに醒めて居る。興奮と充實とに、張り切つて居りながら、而も沈

静と平穩の絶頂にある。驚くべきもの、此處に在り。不可思議の世界、此處に在り。

誰か云ふ。人間の歴史が見た、最大の現實暴露者は、ダーウキンである。彼の冷やかな進化論の前には、基督も、釋迦も、孔子も、モハメットも、プラトーンも、乃至一切の哲學者、倫理學者も、皆其の信條の無稽なことを、承認しなけれはならなかつた。つまらんことを——。進化論は、万有變遷の形態を説いた丈で、其れによつて、宇宙真理の偉大さを、益々鮮かに、證した外の、何ものでもなかつたのだ。私は今、明かに偉大なる生命の力に、觸れつゝあるのではないか。科學も、哲學も、美も、醜も、善も惡も、凡ては、眞理を證し、つゝあるのではないか。

「嬉しい」。何としたことであらう」云ふ言葉が、私の唇を破つて、洩れた。中心の底の底から、愉悅の情は沸々として、湧き溢れて來た。

此の黒闇々の世界が、まア、何とした美しさであらう。女神サイテレアの麗麗な帯が、此の地球を絡んだのか。私は驚異の眼を見開いた。私の眼は、感激に輝いた。赤誠放膽、命も捨てる樂みも、善惡寛容、可非拘擲の快も、ガラツコ心の底に、叩き附けられた。一切は超脱、一切は虛無、一切は純化、一切は聖美、一切は天真……………。

私は叫んだ。「天地の神、而して我が聖中心——」こ。是れ即ち、悟後の善惡の境地にはあらざるか。悟後の善惡には、善惡なし。在るものは、只……天真——。

「夫れ、人定まり、風死するの時に當つては、醉は醒に若かず。飽は空に若かず。頭健なるは、嚮恙あるに若かず。濁富ならむは、清貧ならむに若かず。醒、空、病、貧、我これを四妙となす。而して尙ほ、私かに謂ふ。人を屠り、火を放ちし罪を、抱くあるあらむには、愈、益々以て妙ならむ。醉飽健富は是れ、人天の近接を妨げ、親和を碍するの

大好大賊、殺人放火の罪は、母天子人の間に立つの、眞考叔なり。醒空病貧は、正に是れ、悍馬を制するの、羈轡なり刑鞭なり」。

中心至誠の道に活くれは、自ら天に通じ、自然の眞に連る。茲に唯一絶對の眞神の姿を仰ぎ、キリスト、釋迦、孔子、ソクラテスの聖徳も映じ、其の他、先哲古徳義人君子の丹心も明かに輝く。

即ち不朽の道に立ちて、明智明德、何等の惑ふ所も、疑ふ處もない。眼界凡て、秋空一碧の明かさである。然るに、智に濶れ、功に憚慍れ、利に眩み、生に疲れ、病に憫み、不運に嘔く現代人の多くは、皆自己本源の道を離れて、東に押され、西に流され、漂々乎として、定まる所を知らない有様である。心を痛ましむる哉。

此の彷徨へる羊の群を、如何にしてか、救はむ。其の道、他なし。只各人が、自己の眞中心に覺醒して、直に、身を以て、天の至誠と、自然の眞さに、合一するにあるのみ。其の窮極境地には、何の善惡もなし。善惡なしと雖も、天規を越えず——。即ち、無道徳にあらずして、超道徳なり。眞道徳なり。

こは善なりや。こは惡なりやと、行爲の末節を審査する前に當つて、先づ其の發する根源の中心生命を、正しく養ひ其處に明德を明かにすることを以て、先決問題とせねばならぬ。中心の明德より、發しない行爲は、よし其れが、善行佳言なりと雖も、恐らくは是れ、僞善虚飾の羊頭狗肉ならむのみ。

故にクリスト、これを誡め給ふ。「偽りの豫言者に心せよ。彼等は、羊の装ひして來れども、内は、奪ひ掠むる狼なり」。「禍なるかな、僞善なる學者と、ベリサイの人よ。汝等は白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども、内は死人の骨と、様々の穢さにて滿つ。斯の如く汝等も、外は人に正しく見ゆれども、内は僞善と、不法さに滿つるな

り。「あ、信なき、曲れる世なるかな。我れ何時までか、汝等と俱にありて、汝等を忍はむ」と。

▽オ、絶美！何と云ふ素晴らしさ!!

昭和十年五月九日朝——睡眠、安眠、熟睡の大恩寵の御手の中に、私はボカリミ、目覺めた。其れは、雀の群が、庭前の柿の木で、嬉しさに、騒いだからである。ボカリミ目を開けた私、チュウウ〜と響く雀の聲、……私はまるで、今此の新しい世界に、生れて来たやうだ。凡てが新しい。凡てが珍らしい。凡てが活々して居る。オ、凡て、鮮活なる新世界だ!

私は、靜かに起きて、水風呂で身を清め、東向きの縁側で、練修をやつた。正面には、柿、蜜柑、梅、櫻があつて其の向ふには、崖の下から生えて居る榎の老木の梢が見えて居る。梢の頂を越えて、熔岩の原が横たはり、其の先は滄々たる大洋で、水平線上に、房相兩半島の尖端が、相對峙して居る。大島の尖端、千箇崎の左方から、眞紅な太陽が軟かい光を投げ出した。

二ツ葉、三ツ葉、バラツと下つた椽の小枝に、自然の視点を置き、其の間から、紺青の空と、緑のやうな白雲とを、眺めながら、正中心に力を込めると、眼光は次第に現實ならぬ凝視に支配せられ、眼と視点を結んだ視線を通過して我が中心は、無限大の空間に馳せた。中心が益々定まるこ、此の無限空は、虚々然と戻つて来て我が中心に収まつた。兩眼はバツと、ハッキリした。見開いても、く、尙ほ足らない感じた。そしてスツカリ、バツと開き切るこ、瞳はジーツと、決つて仕舞つて、動かない。かくして、正中心と、眼と、宇宙との三つが、連絡して、全く一つとなつた。

三、結んで一となり、一つ、別れて三となる。三と一、合して虚無となり、充實となる。

かくして我れ天と相對し、天我を抱擁す。我は即ち天地、天地は即ち我、我と天地とは、一體にして、我なく、天地なし。

其處に別箇、現實を超越した、無限の神聖界が展開して来た。此處に我が中心の、無限宇宙がある。凡ては活き、凡ては輝く。オ、絶美！何と云ふスバラシさだ!!

「ヤアツツ！奇麗だな！」と、私は覺えず叫んだ。何と云ふ神々しさ。何と云ふ穏かさ。何と云ふ清らかさ……。アノ白い雲！アノ藍色の空はさうだ!!!。不朽の美だ。最高の美だ。無限の美だ。……オ、魂の殿堂よ。生命の藝術よ——。

私は死後の世界に於ても、此れ以上の美しさが有り得やうさは、思はれない。未來に於ても、此れ以上のパラダイス極楽浄土を求めやうさはしない。見よ。永遠のパラダイス、平和な浄土はハッキリ明かに、眼前に實在するではないか。刮目すれば、空澄み、雲朧き、其の美しさは、一段と輝きまきまつて、絶美の力が、後から後から、續々押し寄せて来る。私の心は躍る。燃える。輝く。

私は曾つて、鱒島梁川の「病問録」で、見神の實驗を、養望限りなきの情を以て、讀んだことがある。こんなことは百年刻苦修養したからこゝで、我々凡人には、到底出來得ることではない。全然人間の、素質が違ふんだ。天上の人と、地下の動物との、差があるであらうと、私は全く、諦め切つて居つた。

然るに偶然、中心生命の妙境が、打開された、天地の輝きはさうだ。蜜柑の根にある、穢い〜までさへも、聖なる

喜びに輝いて、居るではないか。

惟の木の色は、益々緑に輝き、山の崖の赤土は、益々赤く輝き、碧く澄んだ大空は、益々碧く輝き、岸に激する白波は、益々白く輝く。輝く。輝く。輝きまさる。……マア！——天地万象、何ぞ云ふ鮮かき。何ぞ云ふ明らさ。何ぞ云ふ朗かきであるか。

私はこれを、梁川の見神の實驗と、比較對照するものではない。全然、別箇のものであるかも知れない。或は同一性質のもので、あるかも知らない。もしくは、其れ以上の、ものでないことも、斷定することは、出来ないのだ。たゞ明かに違つて居る點は、梁川は病床にあつて、これを書き、私は完全なる健康と、強大恐るべき力を藏した體を以てこれを感じたことである。

「偉大なるものに、ハタと出會ひたる感じ」。梁川の名筆を以てして、此れ位の程度にしか、書けなかつたものこそは、見神の實驗も、見すばらしいものたなと、私をして不遜の感を起さしめた程、我が正中心の世界は、光暈と生命とに輝いた。

文筆の才なき私に、さうして、此の絶大の光耀と、讃嘆に堪へざる玄境とを、表現することが、出来るであらう。書かうとして、筆を擲つたことも幾度、多年深く、胸底に秘めて、溢りに語ることを避けた。又到底、信じ得られないことを語つて、爲めに、徒らに、嘲笑を買ふが如きことも、私の好まざる處である。私の好む好まざるは、論ずるの價値なきことであるが、眞理を尋しむることは、私の忍ぶ能はざる所である。

其れ故かゝることは、永久に埋没し去るつもりで、居つたのであるが、修練して其處に至れば、これは何人でも、機

械的に出來得ることであること、私は確信するものであるから、其の至幸至福の幾分なりとも、礙ちたいこの微衷から、何さかして、其の境地を、彷彿せしめたいものたなと、舊い記録によつて、筆を執つては見たもの、矢張り、其の万一を現すことすら、不可能である。

平凡な現境其のものが、忽ちして直に光彩燦爛の世界となる。風に動く枯れ枝にも、美しい生命の光が進る。バラリと下つた、地味な杉の葉は、無聲の聲を以て、竊に私に話しかける。

▽原上の生命力、躍々身邊に迫る

「宇佐美、春日神社の祠を出て、海を循つて南すれば、沙灘屈折し、青松白波相映す。伊東と曰ふ。村に從つて東、嶺を踰ゆれば、曠野を得たり。崎原と曰ふ。大抵豆州の峰巒沓かに合し、平土百一に居る。惟ふに此の原、延袤三里、山の通る有り。岳運に似たり。小富士と名づく。兩峰對峙するもの、矢筈山と名づく。其の他、峰巒競ひ秀で、原上唯、黄茅人を没す。百蟲の聲、雜出す。八幡野に至る比、已に燈に上る矣。因つて旅店を覓むるに、有るなし。遍く村家に就いて、宿を乞ふ。許されず。是に於て大に窘む。里正肥田氏を過ぐ。醫にして吏也。塾子出で見て、頗る倨なり。忽ち一士の、戸を闢する者あり。昌平學(帝國大學の前身)齋長山田四有なり。相共に奇遇を嘆す。塾子之を見て、禮始めて恭し。蓋し無籍の徒、屢々浮遊し、此の間往々、物を擴ふて走るが故に、舍客を喜はざる也」。 (天保十六年九月十六日)

これは幕末の大儒安積長齋が、其の著「游豆記勝」に記したもので、里正肥田氏と云ふのは、私の家のことである。

有名なる佐藤一齋は、具齋の師であつて、下田へ黒船の来た時、特使の顧問役で、此處を通過した時、私の家に立ち寄つて、「清權」の二字を書いて呉れ、今尚ほ、私の家の客間に掲げてある。

餘談は扱て置いて、游豆記勝の記事中にあるやうに、私が八幡野から、伊東方面へ出るのには、其の崎原の原野を通る。今は熱海下田間の縣道が完成して、立派な四間道路が、雜木林の間を走つて居る。

縣道が出来ない時、私は屢々、この原を歩いた。安積良齋が通つた時の、まゝであつたから、黄葉依然腰を没し、道幅狭い所は、一尺位のものであつたから、雨の降つて居る時などは、胸のあたりまで、直ぐビショ濡れになつた。曾ては吉田松陰も亦、憂國の赤誠に胸を焦しつゝ、此の小徑を通つたのだ。それでも名稱だけは堂々たる下田往還であつた。此の原を通る時、私は屢々、野の生命に呼びかけられた。野の生命ぢやない。即ち天地の生命だ。私はニッコリとして、幾度足を留めたか分らない。ウツカリして居ると、強く袂を引かれ、心臓を叩かれる。明かに生きた力が、押し寄せて来る。崖の灌木が生へた處には、天地の精氣が、浮び漂ふて居るのが見える。山の地面を徹して、ギツチリと、生命の氣が籠もつて居る。

昭和八年一月十二日、陰鬱な不祥事件が伊豆東海岸の各町村に起つたので、伊東警察署に向ふべく、私は自動車で原の雜木林に差しかつた。事件の肉面的醜狀に、觀望して居る私の心は、幽暗の情に鎮されて居つた。

——たのに……フト心附いて、正中心を定めたら、……忙はしく送迎する兩側の様、憎、懼、其の他の雜木、及び雜草の上に、浮動する大生命は、躍々として、私の身邊を流れた。私の心は忽として、現實を離脱して、爽快な恍惚さ、瀟灑な夢幻感さに、溶け込んで行つた。

▽聲心雲水、俱に了々

昭和九年六月八日朝、表の山の頂近くから、引いて居る用水樋が、損んで、水が来なくなつたので、太い孟宗竹を三本擔いで、朝飯も喰へずに、修理すべく、山へ登つて行つた。

修繕を終つて、途中の檜林まで、下つて来た時、又樋が少し、割れて居るのを見出したので、補修にかつた。何時もならば、そんな穢い仕事であつても、絶對強健な身には、仕事其のものが、愉快で楽しくつて、致方がなかつたけれども、丁度、厭ふに堪へたる俗事難事の、涓集山積して居るので、さすがに、面白からざる感じを、私は禁めることが、出来なかつた。驟つて又、世相を一瞥すれば、小は山間部落の小問題から、大は國家の樞機に、關する公事に至るまで、志士の心膽を、傷ましむるものが、頗る多く、仕事をしながらも私の心は、慨嘆と憂愁との一抹の、暗い雲に包まれて居つた。私は殆ど無意識に、只必要に応じて、手を動かして居るのみであつた。處が仕事最中、フト起ち上つて、何心なく腰を決めたら、アッ！何事ぞ。一切は忽ち猛風に、吹き拂はれた霧のやうに、拭ひ去られ、臍下中心は陶然として、蕩ろけたるが如く、眼は急にハッキリと、明かになり、檜の枝の深緑、其の間々に、點在する檜、樺、通草等の青葉を透かして、軟かに射す、日光の神々しさよ。そして其れが、折ふしの微風に、ザワ／＼と揺らぐ美しさよ。

私は何者にか、唖のかされたやうに、草の上に結伽跏坐した。腰腹の中心は覺醒して、私は全く現實を、招越すると共に、又明かにハッキリと、力強く、現實と調和した自分を見出した。直ぐ横手にある、八幡來宮神社の森の中で、山鳩の鳴くのが、聞える。ドドイツポイポイ、ドドイツポイポイ、するさ今迄氣が附かなかつた、種々の小鳥の聲が聞え

て来た。チー／＼チュヨ、チー／＼チュヨ、ツー／＼／＼、ギヤアギヤ／＼、チヨイ、チヨイ、此れ等は何の鳥か解らない。チユイ、チユイ、チユイ、これは鶴鳴らしい。ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、これは云ふには及ばぬ。コロ／＼、コロ／＼、これは天城山の八丁池のまわりの木に住むので、有名である蛙が、私の家の蜜柑の枝で鳴いて居るのだ。

まさに是れ、芳草の中、履を撤して閑行すれば、野鳥、機を忘れて、時に伴をなし、景、心と會すれば、落花の襟を披らいて元坐し、白雲、語なくして、漫に相留まるの境。箇の弦無き天樂の妙趣に酔はゞ、何ぞ弦上の聲を弄することをなさむ。

私の體と、私の心とは、全く統一した。私の心は又、天の精氣と合一した。此の時私は三者冥合の道を、私の隻手に感じた。私は右手を顔前に立て、中心から、天を拜した。

ガサ／＼ガサと、木の上で音がするので、振り仰いで見たら、若い小栗鼠が、尾を擡げて、枝から枝に、飛んで居るのであつた。やがて私の頭の上の、枝まで来て不思議さうな眼付で、私を眺めたが、別に驚いた様子もなく、悠々として、枝から枝へ、渡つて行つた。閑林に獨坐す草堂の曉、三寶の聲を一鳥に聞く。一鳥に聲有り、人に心有り。聲心雲水、俱に了了。

▽無字の書、無弦の琴

人心に一部の眞文章あり。都て殘編斷簡に封鎖し了らる。一部の眞波吹あり。都て妖歌艶舞に湮没し了らる。須らく

外物を感除して、直に本來を賞むべし。統一個の眞受用あらむ。正中心界が啓かれてから、從來の私の趣味は、全然一變した。人間のやつて居ることが、疎雑に、淺薄に、卑近に見えて、致方がない。

愛誦指かざりシダンテ、バイロン、ハイネ、ゲーテ、スコット、シエリー、グレイ、テニソン、クーバー、ロングフエロー、ポーブ、モーア、キヤムベル、コレリツヂ、ローエル、キングスレー、扱は李白、杜甫、蘇軾、白居易、歐陽修、韓愈、王維、孟浩然、杜牧、陶潛、柳宗元、唐彪、岑參、張詠、馬存、張若虛、劉廷芝、王安石等の、錦繡を織りなす名詩をも、更に手にし、眼にする氣持にならなくなつて、篋底深く、投げ込んで仕舞つた。一字識らずして、而も詩意あるものは、詩家の眞趣を得、一偈參せずして、而も禪味あるものは、天地の玄機を悟る。

一々讀んで、頭の中で味はつて行く煩はしさに堪へないのだ。眼を擧げて見よ。其處には、溶けるやうな、天地の美しさが、光に濡れて、展開されて居るではないか。到る處の自然は其の儘、輝き渡る、絶美の大詩篇である。林間の松韻、石上の泉聲、靜裡に聴き來れば、天地自然の鳴偏を識る。草際の煙光、水心の雲影、間中に觀去れば、乾坤最上の文章を觀る。

曾ては美術繪畫にも、多大の趣味と憧憬とを有つて、奇麗な繪なども、澤山集めたものであるが、正中心に目覺めてからは、さうだ。額縁の無い大水彩畫が、到る處に掲げられてある。此の額の中には、船動き、煙柳引き、車走せ、人行き、鳥は飛び、虫は鳴く。繪畫も、活動寫眞も、トーキーも、蓄音器も、ラヂオも、渾然一體となつて、現れて居るではないか。

雲のたゞづまい、空の色合、海と山との色彩、木々の緑、草間に點する花の紅、得も云はれぬ。……何さいふ、素

敵な道具だらう?!。……實に良いなあ!。それは良い管サ。眞物そのまゝ、たものをねえ——。

東都の學校に、居つた頃には、よく本郷や小川町あたりで、洋書が澤山列べてある家へ、立ち寄つては、美しい額や繪端書などを、買ひ求めたものであるが、此の頃は到る處、活きた洋書や、南滿に患まれて居るので、上京して、其れ等の店を通つても、寄つて見る氣さへも、更に起らなくなつた。

眼前の大美術に、酔ふことが出来ない人々の多くが、繪畫展覽會などが、開かれると、上野の森さして、我れ遅れじと群れ集ひ、疎雑な筆の細工に、現を抜かす處かしきよと、潜越ながら、嘲りたい氣持にもなる。

活きた天地の大藝術、輝いた自然の大詩文に、比べたならば、詩聖、文章、美術家達が、骨を削り、血を瀝いた、苦心の大傑作も、何ぞ貧弱な、見すばらしいことか。人は有字の書を読むを解して、無字の書を読むを解せず。有弦の琴を弾するを知つて、無弦の琴を弾するを知らず。跡用を以てして、神用を以てせず。何を以てか琴書の趣を得む。

見よ。絶世の大文學、聖卷の大名詩、燦然たる大論議は——此處にある。其處にある。歩一步、足の踐む所、轉一轉、車の走る所、東西南又北、天下到る處にある。詩思は瀟灑橋上に在り。微吟就る時、林岫便ち已に浩然、野興は鏡湖山邊に在り。獨り行く時、山川自ら映發す。

其のまゝの森でよい。其のまゝの小川でよい。オ、其のまゝで澤山だ。其のまゝで充分ですよ。名も知らぬ、尋常の雜草でよいのだ。若し其の雜草の中だ。一本の山百合でも、咲いて居やうか。オ、私はさうしやう。嬉しい。懐かしい。四十方に餘る人の力さ、八十餘年の歲月を費した、ソロモンの神殿の莊嚴さも、此の花に宿る、宗教的意義さ、美しささには、遠く及ばぬことであらう。宜なる謨。神の子クリストも亦、千九百三十餘年の昔、ユダヤの荒野に於て

此の花の前に立つて、恍然として、不朽の眞理に、陶酔されたことや。松湖の邊、杖を携へて獨行すれば、立つ處、雲は破衲に生じ、竹窓の下、書を枕して高臥すれば、覺る時、月は寒暄を侵す。

▽生きてまゝ解剖するのてなければ

豫期せざる此の心境の變化、而も突如として起つた、此れ等の現象が、果して病的、幻覺であるたらふか。然り、神經症狀を起すやうな健康狀態で、私の現在はあるたらふか?。——否。……否。……否。——然らず。……然らず……斷じて然らず……。

來つて見ろ。私こそは、眞に健全無病、足の先から頭の毛の尖きの、尖きに至るまで、一點、半點、厘毛の微さ雖も悪い箇所などは、薬にしたくもないのだ。若し夫れ、正義公道のためたらんか。滿天下を敵とするとも、敢て恐れず。蟻蝶の生を見ること、まさに、塵芥の如きの眞勇は、常に全身に、張り切つて居る。

特に富豪階級の墮落、政黨の腐敗、非似宗教家共の跋扈に至つては、唾棄百回、神威に墓る奸商共を、繩の鞭を振つて、叩き出したやうに、掃蕩せんぞ、憤慨したことも、幾度であるか分らない。

英氣颯爽、體力強大、頭腦明明、神經健全、何等、病的妄想幻影の、宿る餘地なさは存在しないのだ。

然るに私の眼、私の肉體、私の精神は、完全なる正中心力を、得たる時に於て、天地の美さ、光さ、生命さを明瞭に觀、的確に感得する。これはも果して何事であるか。これをしも人は、病的妄想なりと、速断し去るの勇氣があるか。

私は今昂然として、天道のために、不朽の生命、宇宙の間に充ち溢つるの、眞理に就て證する。理路整然、法則嚴正

人間なんか、いくら豪らさうな奴が、小智を弄して、ヂタバタした處が、嚴然たる宇宙の大鐵鎚を、斷ち切ることは、絶対に……出来ないのだぞ——。

人體の物理的中心に於て、強大なる統一力が、働いた爲めに生ずる、非病理的の神經現象であるか。若しくは、強烈な中心力によつて、各種生理機能が、最も合理的能率的に、全身を支配することによつて、始めて眞に、天地の實相を視得たものであるかは、私には明かに、判定することは出来ない。

而して如何なる専門的、神經學者と雖も、其の何れにか決定すべく、立證することは、恐らくは不可能なことであらふ。何となれば、其の場合に於ける、神經系統の實質的、實驗をなすことは、絶対不可能だからである。蛙やモルモットを以て、實驗することは出来ない。普通の人間を以て、實驗することも出来ない。さればさて私自身を以て、實驗材料に提供することも、出来ないのだ。なぜか云ふに、私に其の力を起した時の神經を、生きながら解剖するのだから、其の際起る、神經機能の實質的變化を、明かにすることは、出来ないからである。此の實驗は、結局、私を生きながら、解剖するのだから、解き難き謎として、殘される外はないのであらう。

▽純眞至誠の一大鐵槌を以て

三十七年前、私が求めた處のものは、たゞ病對の域を脱して、完全なる健康を得ることであつた。いかでか斯様な精神上の域までも、求める餘裕などが存在しやう。

然るに體育運動の基礎を、中心に置いて、鍛錬して居る中に、かゝる光明の世界に、躍出しやうとは——。それは實に

與へられたる瞬間までも、私の夢想たにも、しなかつた處のものである。

止めよ。止めよ。神學がさうたの、哲學がさうたの、實證科學がさうたの、煩瑣なる迂論を、説くことを廢める。そんな事をいくら、やつて居つた處が未解決の根本原因は、後から、後から、現はれて来る。一つを解けば又一つ、其れを解けば又其の次ぎ、次から次へと、限りはなく、不可解の謎は先へくくと、延びるばかりだ。假設の上に、假設を築いても、矢張り其れは、砂の上に建てられた、假設の殿堂に外ならぬ。「雨降り・流れ張り、風吹きて、其の家を打てば、倒れて、其の顛倒れは甚だし」。

何も彼も擲ち去れ。一切を捨て、仕舞へ。而して只、中心虛無の世界に歸れ。澗然として悉く酒脱し、透徹するところであらふ。心虛なれば、則ち性現はる。心を息めずして、性を見むことを求むるは、波を擲いて月を覓むるが如し。意清ければ、心清し。意を了せずして、心を明かにせむことを求むるは、鏡を索めて、塵を増すが如し。

人體の物理的重點に於て、心身共に完全に合一した正中心力の、妙機に就ては、其の實感をなるべく詳に、説明して見たいと、私は努めたけれども、文筆の才なき私には、其の幾部分を彷彿せしめることすらも、遂に不可能であつた此の上は只諸君自身が、自ら持てる己の中心に就いて、研究し修養して、其の境地に到達せられんことを、望むの外はないのである。

平凡極まる私にすら、解つたことであるから、其の方式要領さへ、正しく合つたならば一般諸君にして、私同様、いな其れ以上の經驗が、得られない筈はないのである。然るに其の之れなきものは、偶々其人達が、賢明なるが爲めである。賢明にして、徒に智識を以て、是れを得んとし、飽くまでも、實踐實行するの努力を、缺くからである。寧ろ

運を守りて聰明を顯け、些の正氣を留めて、天地に還すべし、寧ろ紛華を謝して、澹泊に甘んじ、個の清名を遺して乾坤に在くべし。

而して魯鈍、私の如き者が、此の至幸の大恩寵に浴し得るのは、魯鈍にして、脳目も振らず、一意専心奮りに、目指す大中心に向つて、猛然として猪突直進したからである。如何なる障害にも、誘惑にも、屈せず、只管宿昔の所志を貫徹せんと、絶へず駕馬に鞭うつて、一歩一歩向上に、努めたからである。賢明なる諸君にして、此の不撓貫行の努力脳目も振らぬ馬鹿正直の努力さへあつたならば、其の進歩の速なることは、正に順風に、帆を擧ぐる快船の如く、突如の顯著なることは、刮目して、待つべきであらうのに、惜しい哉、智者は總じて、愚者とはなり得ないのだ。

天下無上の至寶は、自ら取るにあらずんば、何人か雖も、得ることは出来ない。請ふ、諸君自らの努力によつて進んで、是れを取れ。太初より永恒に亘り、無限大の宇宙を一貫して、動かない處の、眞理の大方則が潜んだ、正中心の聖殿は、諸君自身の裏にあるのだ。不朽の靈光は、金色燦然として其處に包まれて居る。宇宙の生命は躍々として、其處に動いて居る。何ぞ明けないのか？ たが其れは、堅く重い鐵の扉で、固く鎖されて居るんだ。い、加減のことは、開らんぞ。開かんぞ。開かんぞとするならば、先づ己の私我を抛て。富貴、功名、地位、學問、そんな下らんものは一切、ぶち棄て、仕舞つて、土足で踏み踏つて、……即ち自分自身の魂を、自分の力で木ツ葉微塵に打ち壊して、粉微塵に切り刻んで、ドブの中に叩き込んで、只純眞至誠の精神を一大鐵櫃に籠めて、生命を打ち込んで、其の鐵扉を碎け！

ツマランぞ——諸君、下らんことにフラク迂路ついで、昨日は東、今日は西、浮び漂ふて、止まる所を知らぬやうな、他愛のないことで、如何にして、永世不朽の宇宙神祕を、自己中心の裏に、開き得るものぞ。古人、道を學ぶこと

二十年三十年、不撓の刻苦修業を積んで、漸くにして、悟道の奥義に、到達することが出来たのだ。今人、閑に任せてアツチを齧り、コツチを啄き、アツチに惑ひ、コツチにふらつき、下らん流行を追ふて、轉々する者の如きは、自分の裏に、絶大の至寶を抱きながら、終生遂に之れを開くの機縁を與えられることは出来ないのだ。

▽二本指で力持の青年を自由

昭和九年四月二十八日、安藤大尉から贈られた感想録を、摘録し終つた處へ、突然同君が來訪せられた。今回都合上郡是をやめて、郷里九州に歸らる、由、私の代りに九ヶ年間、郡是にあつて強健術指導に當られ、此の道の熱心誠實なる研究家であつた君と、別る、ことは、一種別れの情、堪へ難きものがあつた。

此の日、私の隣部落の池田の人達十一名が、眺望を妨げる周囲の木を、切りに來て居つた。其の中、最も力の強い壯年の男は、大木を切り倒して、屏風を立つた様な崖を、ドシ／＼と運んで居つた。仲々の力持だ。晝飯が済んで休んで居つた時、私は改等の中へ、這入つて行つて、其處へ腰かけ、其の男に向つて、右手を差し出し、「君、兩手でドンナニでもして、確り握んで、離れないやうに、して見給へ」と云つた。

彼は兩手で私の手首を、渾身の力を籠めて握んだ。「い、かつ」。「ウウン」。ヒシヤツ！。容易く、毫り取つて仕舞つた。「もう一回、別の握り方で」。「もう一回。ウンカを入れて」と。種々の方法で何回やつても、ドンナ様にしても、矢張り駄目だ。一瞬時も、こたへることは出来ない。餘りの飽ツ氣なさに、一同着然たる顔色で見詰め、一語をも發しない。

「わつしやあ、随分力があるつもりで、自慢して居るから、何ッ糞ミ、随分氣張つたけれども、先生にや、さうしやうもない」と、述懐し、「先生をコンナ田舎に、置くのは、惜しいねえ」と、感動措く能はざる、面持である。私が樂に腰かけて、軽く右手を出した丈で、寔り取る時、脚へも何處へも、力を入れた様子もなく、極めて氣輕な、樂な態度で、無造作に離して仕舞ふので、一同呆ツ氣に、取られて居つた。

其の男は「まるで赤ン坊の手を、拂ひ除けるやうなものだ。取られる時は、鐵棒で叩き除けられるやうな、氣持がした」と云つたら、一同覺えず溜息を吐いた。

私は立つて、右手拇指と仲指との二本指で、其の力のある男の、腕を挟み、アツチコツチと自由自在に、引き摺り廻した。二本の指は開いて、タツタ二本指で、大の男を左右するので、血氣旺んな、力自慢の青年達は、まるで物の怪にでも、つまゝれたと云ふやうな、凄じ目付顔付で、ボンヤリと立ち盡して居つた。其の呆氣に取られた一同の様子こそ却つて見物であつた。

池の區民は、曾て二三の没曉漢に、煽動されて、擧つて、永く私に反抗したものであるが、皆質朴純良、野に、山に田に、畑に、只一心に勞働に従事して居る天眞の民である。私に對して公然、極力反對した首謀者達も、みんな純良な人間ばかりだ。只智能識見が足りないが爲めに、眼前のこゝしか、解らなかつたからである。だから私は、彼等を見て、此の厭やな感じも、起したことはなかつた。心中常に、微笑を以て、彼等を眺めたのであつた。

それから私は軍刀の長いのを、持ち出し、彼等が取り圍んで居る中に、這入つて、額と額と一二寸位の處まで、顔を近寄せ、ヤツと一瞥、長刀を抜き放つた。引き續き、違つた遣り方で、數種、ベラリと、縦横に抜き放つた。もこ

より何處をも斬らず、誰の着物に、觸れさへもしない。切尖は人々の顔の直前を、ピカリと流れる。其の度毎に、ヒヤリと、度膽を抜かれたさうだが、身を交す、暇さへもないのだ。私の手が二寸ばかり鯉口で、動いたかと思は、もつズラリと、刀身は引き抜かれてあるのだ。ピツクリして言葉も、出ないのは、無理もない事である。而も私は微笑しつゝやつて居るので、彼等は一層、不思議がつて居つた。

「何處でコンナ事を、習つたのですか。軍隊で教はつたのですか」。「イヤ、私が始めて編み出したのサ。つまらん事だよ」。「ヘエツ。勿體ないですね。先生をコンナ所に置いちゃあ」。純朴な彼等は、又心から、私のために、惜んで呉れた。戲談半分にやつたことから、飛んだシンミリした場面に、なつて仕舞つた。其れから一同、元氣よく仕事にかゝつた處へ、安藤君が訪ねて來られたのだ。君は二時間はかり話して、歸途につかれた。私は山の下り口まで、送つて別れを告げた。オ、信實の友よ。益々進歩向上せられんことを、私は山の上から、小さくなつて行く友の姿を、遙に見送りながら、得難き同志の爲めに祈つた。

▽銀座街頭の寂しさよ

「なんぢ祈るとき、偽善者の如くに、なすこと勿れ。彼等は、人に見られんが爲に、會堂や、街衢の隅に立つて、祈ることを好む。われ誠に、爾曹に告げん。彼等は既に、其の報酬を得たり。なんぢ祈るときは、ひそかなる室に入り、戸を閉ぢて、隠れたるに在す、爾の父に祈れ。さらば隠れたるに置たまふ爾の父は、顯に報あ給ふべし」。

イエス誠しく戒めて言ひ給ふ。「慎みて、誰にも知らずこと勿れ」。

私は毎朝獨り、締め切つた三疊の道場で、練修する。日光も差し込まない、陰氣な室だ。此處に立つて、獨り靜かに練修にかゝるに、眼に入るものは、古ぼけた壁の節穴だけだ。

だがドイツと、姿勢を決めて、眼を定めるに、陰森の氣充つる、薄暗い室も、忽ちして精氣と、輝きと、生命が漲り、汪洋たる大道場に、立つ感がある。魂はひたぶるに、裏に沈み、腹底に潜む。私は獨り端然として、壁に向ひ、無心の心を以て、壁に親しみ、獨り練修を進めて行く。

こう云ふ遣り方であるから、私が創めた中心抜刀術など、父も母も全然見たこともない。妻も死さ知らない。私がこんなことをして鍛へて、さんになつて居り、何が出来て、何が解つて居るのかは、家人でさへも全然知らないのだ。私は世の中から、埋れて居るばかりでなく、家人にも、隠れて居るのだ。強健術運動法は、小供等にさへ、教へもしなければ、やらせもしない。父子不傳で、自分の衷心から、本當に遣らうと云ふ、熱誠が湧いて來るのでなければ、到底真髓は、得られるものではない。真髓を得ないならば、遣つたつて、遣らなくつたつて、何を遣つても、彼を遣つても、大した變りはないのだ。

「求めよ。さらば與へられん。尋ねよ。さらば見出さん。門を叩けよ。さらば開かれん」。熱心に求め、誠實に叩く者でなくては、與へやうとした處が、何とも致しやうがない。

何處に求めるのか。何處に尋ねるのか。何處を叩くのか。——中心だ。自己の中心だ。自己の衷なる正中心だ。

私は獨り子然として、宇宙に立つ。タツタ獨りだ。タツタ獨り、……何人とも、何者とも、漁師とも百姓とも、大工とも左官とも、大人とも青年とも、小供とも赤ん坊とも、善人とも悪人とも、賢者とも愚者とも、皆を親しみ、みんな

と、仲良くして、笑ひ興じて、居るけれども、正中心の大道を進むのには、タツタ獨りで、唯の一人の侶さへもない。正中心道に於ける、眞の同志は、たゞの一人も無いのだ。

だが、密に潜かに、ひそかに、一大鐵錘を上げて、我が中心の寶庫を、叩き叩く時、其處にはダイヤモンドの靈光、燦然として、滾れ進り、銀座街頭の喧騒も、是れに比すれば極地の氷原よりも、素寒荒涼たるものに、私は感ぜられる大東京の真ん中でも、有爲轉變の浪に漂ふ、頼りなき寂しさである。

「坐禅せは四條五條の橋の上、往來の人を深山木と見て」。中心解脱の眼を放ては、往來の人も深山木同様。『坐禅せは四條五條の橋の上、往來の人を其のまゝと見て』。深山木の人も、超越無執着の正中心には、も

と是れ同一である。何の幽かさを感じないのみか、寧ろ一種の、寂しさをすら覺えずには居られない。昭和九年二月四日、郡是製絲會社の十間に六間の強健術道場で、社長専務以下、幹部の人々を始め、私の話を、熱心に聽かんとせる人達が、ギッシリ集まつて、居らるゝのにも拘らず、會場に這入つた時、私は冷たい、寂しさを感

じた。丁度、一人も居ない、霜解けの野原に立つた感じた。何故か。……其れは直感だ。其の時、熱火の飛ぶやうな、私の講演を聞いた誰でも、こんな感じを抱いて、私が演壇に立つたさは、夢にも、想像し得なかつたであらう。

昭和九年九月二十五日、銀座尾張町の交差点近くの、大日本麥酒會社階上の講堂で、講演すべく、迎への自動車に乗せられて、織りなす人の波、走せ違ふ電車自動車、ネオンサインの光の海、東京一の繁華な街を、驅けりながら、私の心の、何と寂しかつたことよ。其の夜の講演に於て、私は力強く演壇を叩いて、文明が自然から遠ざかり、天地の大道

から、離れ去ることの、淺ましきを、痛論した。

▽無聲の靈響、正中心に起る

昭和九年三月四日の、うそ寒い晩のことであつた。私は獨り、朱鞘の長刀を提げて、八幡來宮神社の境内に行つた。雨は止んだけれども、空には星一つ見えない。濡れそぼつた木々の緑の上に、門の電燈が、蒼白い光を投じて居る。石段の下の左の竹藪の中から、大江院の本堂が見える。右手に、牛の臥たやうな小山は、一杯林木に包まれて、頂には、私の家の家根が覗いて居る。小山の裾からは、太平洋の蒼黒い水平線が、見える筈だが、其れは闇に包まれて居る。私は長刀を左手に持つて、帳屋の前の廣庭に立つた。姿勢を定め、眼光を決めた。——劍心一味の瞬間、電光石火、サツと引き抜いた。エ、イツ！。生氣颯爽として、劍尖に走つた。

渾身の力を振り絞つて、唐竹劍の一刀、ヤツ、刹那……ピュッ！、空に聲あり。返して更に、大圓を書き、大袈裟斬り、エーイツ……氣魄一杯の氣合……ふッ、飛沫迸るの猛勢。

氣合を抜かず、一旦徐に、刀を鞘に收め、靜止數十秒……ドタツ、踏み込んで、紫電一閃、サツ、風を剪つて、横へ拂ひ斬り、一道の活力は、中心から左手小指へ、柄から切先三寸へ、脈々として流れた。劍と我と、正に一體、體と劍と一體、心と劍と一體、我は我、劍は我、完全に合致して、分厘の隙間もない。

國を毒するの奸賊、一刀一斷、斬つて捨てる位の意氣は、また可なるも、刀を執つては、須らく無心無念なるべし。一點の私憤雜念を混ゆるを許さない。其れあれば、刀は汚れる。汚れた刀には、眞の道は宿らないのだ。

高足駄を履いたまゝであるけれども、清明無心の刀であるから、私は、汗はみもせず、呼吸も弾まず、靜かに刀を、鞘に收めて、杉の木に立てかけた。

中心力による。劍心合一の妙諦に、壯快感を覺えながら、私は獨り、杉の太木の下に行んだ。スルトまあ、何と云ふことだ。ガクツ！と、無聲の響が、腰腹の中心に起つて、万象は忽として、我が衷に納まつた、眞に是れ天地宇宙と冥合の聖境である。

廓然として、無始無終、タイムなく、スペースなく、歴史なく、哲學なし。羅網なく、差別なく、善もなく、惡もなし。汪洋無窮の大空虛である。而も、心の賑さはさうだ。まるで咲き競ふた花のトンネルだ。右も左も前も後も、みんな花で、包まれて居るかのやう。只陶酔、只明瞭、何處までが、現實なのか。何處までが、夢幻なのか。餘りにも崇高で、餘りにも、純美である。

私の魂は、漂々乎として、天外に浴け込んで行つた。この身はこれ、宛然ダイヤモンドの神殿と化し、靈光燦然として、聖中心を包んだ。

目前にある門も鳥居も、石垣も、杉も、櫻も、蘇鐵も、悉く五色の彩光を帯び、生命と懽喜とを織り込んだ霞で、様を取つて居る。而も一層ハッキリと、活々して居る。ハッキリと鮮やかに、映つては居るが、一切は空だ。

一切は空だが、天に連り、宇宙を包圍する聖中心の眞意義に、私は釋然として、落節した。自分こそは、まさしく地球と、最大の幸福者だと、大なる感謝と懽喜とは、私の全身身を燃やさむばかり……。

オ、是れこそは、天上天下唯我獨尊の域であるか！。と云へは「汝心慢れる者よ」と、或は反感を懐かる、方が

あるかも知れない。——待て——。暫らく待て！

此の如きは、斷じて、私一個の獨占的現象であるべき筈は無いのだ。苟くも健全の心身を養ひ、本我の聖中心に透徹するならば、万人悉く、唯我獨尊たるべきである。万人悉く、最大無上の幸福者たるべきである。

最大無上と、万人悉くとは、一致せぬと非難せらるゝか。云ふ。形骸の末節に拘々たること勿れ。大道の絶對境には、比較なく、矛盾なし。他と比較したる唯我は、最も低く、最も卑しきものである。

唯我獨尊は、透徹したる絶對境である。絶對虛無の唯我なるが故に、即ち獨り尊いのである。

▽型なき型、自然に迸り来る

昭和九年四月五日、私は獨り、伊豆の田方郡と、加茂郡との郡境にある、「草崎」の濱邊へ行つた。日暖かに風和やかに、海の香り磯に充ち、伊豆七島も春づかし氣に、春霞に烟つて居る。

私は猿股一つの素ツ裸で、大きな岩の上に立つた。高さ一丈、廣さ略三疊敷、殆ど私の道場位はある。表面は少し傾斜はして居るが、真中の五尺四方ばかりは、やゝ平た。天日に曝され、風雨に洗はれて、埃一つ附いては居ない。

私は素足のまゝ、其の岩の上に立つた。潮が干て濱の巖は、スツカリ現はれて居る。私の正面には、六坪ばかりの水溜が、出来て居つて、周りは種々の、形をした岩で、取り圍まれて居る。潮の寄する毎に、ザワ／＼と、白泡は沸騰する。私はル、ドの洞窟を、想ひ出した。正面の切つ立つた巖の中から、聖マリアが現はれさうな、感じさへもした。

私は眼を放つて、赤澤入嶮野の海岸の、危峻錯綜し、翠松其の間を、點綴する絶景を眺めて居つた時、フト——此の

景勝と自分が、全く別個の存在であることを、自覺した。即ち私は、一個の人間として、今此の海岸に立つて、此の景色を眺めて居ると、云ふ事實を認識した。私は此の景色から、浮いて居る。離れて居る。私は此の自然とは、或る隔てを以て、眺めて居ると、云ふことが解つた。

私は突如、姿勢を決めて、正中心を据へた。するさ忽ち、私の中心から、グイツと大きな力が湧き出して、垂直に下つて行つた。そして岩から地心に、突き通つた。まるで老松が地から、生へたやうに、私と自然とは連らなつた。ドカツと磁力を以て大地に、吸ひ附けられたやうであつた。此の岩、此の海、アノ崖、アノ島と同様に私も亦、此の自然の中から、出て居ることを直覺した。

「足跡を以て云へば、即ち肢體も亦、委形に屬す。眞境を以て云へば、即ち万物も皆、吾一體なり。人能く、看得て破り、認め得て眞ならば、悠然として、万般の輻銷を超越せむ。

人或は、其れは想像だと、云はるゝであらう。もともと人々岩とが、附着する筈はない。私の體きて、其の岩に吸ひ附いて、居る譯ではない。だから想像だと、云はれ、は、科學上さうではないと、否定することは出来ないのだ。

だが然し私は、私自身が岩と地とに、附着したなごこ、思ひもしなければ、想像もしない。そんな病的、夢想的、思想の這入るべき隙間なきは厘毛もない程、私は健全頭強の體なんだ。

それなのに、私は中心の姿勢を決めた、其の瞬間から、私の體全體が、岩を徹して、海岸と、海と、斷崖と、島と、雲と、空と、此の地球と、此の宇宙とに、シツクリと附着して居り、其の中から、私と云ふものが、出て居る現實を、直覺した。さうして其れに、連らなつて居る、或る強大な力を、私は直覺した。單なる想像ではないと、私が云ふのは

地と私とを結んだ、是の活きた力を、明かに感知するからである。

と同時に、天地は煥然として、輝き渡つた。ア、其の素晴らしい、莊麗な光景よ。一石、一草、悉く光を放つて、到底此の世のものとは思はれない。而も、青は青、赤は赤、紺は紺、紫は紫、白は白と、鮮やかに、ハッキリと浮き上つた。かくして現實の一切は、一段と精采を増して、活々として来た。

私の魂は、花の殿堂、花のトンネル、花吹雪の中にあるかのやう。私の全身は、堪え切れぬ大権喜の光に包まれた。颯爽たる精氣は、私の四肢五體に滿ち溢れた。私は岩の上に立つて、強大なる中心力の進るまゝ、獨り無型の型で、自由自在に、操練を行つた。

見よ。胴も、腕も、脚も、均整を保つて、而も、ハチ切れさうな肉が、盛上つて居るではないか。岸上に於ける、透徹した肉體美の大飛躍、藝術的な曲線美の大活動、中心を基礎として、腰、腹、腕、手、脚、足は、自ら千變万化の妙を盡した。其れは、悉く、音楽的階律に適つて居つた。天の彼方から無聲の樂が起り、私の體は、其のリズムの波動によつて、機械的に動かされた。

雄大さ云はふか。壯麗さ云はふか。大自然を前にして、私は獨り岩の上で、猛獅を手搏ちにするの、勇まかさを揮つた。眞に火花散る、死力の熱技だ。而も其の中に、春の野の軟かさを溶合し、磊砢として横たはる岩の硬さを、相應する柔剛の極致が、調和して流れた。

私の體の中からは、限りなき美さが、進り出で、天と、地と、海とに、浸み込んで行つた。此の時の型は、曾て遣つたこともなければ、思ひ浮べたこともすらすら、ないもの計りであつた。全部が悉く、自然の進りであつた。中心の力が、自然の精氣と相通じて、私の四肢五體を、自由自在に躍躍せしめたのである。

この未知の力の搏動の中に、私は全身全靈魂を傾注して、湧出し来る技能に酔つた。肉體で出来る限り、精妙な、至美な、優秀な、豊饒な、藝術的奥秘の連續展開に、私の體は、極度に、驅使された。内から外からと、ガツチリ際間もなく、緊束されて、私の體は、無意識に、自由に、自然に、躍動せしめられた。私は幽玄な、宇宙生命の呼吸に觸れた。其の眞迫力の驚異に、打たれた。天にも地にも、緊張興奮の波が漂ふた。

中心から進り出た、力技、熱技に、曾ては屢々数千の會衆を壓倒し去つたこともあるけれども、私は此の無人の境に在つて、全く天地と、合一した操作が、衷より自然に燃え溢れた時程、力と生命を感じたことは餘り其の例がない。型無き型は、後から後からと、溢れ來つて、何時までやつて居つても、盡きる處を知らない。精氣益々加はり來つて更に疲れを覺えなかつた。オ、痛快なる中心力の働きよ。オ、壯烈極まる中心生命力の發動――。

一體、各種の操練は、型に従つて遣つた時には、さうしても、心の働きが、其の力を、一段と減ずるものである。虛無の中心力が、最も正確に動いた時、突如として發した動作こそは、却つて自ら、最善の型と合一するものである。私は、一時間ばかりして、此の無型の型による、自然運動を打ち切つた。私は恍乎と神秘なる生命力に、魅了され、獨り微笑を含んで、仰向様に、其の岩の上へ横たはり、眞蒼な天空に、白雲の動くのを、眺めながら、知らずく、深い睡に落ちて行つた。スヤ／＼と快く／＼との位眠つたのか、眼が覺めた時には、海も、陸も、蒼蒼として、暮れかゝつて居つた。生暖かい風が人懐かしく流れて、空には星がチラホラと瞬き出した。

▽獄舎に働いたドストイエフスキー

昭和九年五月七日黎明、布團を蹴除けて、飛び起き、獨り道場へ行つて、大中心力の操練を、力演又力演、立て續けに、五十回遣つた。正に熱火進るの勢ひである。腰腹の正中心は、忽ちこぼして、大生命と溶和混一して、渾身はれんが力一瞬即ち、生死踏断の境地に悟入した。

活力は滾々として、裏から湧き起つた。腕が鳴る。脚に力が籠もる。生氣溢れとして、無闇に働いて見たくなつた。そんな仕事でも關はない。掃除、薪割り、草刈り、雑巾掛、耕作、便所の汲み出し、そんな穢い仕事でも、遣つて見たい。「人もしぬかは、我に來りて、飲め、我を信する者は、其の腹より、活ける水、川となりて、流れ出づべし」の、状態なんだ。

ア、労働は、清業である。至福である。さうして又、天理に協つたことである。人體が二百十三個の骨片と、四百十七個の筋肉とで、構成されて居るのは、自由自在に、體を動かすことが、出来るやうにその、造物主の趣旨に由るものである。其れから、二百五十万餘からの汗腺があつて、老廢物である鹽分や、尿素等を排出させて、腎臓の働きを助けるのは、體を使つて汗を出すのが、健康の本義であることを、示唆して居るものでなくして、何であらうぞ。私は、感銘深き、一話を想ひ出した。

ロシアの大文豪、ドストイエフスキーが、シベリヤの流刑地で、絶望に近い、悲惨な牢獄生活を、送つて、居つた時酷暑の二ヶ月、イルティツシユ河の岸邊から、建築中のバラックへ、朝から晩まで、毎日煉瓦を運ばされた。

「其の時の氣持は、一體どんなたつた？。現在の境遇から見て、丸で地獄と天獄程の、違ひだらうな」。出獄後、成功の彼に、かふ云つて、彼の友人が訊ねた時、ドストイエフスキーは、靜かに云つた。

「うむ、あの時、煉瓦を引張つた繩は、私の肌を喰ひ込み、私の肩からは、生血が滴つた。——だが、私にさつて、其れは段々、愉快なものになつて來た。今まで、瘦せて居つた私の體は、見る／＼、頑丈になり、弱かつた私の體力は、非常な勢ひで、強くなつた。其の時まで、私は、生きやうか、死なふか、迷つて居つたのだ。それがさうだ。私が煉瓦を運べば運ぶ程、生きてゐることが何だか、面白くなつて來た。其れから段々、私は生の讚美者になつて仕舞つた。そして強く感じた。そんな生活をして居ても、健かに生きること云ふことは、無上の樂しみ、無上の幸福であること云ふことを——」。

多くの人達が、また深く尊はらない労働は、かくも意義深く、有り難いものである。さうして其の労働を、最も合理的に、最も効果的ならしめ、且つ、イリーの耕夫クロムウエルの如く、労働を聖化せしむるものは即ち正中心力である。中心を基礎とさへすれば、運動よりか、労働の方が體の爲めには、餘程良いものだ。中心を据へた労働は、最上の體である。無上の健康増進法である。一定の形式に捉はれて居らぬから、數百の筋肉を、自由に万遍なく、働かすことが出來て、下らん型に捉はれた運動法などに、優ること方々である。中心の姿勢を土臺にして働くと最高能率を擧げることが出来るはかりでなく、趣味と樂しみとを以て、仕事をする事が出来る。楽しんで働くこと、能率は益々擧がつて來る。仕事は又、愈面白くなつて來る。

力が中心から出るやうになると、労働即體育、即健康法、即精神修養となるのだ。茲に於てか、平常の行爲、即ち女

妙の天眞境なる。斯して我を自然と天道と自ら合一するに至る。是こそは地上の天國であり、宗教の眞意義であらねばならぬ。平凡と共に超越、平凡と共に高雅、平凡と共に深奥である。正に是れ常玄一元の眞、矛盾調和の妙——。私は、道場を出て、風呂場へ行つた。セメントの風呂桶に、なみくま漉へられてある水の中へ飛び込み、龜の子束子で、全身をゴシく洗つた。

其れから、臺所の大きな井戸裡の側で、麥飯一杯と、茶葉の漬物で、朝食を済まし、運動ズボンに、繩の帯をギユウと締め、靴のまゝ、飯を以て、竹藪で圍まれた、表の畑に行つた。

ザクツ、く、く、飯の尖は、鋭く土を敲つて行く。瞬く間に、約五畝武ばかりの野菜畑は、綺麗に耕されて仕舞つた。其處で、便所から、肥料を汲み出し、七荷搬んで、野菜の根に、かけてやつた。

▽詩的夢幻の世界が現實の地上に在らうとは——

日は暖かに、照して居る。熱汗はダクくく、目の上に流れ落ちるのを、土にまみれた手で拂ひながら、私は、土の草の上に、腰かけた。キチンと、正中心を決めて——。

何事ぞうろ？。うろ？。——瞬間……其の瞬間——、思考の機能は、ヒタリと止まつた。突作の間である。觀念の作用にあらす。冥想の結果にあらず、感情にもあらす、思念にもあらす。機械的だ。全く機械的である。

ヒタリツ——正中心の玄機を以て、機械的に私の全精神、一切の神経作用は、支配されて仕舞つたのである。さうして、未知の世界、虚無の絶對境は、私の眼前に展開された。

オ、凡ては、輝いてゐる。美しい天地ノ。軟な自然の胸は、只嬉しさにさきめいて、深緑の椎の木も、黄色な菜の花も、其處に舞ふ蝶の姿にも、扱は、梅の枝に啼る鶯の聲にも、包み切れぬ喜びが、慄えて居る。

頬を撫でる風にも、優しい清緒が、含まれて居る。ユラく動く竹の枝は、無聲の聲で、私に話しかける。思はずニツコリして、私は右腕を高く差し出した。耕された黒壤土は、春を満喫して、嬉しさを抑えて居るかのやう。青い菜の葉に、透き徹つて居る、日光の麗しさ。繻を千切つた白雲は、紺青の空を、閑かに流れる。事々、物々、喜びと輝きさに躍る。

爛漫たるダイヤモンドの花、湧沸たる光の浪は、私の全身心を包んだ。會つて味はさる神聖感、會つて覺へざる靜穩境、爰に私は、大生命の實在を、直感した。其の本體は、明智全能、純愛聖美、眞誠至強の精靈であり、其の實質は、紫白光の生命體である。

無限の色、無限の調、無限の光、——私の魂は、眞如の世界の、絶美と、崇高と、神秘と、法悦との迫力に咽ぶばかり、……「ア、美しい」と、私は叫んだ。只魅惑、只陶醉——。絶大無比の大歡喜、聖中心に築かれた大法城よ。

無心の嬉しさが、たゞ込み上げて来る。會つては、年若かりし時、詩的空想の折、宗教的冥想の際、強いく憧憬を以て、夢みた、美しい幻の世界、天上の樂園が、現實の地上に、今此處に、其のまゝ存在しやうとは——。

土だらけになつた私の足は、大地に附いて居る。私の心も私の魂も、地に込み込んで居る。大地には、永遠の神の乳房が、藏されて居る。だから、清水は流れ、穀物、果實は實り、花は微笑み野菜は萌え出づるのだ。

私は裸足を、軟かな土の中に突き込んだ。私の心臓には、宇宙の脈搏が、妙なる樂の音のやうに、傳はつて来る。私の胸には、「此處は、聖地なり。靴を脱ぎ、裸足となるべし」この舊約の一句が浮んだ。地は聖地である。土に立つのには、私共は、履物を除らねばならぬ。

而して、地息には、健康を培ふ大なる滋養が、含まれて居ることを、私共は、銘記せねばならぬ。オ、裸足、其れは健康人の、大なる清快の一つであることを、併せて茲に、私は強調して置きたいと思ふものである。

私は、私の正中心に下された、天の大恩寵の辱なきを念ふて、感激の熱涙に、兩眼が濕ふた。「我が杯は、溢る、なり。我が世にあらむ限りは、必ず恩恵と、憐憫と、我れに添ひ來らむ。我は永遠に、エホバの宮に住まん」。

私には此の最上の賜物がある。無上の恩寵がある。此の上に、私は何を望まう。私の感求するものこそは、何も無い私はエビキュラスと共に云ひ度い。「おれに只、パンと水とさへあれば、幸福に於ては、神に譲らぬ」。

▽長女と次女とに聖中心を物語る

昭和九年十二月三十一日、朝からの雨、長女紀子、次女和子の手傳ひで、新年の餅を搗いた。中心の姿勢で搗くから幾日搗いても、毛程の疲勞を覺へない。重い杵も、槌把を振ふやうなものだ。其れで朝飯は、——タツタ一杯。夜、紀子と和子とに、始めて聖中心の話をして、聞かせた。二人とも、小學校はメット首席で通り、今は縣立静岡高女に學んで居る。何れも運動の選手である。以下其の時の話の二三を、摘記して置かう。

「中心を修めて居れば、こんなことがあつても困らない。結局は無たからネ。虚無絶對には、困ることはないサ」。

「生命を捨てる覺悟をした時、生命力は最も強い」。

「低い所を歩いて居るから、種々のものに打つかるのだ。其の上を踏み越えて行け」。

「眞に正中心に納れば、諸縁諸情を踏躓し去つて、一切は空に歸し、無窮無限の絶對境に活くる。既に絶對虚無の境にあり。何ぞ生死あらむ。既に生死が無い。何の歲月日時あらむや。既に活き、又既に死し、まさしく生死を超越するの妙境である。だから、何時お父ちゃんやんが死んだつて、チツトも心を傷めてはいけない。平氣で居られる覺悟を、チャンと決めて置くが良い。肉體なんて、焼けば灰だ。胸は土だ。人間の尊ぶべきは、精神氣魄のみだ」。

「我れ既に世に勝つて居る。既に勝つて居る。常勝軍である。聖中心の大道に立つたものには、敗北は無い」。

「だが俺は勝つたと誇る者は、外に勝つても、大切な中心に於ては、破れたのである。誇りは無心の大敵である」。

「中心神祕の聖光に觸る、時、ダイヤモンドも、金銀珠玉も、其れ等は皆んな、木屑か砂利のやうな感じがするやうになる」。

「聖中心を得んさせは、得んと思つた丈けでも、もう駄目だ。ソんな雑念が這入つたからである。だから、目標はチャンと樹つて置いて、正しい姿勢のもとに、無念無想の努力を、積み重ねねばならぬ」。

「至誠にして、無心の力が、最も強い」。

「我が中心の至誠を以て、直に神の至誠と上に相通じ、而して人世百般の事に處するのには、科學的に横へ擴がる。其の縦の線と、横の線とが、我が中心に於て、交差して神聖十字架を造る」。

「神は自然の法則のもとに凡てを興え、凡てを備へ給ふ。我が聖中心を磨いて、其れを受けるやうにせねばならぬ」

「讀書するならば、本の中に、脈を快くならは釜の中に、裁縫するのには、針の中に、凡て我が無心の心を入れて、やらねばならぬ。それには、正しい姿勢を、執らなくては、駄目だ」。

「宇宙無限の寶庫の扉は、我が中心にある。人類最上の樂みは、其の不朽の道を、我が中心に啓くにある。其れは一切を照す光明界であり、何ものにも、煩はされぬ自由境である」。

「大なる者は、自らの大を知らず。これ其の大なる所以である。眞中心に徹したる者は、眞中心を知らず。これ即ち眞中心の精華である」。

「道念よりして、神の至善を見、情操よりして、神の純美を見、理性よりして、神の明智を見、中心よりして、神の全能を見る。」

「正中心に徹すれば、生も道、死も道、笑つて生き、笑つて死することが出来る。生を厭ひ、死を厭ふ。共に道に反くものである。生なくんば死なく、死なければ、生なし。生は死を産み、死は又生の母である。生死を明かにするの道は、先づ我が正中心に悟入するにあり」。

「無限には、中心が無い。無限に對しては、到る處、凡て中心である。中心の中に居て、中心を得ないとは、何たることであらうぞ」。

「完全なる中心力は、一寸無心が破れても、もう駄目だ。正中心力は、期せずして、心身の一切を、清純ならしめる其れは、腰腹の中心に潜む、ダイヤモンドの寶庫だ。たが多くの人は、終生其の扉を開かない」。

「一方に於て無常は、一方に於ては、不斷新である。けれども、無常の時には、新なく、新の處には、無常なし。然

らば即ち、無常、不斷新の處には、無常なく、不斷新なし。獨り存するものは、時空を絶せる道これのみ。道は即ち、万古一貫して、永恒に連る」。

「八十年の歲月を費した、金壁燦爛たるソロモンの大神殿も、幾度かの外寇に、見る影もなくなつて仕舞つたけれども、荒れ野に咲く一輪の山百合には、世界を通じ、宇宙を貫く神の生命が、永遠の懽喜に、輝いて居る」。

「我が正中心を修めて、魂の輝きを作る。そして、眞理の精神に活きるのだ。其處に明智明德と、純美が生れる。其れによつて、順境逆境、共によく處して行くことも出来るのだ」云々。

二人とも、身動きもせず、眼を決めて熱心に聽いては居つたが、チと六づかしかつたかな——。

▽天真の大生命を仰ぐ

昭和十年一月十六日早晩、五時半起床、外はまた眞暗だ。電燈の下で、大中心力練修法を行ふこと二十回、其れから湯殿へ行つて、清冽な寒水を浴へた、風呂呂——其れは遠く、表山の頂近くの岩窟から湧き出るのを、竹の樋で引いて、壺所と湯殿へ溜めて居るものである。——へ飛び込んで、寒冷刺戟の美味を樂しんだ。ジリツ、ジリツと、皮膚は針で刺されるかのやう。ジイツと、頭まで沈めて居るさ、まるで、お湯に這入つて居るやうな氣持だ。熱い刺戟も、冷たい刺戟も、結局は同じ刺戟に過ぎない。

風呂から上つて、太い棕櫚繩へ、洗濯石鹼を塗たぶり、全身、足の先から、背中から、腕から、頭まで摩つた。其れからトタンの小桶で、ジャブリくさ、頭から十數杯被つて、石鹼を落さし、再びセメントの風呂の中へ、靜かに這入